

韓屋におけるチェ(建物)とマダン(庭)との関係からみた住み方に関する研究

金 海 梨

目 次

第 1 章 序論

1.1 研究の背景	3
1.1.1 韓屋を取り巻く動向	3
1.1.2 チェとマダンとの関係について議論する意義	7
1.2 研究の目的と課題	12
1.2.1 研究の目的	12
1.2.2 研究の課題	12
1.3 研究の対象と方法	14
1.3.1 研究の対象	14
1.3.2 研究の方法	17
1.4 既往研究と本研究の位置づけ	22
1.4.1 既往研究	22
1.4.2 本研究の位置づけ	25
1.5 論文の構成	26
1.6 用語の定義	27

第 2 章 文学作品に見る戦後激動期の韓屋における住み方

2.1 はじめに	35
2.2 対象住宅の現在に至るまでの経緯	37
2.2.1 日本統治時代から朝鮮戦争直後までの状況	37
2.2.2 対象地域の状況と住まい手の属性	37
2.3 改修後の住空間の現状	40
2.3.1 チェとマダンによる住空間構成の持続と変容	40
2.3.2 チェとマダンの形態の持続と変容	42
2.4 住空間の使われ方に見る住み方の現状	42
2.4.1 チェの使われ方	42
2.4.2 マダンの使われ方	44
2.5 小結	46

第 3 章 近代都市化に伴う住要求に対応した韓屋における住み方

3.1 はじめに	51
3.2 対象住宅の現在に至るまでの経緯	53
3.2.1 建物の概要と住まい手の属性	53
3.2.2 改修内容と改修後の住空間の現状	53
3.3 住空間の使われ方に見る住み方の現状	60
3.3.1 チェの使われ方	60
3.3.2 マダンの使われ方	60
3.4 チェとマダンとの関係	62
3.4.1 出入口の消滅及び縁側の内部化による関係の希薄化	62
3.4.2 チェの使われ方の閉鎖化による関係の希薄化	62
3.5 小結	65

第4章 住まい手の多様な価値観に対応した韓屋における住み方 - 韓国人の事例 -

4.1 はじめに	69
4.2 対象住宅の現在に至るまでの経緯	70
4.2.1 建物の概要と住まい手の属性	70
4.2.2 入居のきっかけ	70
4.2.3 改修内容と改修後の住空間の現状	73
4.3 住空間の使われ方に見る住み方の現状	76
4.3.1 チェの使われ方	76
4.3.2 マダンの使われ方	83
4.4 チェとマダンとの関係	84
4.4.1 チェとマダンからなる住空間の維持と変化	84
4.4.2 チェの空間同士の関係の維持と変化	85
4.4.3 チェとマダンとの関係における特徴	87
4.5 小結	88

第5章 住まい手の多様な価値観に対応した韓屋における住み方 - 外国人の事例 -

5.1 はじめに	93
5.2 対象住宅の現在に至るまでの経緯	94
5.2.1 建物の概要と住まい手の属性	94
5.2.2 入居のきっかけ	97
5.2.3 改修内容と改修後の住空間の現状	98
5.3 住空間の使われ方に見る住み方の現状	100
5.3.1 チェの使われ方	100
5.3.2 マダンの使われ方	103
5.4 チェとマダンとの関係	104
5.4.1 P 邸におけるチェとマダンとの関係	104
5.4.2 R 邸におけるチェとマダンとの関係	105
5.5 小結	105

第6章 結論

6.1 各章で得られた知見	109
6.2 結論	113
6.3 今後の課題	114

既報論文・著作一覧	119
資料編	125
謝辞	129

第 1 章

序論

1.1 研究の背景

本研究は、韓国における伝統的木造住宅である「韓屋^{注1)}」(「ハンオク」又は「ハノク」と読む)について、屋内空間である「チェ(建物、以下、チェと記す)」と屋外空間である「マダン(庭、以下、マダンと記す)」がつながった住空間の形式に対応した住み方に着目する研究である。また、本研究は、韓屋における物理的性能改善や量的供給の拡大を目指して急速に展開されてきた近年の新しい韓屋開発の現状を建設的に批判し、住まいとしての韓屋をどのように継承発展させていくべきかについて問い直そうとするものである。本研究の特色は、異なる属性を持った少数の事例を取り上げ、韓屋という住まいにおけるチェとマダンがつながった住空間形式と住まい手の住要求との対応を探る点にある。

本節では、韓屋を取り巻く近年の動向を把握し、既存韓屋の持続的活用や新しい韓屋開発の現状において屋内外の関係を考慮した住空間の計画や住み方の実現のための知見が不足していることを示す。また、韓屋の住空間とそれに対応した住み方に関する理論の検討により、韓屋におけるチェとマダンとの関係について議論する意義を示す。

1.1.1 韓屋を取り巻く動向

(1) 韓国における住宅の現状

2015年11月1日現在の韓国の住宅総数は1,637万戸で、2010年1,475万戸より162万戸(11%)が増えている。全体住宅で区分所有の共同住宅^{注2)}(以下、「アパート」と記す)が占める割合は981万戸(59.9%)で圧倒的に多く、戸建住宅は397万戸(24.3)を占めている。図1-1は、住宅類型別数の推移を示したものである。1995年から2015年までアパートは増えつつあり、戸建て住宅は減ってきたことが分かる。図1-2と図1-3は、韓国における地域ごとのアパートの割合を示したものである。1985年から2015年に至るまで、アパートの割合は3倍以上増えている。それらの資料から、韓国における

注1) 「韓屋」とは、開港(1876年)とともに西洋の建築が伝来した以降、在来(在来)の建築と外来の建築を区分するために新しく作られた用語である。一般的に、韓国の地域に根ざした木造の戸建て住宅を総称して韓屋という。広義では住宅以外の建物も含めて韓国固有の様式で建てられた伝統的な木造建築を総称する概念として使われる。時代の流れで構法や材料の変化に伴い「伝統韓屋、都市韓屋、新韓屋」など概念が存在する。韓屋は、広い意味では韓国に建てられてきた建築物のすべてをいい、狭い意味では住宅のみを指す。なお、高麗時代から李朝時代(918-1910年)の貴族住宅が伝統韓屋、1930年代から1960年代にかけて都市の中産層向けに供給された都会型住宅が都市韓屋と呼ばれる。建築法に韓屋という用語が表れたのは2010年の建築法施行令が一部改定されてからで、「韓屋」とは、柱および梁が木構造方式で、韓式屋根の枠を持った構造として我が国の伝統様式が反映されている建築物および付属建築物をいう。」と定義されている。用途に係る規定はされておらず、これまでと同様に住宅以外の建物も視野に入れて韓屋の概念が定義されている。韓屋は木造の軸組で瓦葺の屋根である。伝統韓屋では、松材を中心とした無垢の木と土、石、紙などの自然素材が使われる。伝統韓屋においては、木は柱などの構造材として使われる。紙は障子などの建具の材料として使われる。土は屋根や壁の材料として使われる。ハギや黍の茎をなわで組み合わせて土を張って壁を仕上げる。石は基壇や礎石の材料として使われる。都市韓屋では伝統韓屋と同様、構造は木造の軸組である。材料は上記の自然素材に加えて、伝統韓屋では使われない近代的建築材料が積極的に導入されている。例えば、ガラス、トタンや銅板などの鉄物、レンガなどがあげられる。

注2) 韓国では区分所有の集合住宅は、アパート、連立住宅、多世帯住宅の3つの種類がある。日本の高層マンションに当たるものが韓国では「アパート」と呼ばれる。「連立住宅」と「多世帯住宅」は、複数世帯が入る低層階の住宅を指すが、連立住宅は1棟の建築延べ面積が660㎡以上の4階以下の集合住宅を言う。多世帯住宅は1棟の建築延べ面積が660㎡以下の4階以下の建物で2戸以上9戸以下規模の集合住宅を言う。

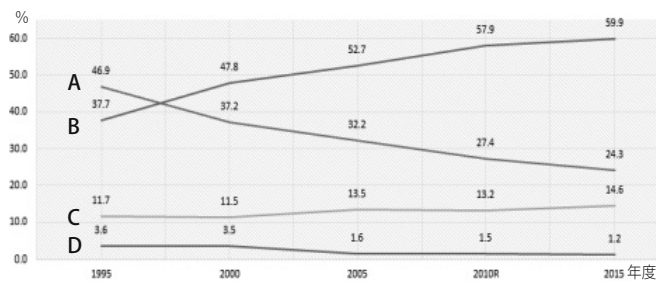


図 1-1 住宅類型別数の推移

(2015 年人口住宅総調査統計資料)

A 戸建住宅

B アパート(マンション)

C 連立・多世帯住宅 (注 2)

D 非居住用建物内住宅

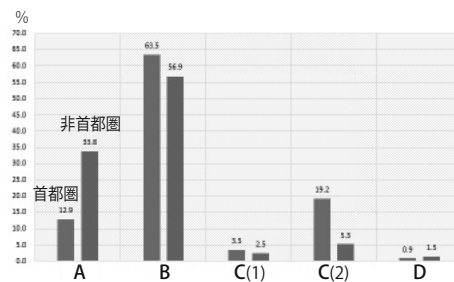


図 1-2 住宅類型の割合

(2015 年人口住宅総調査統計資料)

A 戸建住宅

B アパート(マンション)

C (1) 連立住宅

D 非居住用建物内住宅

C (2) 多世帯住宅

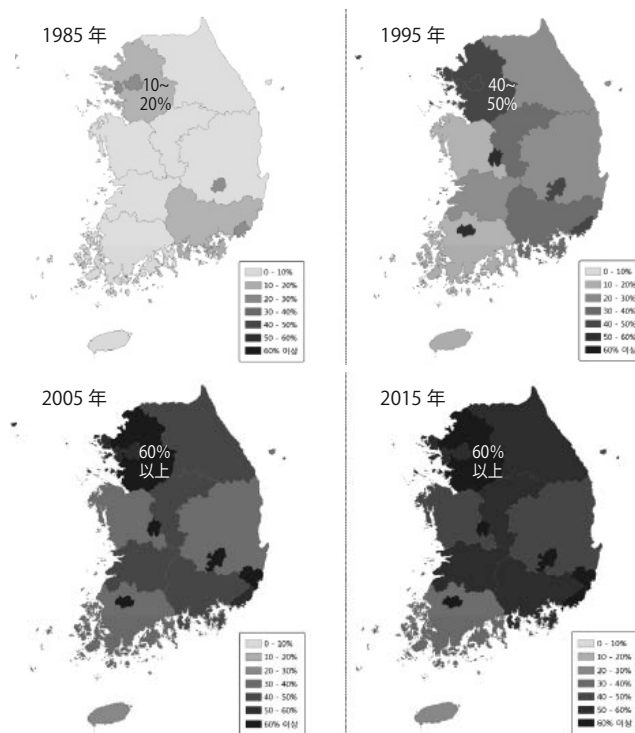


図 1-3 年代別アパートの割合

(2015 年人口住宅総調査統計資料)

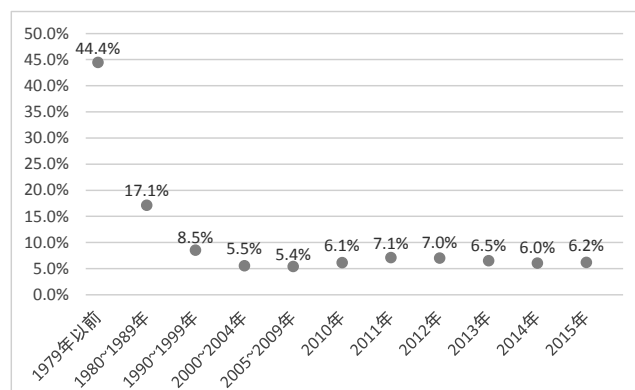


図 1-4 建築時期別の戸建て住宅の割合

(2015 年人口住宅総調査をもとに作成)

住宅の大半はアパートであることが分かる^{注3)}。

全国に散在している韓屋の全数調査はまだ完了してないが、2014年12月発表された韓屋統計調査のための基礎調査資料がある^{注4)}。この資料では、現在の全国建築物総数は6,911,288棟で、そのうち木造建築物数は1,437,853棟で全体の20.8%を占めていることが確認されている。なお、全体建物数(6,911,288棟)の中で木造でありながら瓦葺の屋根となっているものは590,742棟で全体の8.5%を占めていることが確認されている。韓屋の定義については現在も議論されつつあるが、先述の資料では、建築基準法上「韓屋」とは、柱および梁が木構造方式で、韓式屋根の杵を持った構造として我が国の伝統様式が反映されている建築物および付属建築物をいう^{注5)}と定められていることから、全体建築物のうち木造でありながら瓦ぶきの屋根を持った建物の数を抽出している。8.5%とはいえ、その中には社寺などの住宅以外の建築物も含まれているため、住宅としての韓屋はさらに少ないことが推定できる。

韓屋の数が少ないのは、韓屋を取り巻く法制度や朝鮮戦争の勃発とも影響している。朝鮮戦争以降の復旧事業に伴い、1960年代以降は民間業者によって建設される洋屋が住宅市場の大半を占めるようになった^{注6)}。戦後、韓国の経済状況は荒廃化し、海外の援助に頼って経済復興を図っていた段階だったため、欧米式のブロック造住宅が都市部に建てられていた^{注7)}。以降、経済開発が本格化する1960年代から1980年代まで、住宅業者によって異国的外観を持った洋屋が大量建設された。さらに、1962年制定された建築法により韓屋建築の新築は実質的に難しい状況となり、木造の調達も難しくなっていった。当時の建築法では、近代の煉瓦造、鉄筋コンクリート造、鉄骨造などの建築物を対象としていたため、木造の軸組である韓屋を新築又は建替えるには不利な条件だった^{注8)}。また、文化財として指定されてない一般の韓屋の場合、所有者の意志によって管理されるようになっており、韓国固有の住文化が培われてきた住空間とはいえ、韓屋の保存や育成に向けた社会的合意は形成されにくい実情だった。そのため、韓屋は古くて不便な住宅として軽視され、放置されるとともに老朽化が進んでいった。そのような現状に伴い、既存韓屋を維持又は現代の住生活に合致した住空間として改善していく余地は少なくなり、撤去による滅失が急増した。ソウル市の韓屋全数調査によると、1961年28,766棟あった韓屋が2006年22,672棟、2008年13,703棟で約100,000棟程度の韓屋が滅失されていることが確認されている^{注9)}。一方、1960年代以降は、以前まで韓国住宅市場の主流にあった韓屋が主流から外れていき、煉瓦造の住宅が主流となっていったことも指摘されている。その原因としては先述した当時の建築法の影響、また、木材調達が難しくなった点などがあげられている^{注10) 注11)}。図1-4は、韓国における建築時期別戸建

注3) 2015年人口住宅総調査統計結果を参照。2016年12月時点で公表されていた内容をもとに作成している。

注4) Kangmin Lee 他4人：2014韓屋統計白書(Annual Hanok Statics 2014), p.112, 2014.12

注5) 建築法施行令(2010年2月18日施行、大統領令第22052号、2010年2月18日一部改訂)「第2条(定義)の第16項。

注6) Jeon Bonghee, Kwon Yongchan 共著：韓国と韓国住宅の歴史, Dongnyok, p.189, 2012

注7) ソウル市政開発研究院：ソウル20世紀空間変遷史, ソウル市政開発研究院, pp.254-257, 2001

注8) たとえば、軒の長さとの関係で建蔽率が不利になる点や、敷地と道路との関係で道路の幅員が4mにならない場合敷地の境界を後退しないといけない点、木造建築に対する構造基準が欧米の木造建築の構造を対象として定められており、伝統構法(木造の軸組)では法的基準に合致してない点などがあげられる。

注9) ソウル特別市・Korean National Commission for UNESCO: The 20th Century Urban Cultural Heritage in Our Daily Life - UNESCO Asia-Pacific International Forum on the Preservation of Urban Cultural Heritage -, Korean National Commission for UNESCO, p.26, 2010

注10) Jeon (2012), 前掲, 注6) pp.167-170 参照

注11) 木材の調達が難しかった点は、朝鮮戦争による森林の荒廃化、そのような現状を乗り越えるための林業政策から影響を

て住宅の割合である。1979 年時点では全体建設件数のうち戸建住宅が 44.4% を占めていたが、それ以降は顕著に減ってきており、韓屋の建設も少なかったと推察できる。以上から、韓国では、1960 年代以降は韓屋以外の住宅建築が住宅市場の主流となり、韓屋の建設は低迷していたといえる。

(2) 近年の新韓屋開発の動向

近年韓国では、住宅の量的な充足があると共に^{注12)}、経済的成長を遂げた自国の文化の再評価、アパート一辺倒の画一的な居住形態に対する反省などから、韓屋に注目が集まっている。国土海洋部から行ったアンケート調査の結果によると、回答者の 41.9% が韓屋居住を希望しており、韓国における住宅の大半を占めているアパート居住を希望 (29.3%) より多いことが確認されている^{注13)} (図 1-5)。一方、韓屋居住を希望しない理由として、現代の生活に合致しないと応答した人が 38.5% であり、韓屋は古い住宅であると認識されていることが分かる (図 1-6)。国家韓屋センターによる 2012 年の韓屋需要調査結果によると、回答者の 53.1% が韓屋居住を希望しており、アパート (28.7%) や戸建住宅 (16.0%) より圧倒的に多いことが確認されている^{注14)}。

また、地球環境問題の深刻化に伴う環境政策の強化などから求められる環境に配慮した木造住宅としての韓屋が再評価されている^{注15)}。韓国政府では既存韓屋の保全・再生^{注16)}にとどまらない新しい韓屋の

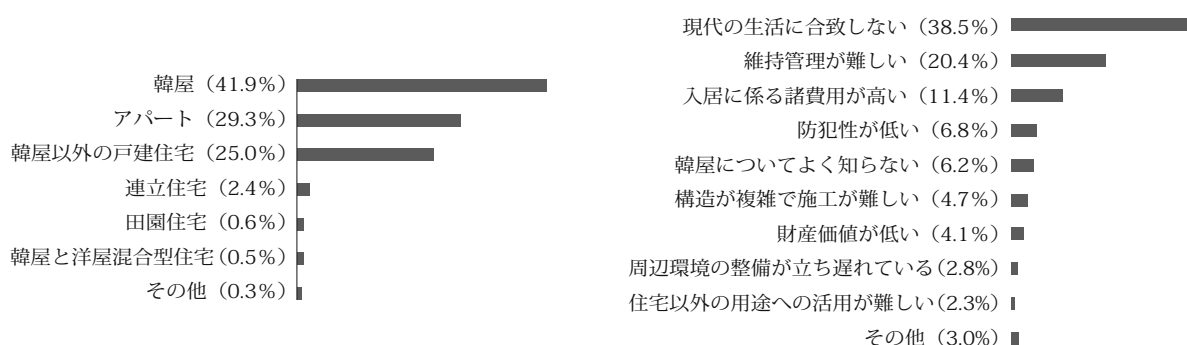


図 1-5 韓屋居住希望の需要
(2008 年国土海洋部韓屋需要調査をもとに作成)

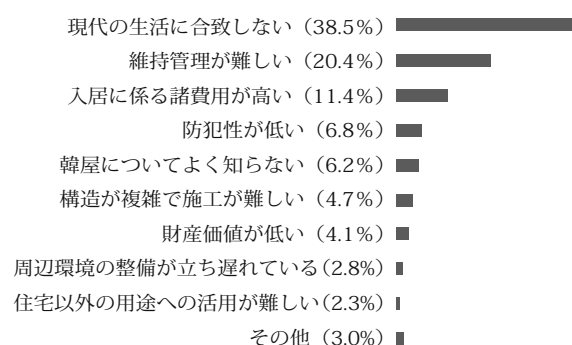


図 1-6 韓屋居住を希望しない理由
(2008 年国土海洋部韓屋需要調査をもとに作成)

受けていたといえる。1960 年代初までの韓国経済は、調査緑戦争以降の生産施設の破壊、過剰人口及び資源不足のため、主に米国の援助に依存していた。1962 年には経済開発 5 年計画が樹立され、第 1 次計画 (1962-1966) では自立経済の基盤構築に向け、工業戦略として基礎産業の整備と社会間接資本 (建設、電力、ガス、水道、交通、倉庫、通信業など) の整備が主要課題としてあげられたが、特に国際収支の改善の必要から輸入代替産業の計画的な開発が重視される中で、国産木材は国内の緊急事業の用材に限られていた。

注 12) 2011 年秋の人口住宅総調査の結果によると、韓国の住宅普及率は、ソウル (97.0%)・釜山 (99.9%)・済州 (97.4%) 以外の地域ではすでに 100% を上回っている (国家指標システム Hp <http://www.index.go.kr/potal/main/PotalMain.do> から)。

注 13) 国土海洋部：한옥 환경성 평가 및 한옥건축 활성화 추진방안 연구 1；韓屋の環境性評価及び韓屋建築の活性化推進法案研究 1, 2010

注 14) Kyungmi Sim, Sunyoung Seo：A Study on Characteristics and Demand of Recent Hanok Occupants, AURI, 2012.5)。

注 15) 韓屋の特徴は、自然との共生の仕組みである。韓屋では、松材を中心とした無垢の木と土、石、紙などの自然素材が使われる。また、夏の暑さをしの風通しの良い開放的な板張り空間と、冬の厳しい寒さをしのぐための床暖房設備が備わったオンドル部屋とを組み合わせた間取りは、夏と冬の両方を旨とした環境適合型住宅の明快なモデルである。

注 16) ソウル市における韓屋保存政策は、韓屋密集地域である北村 (ブッチョン) を対象として 1980 年代に開始された。当初は景福宮や青瓦台周辺の歴史景観を維持管理するためだったが、韓屋が国の歴史文化や観光の資源として再評価され、2001 年からは韓屋の改修に対する補助制度や融資制度が充実し、既存韓屋の保全・再生が進められた。このような制度は、2008 年の「ソウル韓屋宣言」をきっかけで北村以外の韓屋密集地域においても適用することになり、これまでの政策支援を拡大・強化している。ソウル特別市 (2010), 前掲, 注 9) pp.177-191 参照

開発に向けた政策推進に係る研究体制を本格化するために2011年5月に国家韓屋センターが設立され、関連政策が急速な展開を見せている^{注17)}。同センターでは、既存韓屋の文化的側面や環境的側面の研究に加えて韓屋の産業化のための政策を支援し、韓屋の普及開発を促進していくことを目指して様々な課題に取り組んできた。

一方、これまでの議論が、現代の住生活に合致した住宅としての韓屋のあり方はもちろんのこと、森林資源が乏しい中での木材の調達、アパート建設に特化した生産組織の再構築、坪100万円以上するコストの削減、伝統技能をもつ職人の育成など、といった課題の解決を中心に行われている実情である。そこで、新しい韓屋の開発についての議論が建物の量的増加を目指して生産システムを改善することに偏っている現状も指摘されている^{注18)}。新しい韓屋のあり方の充実に寄与する知見を得るためには、既存韓屋の住空間やそれに対応した住み方について十分な検討が不可欠である。

1.1.2 チェとマダンとの関係について議論する意義

韓国では、木造建築文化を基軸として地域に根ざした木造住宅「韓屋」が存在してきた。韓屋は、広い意味では韓国に建てられてきた建築物のすべてをいい、狭い意味では住宅のみを指す^{注19)}。一般的に、李朝時代の貴族の住んだ住宅が伝統韓屋、1930年代から1960年代にかけて大都市を中心に供給された都会型の住宅が韓屋と呼ばれる。

韓屋の特徴は、自然との共生の仕組みである。韓屋では、松材を中心とした無垢の木と土、石、紙などの自然素材が使われる。北方で発展したクドウル^{注20)}を設けたオンドル房と、南方に由来する板張りの大庁(デチョン、以下、大庁と記す)^{注21)}が一つの建物の中に共存するのが、住宅としての韓屋の代表的な特徴である。閉鎖的なオンドルと房と開放的なマル^{注22)}が互いに相反する構造であるにもかかわらず、両者の個性が尊重されながら共存している。これは北方文化と南方文化の融合という点で文化的な意義も非常に大きい^{注23) 注24)}。夏の暑さをしのぐ風通しの良いマルと、冬の厳しい寒さをしのぐための

注17) 国土海洋部国土研究院に付属している建築都市空間研究所(Architecture & Urban Research Institute、略称AURI)では、2007年より韓屋の現代化に向けた調査研究が開始され、それを基礎に2010年に国家建築政策委員会と国土海洋部が大統領に報告した「国格向上のための新韓屋プラン」を受けて、翌年5月「国家韓屋センター」が同研究所に設立された。筆者らは、同年9月に国家韓屋センターを訪ねて、センター長及び研究委員、また、政策作りに係っている建設事業者、木造建築協会関係者に対するインタビュー調査を行い、韓屋を取り巻く政策の流れや韓屋の普及促進における問題、それらに対する今後の実践課題などについて聞くことができた。同センターでは、住宅以外の建築も視野に入れた新韓屋の「産業化」に向けた政策研究を行っている。また、関連情報の発信や人材育成などを促進するための政策研究も行っている。

注18) Shin Chihoo, Lee Sejin: A Study on the Policy of Revitalizing Hanok Market through Creating Effective Demand, 韓国建築都市空間研究所(AURI), p.22, 2012による。韓屋の量的増加や精算システムの産業化に注目して以下のような研究開発事業が行われている。国土海洋部: 한옥건축 산업화 추진을 위한 기술기반 구축기획 연구 1; 韓屋建築産業化のための基盤構築研究 1- 韓屋建築振興のための制度基盤構築研究 -, 2007.8、国土海洋部: 한옥건축 산업화 추진을 위한 기술기반 구축기획 연구 2; 韓屋建築産業化のための基盤構築研究 2- 韓屋建築産業化促進のための技術基盤構築研究 -, 2007.8

注19) 申榮勲著、西垣安比古監訳: 韓国の民家、法政大学出版局, p.179, 2005

なお、この文献の原典は次の通りである。申榮勲: 한국의 살림집—韓国伝統民家の原型研究—, 悦話堂美術選書, 1983

注20) 部屋の床下に火気が通る煙道を設けて暖房するオンドルの構造体である。

注21) 建物の中央にある広い部屋を指す。また、板張り空間を総称して「マル」と呼ぶ。

注22) 床を板張りにした部屋、または板張りそのもののことを指す。

注23) 申榮勲(2005)、前掲、注19)

注24) オンドルとマルの起源や伝播についての議論は、韓国の住宅に対する研究の初期段階から続けられてきたテーマである。韓国の住宅に対する研究の初期段階に行われた議論として、朝鮮・韓国の建築について調査研究活動をしていた日本の建築史

床暖房設備が備わったオンドル房とを組み合わせた間取りは、夏と冬の両方を旨とした環境適合型住宅の明快なモデルである。

一般的に、高麗時代から李朝時代(918-1910年)の貴族住宅が伝統韓屋、1930年代から1960年代にかけて都市の中産層向けに供給された都会型住宅が都市韓屋と呼ばれる^{注25)}。伝統韓屋と都市韓屋のモデルを図1-1に示す。また、住空間の使われ方の概要を表1-1に示す。

伝統韓屋では、複数のチェとそれに属した複数のマダンが一体となって一つの住宅が形成され、また、チェとマダンがつながった住空間構成に基づき、季節ごとの建具の開閉や空間の使い分けにより、住まい手が自ら屋内外の関係を調整することで、人と自然が調和した居住文化を育んできた。なお、伝統韓屋では、身分や性別による空間の秩序が明確な住空間とそれに対応した生活がなされていた。身分の低い使用人たちは、家全体の出入り口である大門から近いところにある行廊棟に住む。大門を通ると、男性の使う「舎廊棟」(サランチェ、以下、「舎廊棟」と記す)が家の表の方に位置し、女性の使う「内棟」(アンチェ、以下、「内棟」と記す)が一番奥の方に配置される(図1-1)。また、外部空間の使われ方においては、「使うためのマダン」と「見るためのマダン」が共存することが特徴である(表1-1)。

1930年代から1960年代にかけて都市の中産層向けに供給された都会型住宅が都市韓屋では、都心の狭い敷地を有効に活用し、チェとマダンが一体となった伝統韓屋の空間構成の特徴を取り入れている。また、伝統韓屋では使われない近代的建築材料が積極的に導入されている^{注26)}。なお、伝統韓屋に存在していた舎廊棟はなくなり、同じ敷地内に借家世帯を収容しやすい間取りに変わるなど、住空間の計画に変化が見られる。土地節約のため、平面の形はL字型やコ字型などの曲家が多く、場合によっては敷地境界線まで建物が建てられ、最外壁が道に直接面していることもある。そのような変化に伴い、マダンは都市韓屋の住空間に残された唯一の外部空間となり、動線を中心となっている^{注27)}。なお、都市韓屋では身分や性別による空間秩序は見られない。伝統韓屋における内棟と内庭(アンマダン、以下、「内庭」と記す)による空間構成が残される。また使われ方においては、チェでは「家族が日常生活を行う母屋」として使われていた伝統韓屋の内棟、マダンでは「様々な生活行為を行う外部空間」として使われていた伝統韓屋の内庭の機能が残っていることが一般的である(表1-1)。都市韓屋は現在も残存しており、住宅の物理的状态や住生活実態について実証的検討が行われている^{注28)}。

家藤島亥次郎と村田次郎による論争は代表的である。村田は、マルという住空間が南方から由来したとする一般学説について、自分の民家調査経験から「マルの起源は気候ではなく接客や儀礼のために設けられた空間である」と反論を提起した。むしろ「大陸の中心部から朝鮮半島の中央上流階層に伝播され、徐々に一般の庶民住宅にも拡散していった」と主張している。これに対して藤島は、朝鮮半島の南地方にある済州島の民家建築に対する調査経験から「マルは暑い気候の南方建築に由来する」と反論を提起した。関連する文献を以下に示す。

村田次郎：南鮮民家の家構私見，朝鮮と建築，第4巻第7号，朝鮮建築学会，1925、藤島亥次郎：抹樓の起源に就いて村田さんの説を評し併せて自己の意見に及ぶ，朝鮮と建築，第4巻第8号，朝鮮建築学会，1925、村田次郎：言って置きたいこと(主として藤島学兄へ)，朝鮮と建築，第4巻第10号，朝鮮建築学会，1925

注25) 1960年代以降は、木材調達が難しくなっている点、また、建築法律が木造建築の建設に不利な条件に変わった点などによって韓屋は住宅市場から押し流されるようになり、煉瓦造住宅が主流となっていった(Jeon Bonghee, Kwon Yongchan 共著：韓屋と韓国住宅の歴史，Dongnyok, p.167, 2012)。

注26) 近代的建築材料として、ガラス、トタンや銅板などの鉄物、レンガなどがあげられる。

注27) Jeon (2012)，前掲，注6) pp.151-161 参照

注28) 筆者らは、これまで都市韓屋の変容・再生活用事例について一連の調査研究を行ってきた。その結果、都市韓屋ではチェとマダンからなる住空間の形式をもとに、住設備の改善や建物の部分的な増改築を加えることにより現代の生活に対応できていることを確認した。関連する検討内容は以下の既報論文に報告している。

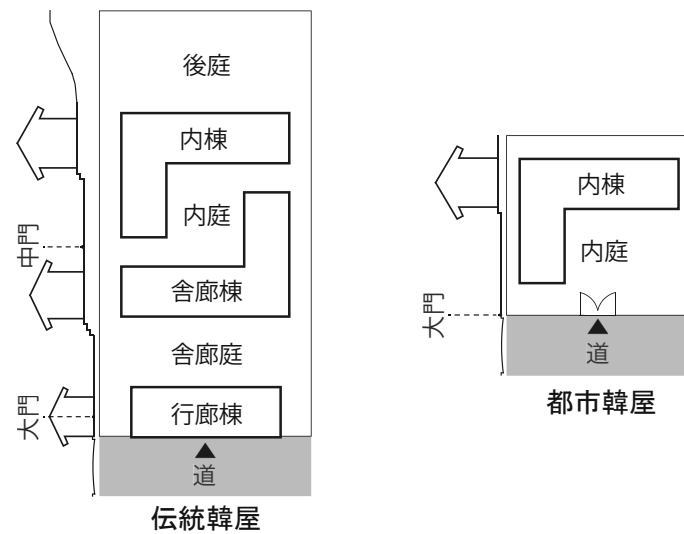


図 1-7 伝統韓屋（左）と都市韓屋（右）のモデル

表 1-1 韓屋の住空間との使われ方の概要

名称（読み方）	空間の概要	
内棟 (アンチェ)	主婦（女性）の主な起居空間。家族が日常生活を行う母屋で、敷地内で一番奥の方に配置される。	チェ
舎廊棟 (サランチェ)	家長（男性）の主な起居空間。内棟と分離した対社会性を備える住棟で、外の社会に向けた空間である。接客を意識した主人の生活の場として位置づけられ、内棟より表の方に配置される。	
行廊棟 (ヘンランチェ)	使用人の部屋、倉庫、便所、家畜舎などで使われる空間。内棟と舎廊棟の外側をさらに取り囲むように一列に並べた囲いの住棟である。敷地の一番表の方に配置される。	
内庭★ (アンマダン)	内棟に面する庭。様々な生活行為を行う外部空間であり、井戸の周りに小さな花壇が作られる程度で、ほとんどが土のままになっている。塀や舎廊棟などに囲われた中庭を指す場合が多い。	マダン
後庭★☆ (トイマダン)	内庭の後ろにある庭。内庭と同様に内棟での家事をサポートする空間として使われる。ほとんどの生活を内庭で行う女性が自然を觀賞できるように花壇や花階を作る。	
舎廊庭☆ (サランマダン)	舎廊棟に面する庭。舎廊棟からの觀賞用の庭として、樹木や植栽で美しく整えられる。	

★使うマダン ☆見るマダン 網掛 都市韓屋に引き継がれた要素

しかし、変容の現状を明らかにしたものであり、伝統韓屋から都市韓屋に至るまでチェとマダンがつながった住空間が持続する理由や、実際の住み方との対応関係については実証的に検討されてない。「チェとマダンからなる住空間の形式」及びそれに対応した「住み方」は、韓屋という住まいの重要な特徴として少なからず指摘されてきた。表 1-2 は、伝統韓屋の住空間におけるチェとマダンとの関係からみた住み方について指摘している既往文献の記述をまとめたものである^{注29)}。複数の学者によって、チェとマダンからなる住空間の形式は伝統から現代にいたるまで単に物理的に存続してきたものではなく住まい手の日常生活と対応してきたこと、韓屋における自然との共生の仕組みにおいてマダンの存在は大事であること、マダンとは外の部屋であること、マダンはチェの分化を成立させる緩衝空間であること、などが指摘されている。以上から、韓屋におけるチェとマダンとの関係について議論することは、チェとマダンとの関係を大事にして培われてきた韓屋の生活文化を継承・発展させていく上で大変重要な検討課題だといえる。

一方で、以上のような観点から韓屋におけるチェとマダンからなる住空間やマダンの価値を見直すための実証的検討や、それに基づいた今後の韓屋計画のあり方についての検討は必ずしも十分ではない。特に、近年の新韓屋開発の動向をみると、伝統的な韓屋の外皮を取り入れつつ住宅内部の気密性や断熱性を高めることを最優先にしており、チェとマダンとの関係にもとづく生活の良さが十分に配慮された計画だとは言えない^{注30)}。

住宅における持続と変容は、時代や社会の状況のみならず、住まい手の住要求や考え方にも影響を受ける。そのため、韓屋についてより本質的な議論が行われるためには、物理的空間関係のみならず、それに対応してきた住み方について究明する必要がある。これはチェとマダンとの関係を大事にして培われてきた韓屋の生活文化について議論する上でも重要な手掛りになると考えられる。伝統韓屋の皮相的踏襲を乗り越え、より本質的に今後の韓屋のあり方について議論するためには、韓屋の住空間やそこで営まれてきた日々の生活について十分に検討することが不可欠である。

韓屋という住まいの過去と現在、未来について論じるときに、単に外見や設備、素材などの差にとどまらず、住空間そのものに内在している要素は何かを探る必要がある。そのために、伝統韓屋から現在に至るまで引き継がれている「チェとマダンからなる住空間」と「住まい手の生活」との対応を実証していくことは極めて重要な課題であるといえる^{注31)}。なお、このテーマは、韓国と同様に木造の建築文化

金海梨, 高田光雄: 都市韓屋におけるマダン(庭)の変容に関する調査研究, 日本建築学会住宅系第7回研究報告会論文集, pp.123-128, 2012.11, Kim Haeri, Takada Mitsuo: A Study on the Relation between Chae and Madang based on the Way of Living in Urban Hanok, Proceeding of Autumn Annual Conference of the Korean Housing Association, pp.185-190, 2012.11

その他に、都市韓屋密集地域の保全再生計画に向けた基礎調査として実施されたソウル市による一連の調査がある。

ソウル特別市: 북촌가꾸기 기본계획 - 한옥실측도면집; 北村を作る基本計画 - 韓屋実測図面集, 2001.12, ソウル特別市: 경복궁서측 제1종지구단위계획 - 인문역사환경 및 한옥조사 보고서; 景福宮西側第1種地区計画 - 人文歴史環境および韓屋調査報告書, 2010.6

注29) 表 1-2 に示した内容以外に、次のようなものがあげられる。“韓国伝統住宅のマダンは外部空間ではあるが、チェと一体化した空間として内部空間で遂げられなかった居住機能を遂行する空間である(筆者翻訳)(Park Eunyeong: Modern Division of the Style of Gardens Presented in Korean Traditional House Yard, Journal of Korean Institute of Traditional Landscape Architecture, vol.29, no.2, pp.28-38, 2011)。”

注30) 近年の新韓屋開発は、2011年、大統領令による国家韓屋センター設立以降、政策推進のための研究体制を本格化し、急速な展開を見ている。その前身になった国レベルでの動きは2007年からで、主に韓屋における冷暖房設備の改善や構築技術の産業化などを目指した研究開発が行われてきた。関連する内容は、前項の1.1.1にも述べている。

注31) Hidegger は、「人間の生存は究極的に自分を取り巻く環境との関係を設定することである。建物は人間の思惟と空間の間の関係を調節する役割を果たすものであり、それが“居住(dwelling)”であると指摘している(Martin Hidegger 著, Alfred

表 1-2 チェとマダンとの関係からみた住み方に関連する指摘

関連する記述	出典
○ 庭は真土をつきかためたもので、芝などを植えることはない。また家で祝宴をする時に、ここに蓆を敷き並べて、内部空間の延長とすることがある。この庭はまた穀物を干したり、唐辛子を処理したりなど多くの農作業や家事労働を行うところでもある (p.168)。	野村孝文 ：朝鮮の民家—風土・空間・意匠—，学芸出版社，1981
◎ 春のあたたき空気の漂う韓国住宅のマダン（庭）には、生動する自然の気に満ちた建築の姿があり、太陽のじりじりと照りつける暑い夏のマダンには、はたらきや住む人間と土地との関係が具体的な空間となって、われわれに現れてくる。韓国の住宅は《中略》人間の生活を営む建築が、季節の変化とともに変わる空と土地の様子に、どのように密着していくかを実態的に表している (p.4)。 ○ 韓国の外部空間は、共同体の意識のための開放的な空間と、個人の生活のための閉鎖的な空間というふうに、空間の使い方によって区別される。《中略》「空いて」はいるが具体的な機能をもった閉鎖的な場所《中略》韓国では、このような性格の外部空間を「マダン」と呼んでいる。《中略》それは日常生活の中では仕事場として、また休み場や遊び場にも使われるし、ときには思索の場所という象徴的な意味で韓国人の心に宿っている (pp.70-71)。 ◇ 棟の分化によって分けられた各々の領域は、必ずそれぞれの固有なマダンを有する。《中略》「棟とマダン」を住宅の基本単位とすると、すべての部屋がそれぞれのマダンを持つことを意味する。マダンは必ず部屋の前に置かれ、しかも部屋とマダンとは一枚の障子紙だけで境界づけられていて、いつも直接に連結されるから、マダンに面する部屋の性格も前もって決められる《中略》各部屋が見えるマダンは家族全員の所有物となり、マダンを中心として共同体が形成される。また、マダンでは、すべての部屋が見え、各部屋ではマダンが見られる。《中略》すべての部屋が見えるマダンは、家族の構成員を認識する共同の場所となる (p.74)。 ◎◇ 主屋のアンマダンは《中略》周辺部に採光と風通しを与えるためのものである。まさに、それは何も取り入れないから、何にでもなりえる空間であり、その風景は単なる庭というより、文字どおり外部の小部屋である。《中略》アンマダンは、内部的な外部という二重的な性格の空間である。《中略》それは、絶えず生活の場を広げる可能性をもった内部的な外部空間なのである (pp.75-76)。	金 光鉉 ：韓国の住宅—土地に刻まれた住居—，丸善株式会社，1991
○ 人々の行動はマダンとつらなっている。マダンは生活庭なのである。またマダンは通過儀礼など非日常の儀礼の場にもなる。マダンは日常非日常の行動の要におかれている (p.135)。 ○ 伝統的な韓国の住まいは、ひらかれたウチ—ソト関係を基調にしていたのだろうか。ひらかれたウチ—ソト関係とは、ウチ向きの行為とソト向きの行為とが分けられずに、同じ場で行われるという意味である。つまり外来者がくわわるソト向きの生活が、家族のウチ向きの生活と分けずに行われる暮らし方である。このウチ向きの行為とソト向きの行為の場とを分けない暮らし方は、現代の住まいに受けつがれている (p.108)。	塩谷 壽翁 ：異文化としての家—住まいの人類学事始め—，圓津喜屋，2002
○ 韓国の伝統住宅で、マダンは農作業と家事労働を支援する空間であると同時に、大規模の儀礼に使われる空間であり、休息や親交の空間となるという点から共用空間でもある (pp.49-50、筆者による翻訳)。	Jeon Bonghee, Kwon Yongchan 共著 ：韓屋と韓国住宅の歴史，Dongnyok, 2012

※ 斜字は既往文献からの引用部分を示す。

◎：マダンの存在に基づく自然との共生の仕組みが分かる内容

◇：チェとマダンとの物理的配置関係が分かる部分

○：チェとマダンとの物理的關係に基づく住み方が分かる内容

をもった日本を始めとした東アジア地域の住宅研究においても有意義であると考えられる。限られた敷地のもとでは、屋内と屋外とはいわば図・地の関係にあり、本来、別々には考えられないものである。住宅は、風雨や暑さ寒さ、騒音や視線に対するシェルターである。しかし人間は、屋内においても屋外の自然との接触を求めるため、コントロール可能な内と外とのつながりが必要となるためである^{注32)}。住宅における庭は住まい手が内(私的空間)から出て外(公的空間)と関係を結び始める住空間である。建物と庭との関係に対応して営まれる生活の研究は、人間と建築環境との関係に対する考察を住宅の建物から庭へと、家から町へと段階的に広げていく上でも興味深い議論であると考えられる。

本研究では、住宅における庭の存在、チェとマダンからなる韓屋の住空間は、過去から現在、また未来に至るまで、時代に限られず適用できる普遍性をもったモデルであると考えている。従って、そのような特徴に着目し、「韓屋におけるチェとマダンとの関係に対応した住み方」を実証的に検討したいものである。本研究は、既存韓屋の活用のあり方や、今後の新しい韓屋のあり方の議論の充実に資するものとなると考えられる。

1.2 研究の目的と課題

1.2.1 研究の目的

以上の背景を踏まえ、本研究では、韓屋におけるマダンの存在、チェとマダンからなる住空間に着目し、韓屋の住空間が時代の変化の中で人々の日常生活にどのように対応してきたのかを探索。本研究では、住まわれている時代と住まい手の価値観が異なった複数の事例から「韓屋におけるチェとマダンとの関係からみた住み方」を解明することによって韓屋の伝統的住空間の現代的価値を再評価し、さらに、既存韓屋の保全・活用を含めて今後の韓屋の住空間計画のあり方について考察することを目的とする。

1.2.2 研究の課題

本研究の目的を達成するために、以下の3つの課題を設定する。図1-8は、現在韓国における韓屋の概念および本研究における各課題の検討範囲を示したものである。本研究では、時代の変化や住まい手の価値観の多様化に伴って変化してきた韓屋の住空間の物理的現状、それに応じた実際の使われ方をもとに、各事例における住み方を解明する。各課題では、住まわれている時代が異なった事例を取り上げ、伝統から現代にいたるまで韓屋における住み方を総合的に検討する。なお、「建物と住まい手の対応」のみならず、「庭と住まい手の対応」も含めて住み方を検討する。さらに、韓屋の住空間と住まい手との対応について「チェとマダンとの関係」を分析することによってそれぞれの事例の住み方を解明する。

Hofstadter 訳: Building Dwelling Thinking, New York: Harper and Row, 1971)。これを受け、Norberg-Schulz は、「居住する」ということは、人間と環境の間に意味のある関係の設定を含む」と指摘している (Christian Norberg-Schulz: The Concept of Dwelling, Rizzoli, p.13, 1984)。これらの言説から考えると、人間の実存は人間を取り巻くすべての環境との関わりであり、住宅はその出発点といえる。住宅における庭は住まい手が内(私的空間)から出て外(公的空間)と関係を結び始める住空間である。建物と庭との関係に対応して営まれる生活の研究は、人間と建築環境との関係に対する考察を住宅の建物から庭へと、家から町へと段階的に広げていくにも興味深い研究テーマであると考えられる。

注32) 住環境の計画編集委員会編著: 住環境の計画2 住宅を計画する(第二版), 彰国社, p.56, 1998

課題一：文学作品に見る戦後激動期韓屋における住み方の解明

文学は、事実と虚構が共存する文学の特性上、作家個人の経験の一部を拡大または縮小することがある。しかしながら、文学は言語を通じて時代性・社会状況・歴史文化・生活様式・意識や思想などの諸要素が投影される産物である。このことから、小説の中に描かれているテキストに基づいてある時代の住空間や住み方の対応関係を探ることは有意義な試みであると考えられる。

第一課題では、作家の経験に基づいて韓屋での生活や時代的背景を繊細に描いている自伝小説『庭の深い家』を取り上げる。具体的には、伝統韓屋から都市韓屋への移行期に建てられた韓屋におけるチェとマダンからなる住空間が朝鮮戦争直後という特殊な社会状況の下でどのように変容していたのかについて、小説に描かれている記述の分析をもとにし、その住み方を解明する。

課題二：近代都市化に伴う住要求に対応した韓屋における住み方の解明

時代と社会の変化に伴う住まい手の住要求の変化に対応してきた住宅形式である都市韓屋の事例を取り上げる。特に、1970年代から2000年代にかけて増改築が繰り返されながら住み続けられている都市韓屋におけるチェとマダンからなる住空間がどのように変容してきたのかについて、住空間の増改築の現状とそれに対応した実際の使われ方の把握から検討する。さらに、改修前後の動線の変化に基づいてチェとマダンとの関係の変化を分析することによって対象事例における住み方を解明する。

課題三：住まい手の多様な価値観に対応した韓屋における住み方の解明

住まい手の多様な価値観に対応して改修が行われ、住み続けられている都市韓屋の事例を取り上げる。特に、2000年代以降入居している近年の韓屋再生活用事例におけるチェとマダンからなる住空間と住まい手との対応を探る。具体的に、改修の現状、それに対応した実際の使われ方の現状を把握し、改修前後の視線と動線の変化に基づいてチェとマダンとの関係の変化について検討する。それによって、対象事例における住み方を解明する。

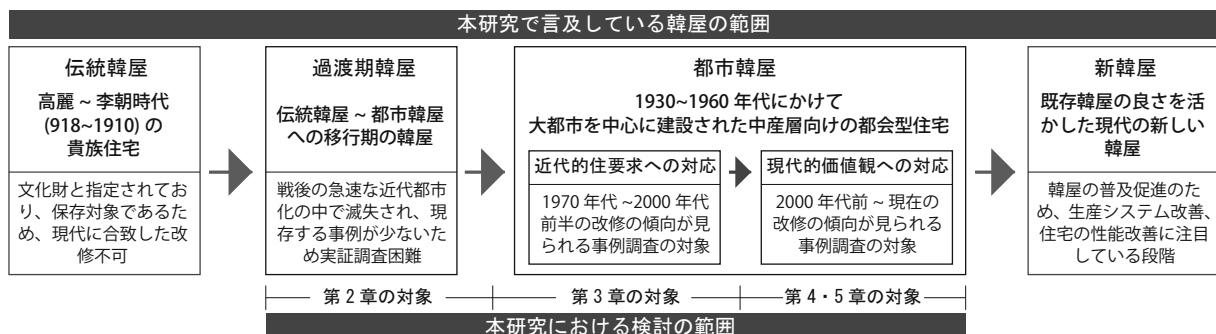


図 1-8 本研究における韓屋の概念と検討対象韓屋の範囲

1.3 研究の対象と方法

1.3.1 研究の対象

課題一に対する研究対象

課題一は、文学作品に見る戦後激動期韓屋における住み方を解明することである。そのために、作家の経験に基づいて韓屋での生活や時代的背景を繊細に描いている自伝小説『庭の深い家』を研究対象とする。『庭の深い家』は、朝鮮戦争直後の1954年、大邱市のとある韓屋「庭の深い家^{注33)}」で住んだ日常の物語を題材とした、作家金源一(キム ウォニル)の自伝小説である(以下、文学作品そのものは『庭の深い家』、住宅は「対象住宅」と記す)。

本研究では、一連の過程を経て小説『庭の深い家』を分析対象としている。研究対象になりうる文学作品を選定するために、韓国の国会電子図書館 HP(<http://dl.nanet.go.kr/index.do>) から「マダン」を主要語としており、タイトルにマダンが含まれている文献を検索した(2013年12月現在)。その結果、全662件が見つけた。一般図書53件、国内学術記事577件、学術誌4件、e-book1件、Multimedia資料2件があったが、韓屋におけるマダンを取り扱っている文献は小説『庭の深い家』1件だった。その他、エッセイが1件あったが、マダンで感じる個人の感性について書いており、韓屋の空間構成やそれに対応した住生活について検証する対象としては不適切だと判断し除外した。

写真1-1は、本研究の対象作品『庭の深い家』の韓国語原書と日本語訳書の表紙を示したものである。『庭の深い家』は金源一の代表作で、戦後の韓国社会を圧縮的に表現した韓国現代小説の傑作として知られており、日本以外にもスペイン、フランス、ドイツ、アメリカなどの国で翻訳書が発刊されている^{注34)}。作家金源一は、朝鮮戦争による分断の傷を受けた自分の家族史を題材とした作品を多数発表しており、韓国を代表する分断文学作家として認められている。

対象住宅「庭の深い家」には、マダンを囲んで上の棟と呼ばれる大家の住まいがあり、下の棟と呼ばれる、小さい部屋が4つ立ち並んだ借家世帯の住まいがある。『庭の深い家』では、彼らが一緒に朝鮮戦争前後の「汚らしい歳月」と「悲惨な貧しさ」を生き抜く日々の生活を繊細に描いている^{注35)}。事実と虚構が共存する文学の特性上、作家個人の経験の一部を拡大または縮小することがある。しかしながら、文学は言語を通じて時代性・社会状況・歴史文化・生活様式・意識や思想などの諸要素が投影される産物であることから、『庭の深い家』は本研究の目的に合致する対象と考えられる。

課題二に対する研究対象

課題二は、近代都市化に伴う住要求に対応した韓屋における住み方を解明することである。そのために、住まい手が住宅から受ける利便性や快適性などといった手段的価値を重視した改修が繰り返され、

注33) 「庭の深い家」とはマダンが他の地面より5段ぐらいい低くなっているのを見て作家家族が付けた呼び名である。

注34) 時代を描いた文学作品としての価値が高く評価され、1990年1月には韓国MBC放送から8回構成のドラマとしても放映された。

注35) 大邱中区都心再生文化財団 HP(<http://jp.djdrf.or.kr/story02.htm>)

現在まで住み続けられている事例を研究対象とする。具体的には、韓国の中部地方都市である清州市の旧市街地に残存している「中部地方のL字型韓屋(以下、L字型韓屋)」を事例とする。

この住宅では、内房(アンバン;夫婦寝室)を中心に大庁と釜屋(プオク;土間の台所)がL字に結合している。大庁を間にし、内房の反対側には子女部屋として使われる越房(コンノンバン)が配置される。住宅の規模によって房(バン;部屋)や退抹楼(トェツマル;縁側)が追加されることもある^{注36)}。また、上の房^{注37)}の方で結合される屋根の構造が特徴である。本研究では、増改築の実態やそれに対応した住み方を把握し、各事例におけるチェとマダンのつながり方を明らかにするために、上述した2つの特徴が保持されている事例のみを調査対象としている。図1-9に、課題二の対象地域およびL字型韓屋の間取りを示す。また、写真1-2、1-3、1-4、1-5、1-6に、課題二の対象事例5軒の様子を示す。

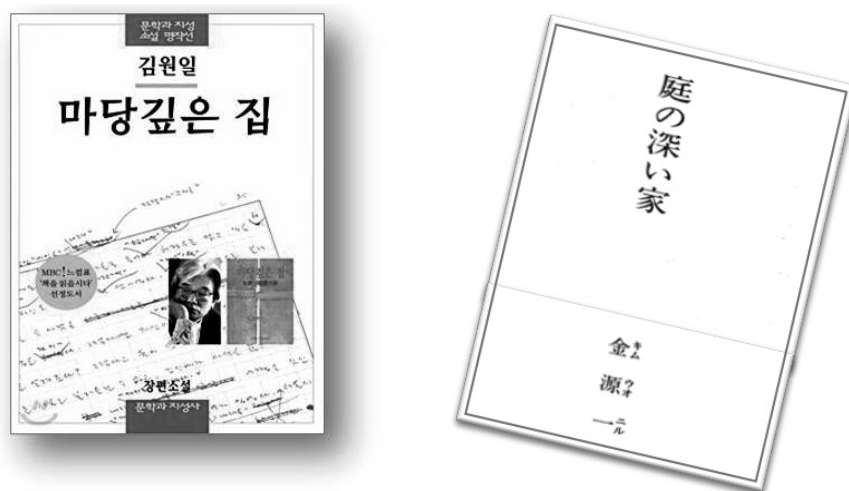
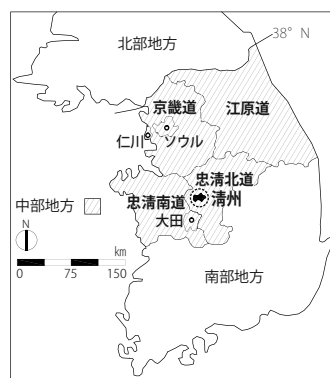
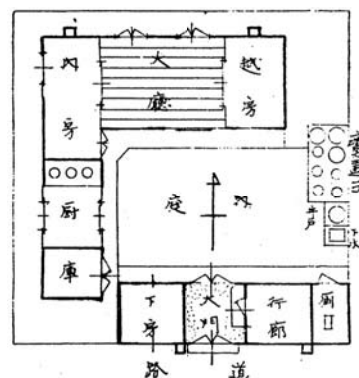


写真1-1 小説『庭の深い家』の韓国語原書(左)と日本語訳書(右)



課題二の対象地域の位置
(筆者作成)



京城地方の在来型間取り図
(出典: 朴吉龍, 朝鮮と建築, vol.20, no.4, 1941)

図1-9 中部地方のL字型韓屋の間取

注36) 「京城地方型」ともいわれる。開花期の知識層を中心に朝鮮半島の住宅についての調査研究が行われたが、1920年代に入ると建築教育を受けた専門家による住宅改良論が主張された(参考文献11)。その際に中部地方型民家や京城地方型民家は、間取りや曲がり方、構法のディテールが類似した住宅型として扱われた。本稿ではそれらを「中部地方のL字型韓屋」とする。

注37) ウッパンと呼ぶ。内房で奥の方にある部分を指す。内房で釜屋に接している部分を下の房(アレツバン;)と呼ぶ。



写真 1-2 課題二の対象事例 01



写真 1-3 課題二の対象事例 02



写真 1-4 課題二の対象事例 03



写真 1-5 課題二の対象事例 04



写真 1-6 課題二の対象事例 05



写真 1-7 課題三の対象事例 J 邸



写真 1-8 課題三の対象事例 K 邸



写真 1-9 課題三の対象事例 P 邸



写真 1-10 課題三の対象事例 R 邸

課題三に対する研究対象

課題三は、住まい手の多様な価値観に対応した韓屋における住み方を解明することである。そのために、住宅の利便性や快適性などの手段的価値を超え、住まい手と住宅とのかかわりの中で住まい手が得ようとする非手段的居住価値を重視した改修事例を研究対象とする。具体的には、韓屋の改修や新築設計に係る多くのプロジェクトに参画している建築家J氏の自邸と、彼の代表作品K邸である。J氏は、自ら都市韓屋を改修し、現在に至るまで住み続けている。J氏は、住宅としての韓屋のみならず、韓国初の韓屋ホテルや韓屋図書館等も設計しており、それらは韓屋の現代化に寄与する先駆的な事例として評価されている。J氏は韓屋の住空間における使うためのマダンの機能を大事にして既存韓屋や新築韓屋の設計を行っており、J邸とK邸は韓屋の住空間計画に対するJ氏の考え方が良く表れている事例である^{注38)}。

さらに、外国人住まい手の事例として、P邸とR邸を取り上げる。P氏とR氏は、韓国人とは全く異なる文化的背景を持っている外国人ではあるが、韓国の歴史文化についての知見が高い。さらに、現在の居住地域に残されている既存韓屋の保全と再生活動に係っており、主導的に参加している。韓屋がまだ多くの注目を集めていなかった時期から韓屋に関心を持っていたP氏とR氏の自邸を対象とした調査研究は、少数事例ではあるが外国人に評価されている韓屋の価値を見出すための基礎資料になると考えられる。課題三の対象事例4軒の様子を写真1-7、1-8、1-9、1-10に示す。

1.3.2 研究の方法

本研究では、対象事例における日頃の生活の様子や住まい手の主観的意味づけと住宅の物理的状态との対応を明らかにし住み方の実態を深く考察するために、「質的研究」方法を取り入れて少数精密調査を行っている。調査では、建築家と住まい手に対する半構造化インタビュー、実測、現場観察などから建物の物理的現状と住まい手との対応を把握している。本研究では、住まい手との信頼関係をもとに、対象事例における日頃の生活についてお話を聞き、住空間の全てを見せてもらいながら少数精密調査を行い、住み方の実態を明らかにしている。その上で、計画論的観点から空間同士の関係を分析することによって韓屋におけるチェとマダンとの関係からみた住み方について考察している。

質的研究は、研究対象の複雑性に対して開かれた研究の方法を用いて複雑な対象を複雑な姿のまま、自然な日常の文脈の中でとらえることを目的とする^{注39)}。質的調査と量的調査の分類対比と関連する一つの基本分類に「事例研究 - 統計的研究」がある。「事例研究」とはある人間、団体、企業や自治体など、ひとつまたはごく少数のケースに関心を持つ研究のことである。事例研究では調査対象者と長時間会話したり（インタビュー）、調査者自身が調査する対象集団の一員として生活しながら比較的長期にわたっ

注38) J氏による既存韓屋の改修、新築韓屋設計事例は数多い。J氏は、住宅としての韓屋のみならず、韓国初の韓屋ホテルや韓屋図書館等も設計しており、それらは韓屋の現代化に寄与する先駆的な事例として評価されている。筆者らがJ氏に出会ったのは2011年9月である。同年5月設立された国家韓屋センターを訪ねて韓屋関連政策の最新動向を調査する中で、韓屋の改修や新築設計分野で面会すべき専門家としてJ氏を紹介してもらった。それをきっかけで2012年9月J氏の自邸と彼の作品K邸における住み方調査を行うことができた。筆者は2013年2月から3か月間J氏の事務室でインターンとして勤務しながら対象事例について補足調査を行った。2014年6月、日本建築学会近畿支部住宅部会と都市住宅学会関西支部共催で京都でJ氏の講演会も開催されている。関連する内容の詳細は、次項の1.3.2に述べている。

注39) Uwe Flick(著), 小田博志(翻訳): 質的研究方法入門〈人間の科学のための方法論〉, 2011

表 1-3 本研究で用いる質的データ

研究者が作るもの	文字テキスト	フィールドノート、インタビュー記録
	非言語的情報	写真、ビデオ、DVD
すでに作られたもの	文字テキスト	日記、手紙、自伝、伝記 / 小説、詩 / 古文書、議事録 / 新聞、雑誌 / 電子メール・ブログ・ウェブサイト上の記載
	非言語的情報	写真、映画、テレビ、絵画

※ 表内の分類は「注 41）」の参考文献による。網掛けは本研究で用いる質的データを示す。下線は本研究で参考したデータを示す。「新聞、雑誌」は第 4 章・第 5 章の研究対象に対する取材物による。「ブログ・ウェブサイト上の記載 / 写真」は住まい手が作成したものによる。「テレビ」は第 2 章の研究対象の自伝小説をドラマに作った放送番組や、第 4 章と第 5 章の研究対象を取材した放送番組による。

て観察する（参与観察）といったインテンシブな質的調査を通じて、事象の多数の側面を全体関連的に記述、分析したり、主観的世界や意味世界の探求に向かう場合が多い^{注 40)}。質的研究は、シンボリック相互作用論に理論的 背景を持ち、社会・人文学などの領域で、人を研究対象とする分野で人の生きている文脈ごと理解する方法として開発されたものである^{注 41)}。なお、研究者の多くは「質的研究」という表現を、エスノグラフィー、事例研究法、自然主義的探究、エスノメソドロジー、ライフ・ヒストリー法、ナラティブ研究など、主として質的データに依拠するあらゆる種類の 社会研究を包括する名称として用いている^{注 42)}。表 1-3 に、質的データの大まかな分類と本研究で用いる質的データを示す。本研究では、住空間の実態と住まい手の日常生活の対応を探るためにフィールドワークを行い、資料を収集して分析考察している（課題一、課題二に対応）。なお、韓国現代文学作品に基づいてテキスト分析を行い、韓屋における日常生活の特徴について一考察している（課題三に対応）。また、近年の韓屋政策づくりに係っている学識者や建設事業者、行政関係者などへのインタビュー調査を行い、現在韓国における韓屋を取り巻く動向について把握している^{注 43)}。

(1) 住み方調査：課題二、課題三に対応

図 1-10 に、調査時期や期間、調査員、調査協力者を示した。本研究で用いた多くのデータはフィールドワークから得られたものである。2007 年から 2015 年まで、計 7 回の現地調査を行っている。第 1 次調査では、現地の清州大学建築学科近現代建築史研究室の先生方や調査員の多大な協力の下、調査対象に対する屋内の平面と断面の実測調査及び住まい手へのインタビュー調査を行うことができた。第 2 次調査では、第 1 次調査から作成できた図面及び屋内の使用実態をもとに、屋外の使われ方について住まい手へのインタビュー調査や現場観察を行った。2007 年 7 月の第 1 次調査を実施するまで、筆者は清州大学建築学科近現代建築史研究室のメンバーとして調査対象の選定や調査渉外のための予備調査から本調査に至る全てのプロセスに調査員として参加してきた。2010 年 9 月の第 2 次調査からは調査責任者として全ての調査を企画、実施してきた。住宅の各部を実測、写真によって記録化することに対して住まい手の許可を得ることが困難なこともあったが、研究室レベルで持続的にフィールドを訪ねて

注 40) 谷富夫、山本努編著：よくわかる質的社会調査プロセス編，ミネルヴァ書房，2010

注 41) S.B.Merriam(著)，堀薫夫，久保真人，成島美弥(翻訳)：質的調査方法入門 教育における調査法とケース・スタディ，ミネルヴァ書房，2004

注 42) Thomas A. Schwandt(原著)，伊藤勇，徳川直人，内田健(訳)：質的研究用語辞典，北大路書房，2009

注 43) その内容の一部は第 1 章の序論に対応しており、詳細の調査記録は本論文の資料編に記載している。

2007年→第1次調査※(2007年7月4日～7月8日)

調査員 金海梨¹⁾ Park Changbeom²⁾ Choi Jinsik¹⁾ Yang Seungpil¹⁾ Kim Hyekyung¹⁾
 Nam Jiyoung¹⁾ Kim Taesun¹⁾ Park Jiyoung¹⁾

調査協力 Kim Taiyoung³⁾ Lee Minkyung⁴⁾ Kwon Soonchan²⁾

※ 第一次調査は、韓国清州大学工学研究科建築学専攻の近現代建築史研究室主催の「清州都市韓屋実態調査調査」の一環で行われた。2007年2月～6月の予備調査期間を経て、全16軒の事例を調査対象として最終選定し、2007年7月4日～8日に7チーム21人の調査員によって本調査が行われた。当時、筆者は学部5回生でチームリーダーとして3軒の事例に対する実測及び住まい手へのインタビュー調査、調査データのまとめを総括した。上記の筆者以外の調査員は、本研究で取り上げた対象事例の調査に参加した人員である。

1) 韓国清州大学工学部建築学専攻学部生(当時)

2) 韓国清州大学大学院工学研究科建築学専攻修士課程(当時)

3) 韓国清州大学大学院工学研究科建築学専攻教授

4) 韓国清州大学大学院工学研究科建築学専攻博士課程(当時)

2010年→第2次調査(2010年9月20日～9月27日)

調査員 金海梨

調査協力 Kim Taiyoung

2011年→第3次調査(2011年9月4日～9月7日)

調査員 高田光雄⁵⁾ 金海梨

調査協力 Youm Chirlho⁶⁾ Lee Kangmin⁷⁾ Lee Kyunga⁸⁾ Kim Seungbae⁹⁾ Kim Yongmi¹⁰⁾

5) 京都大学大学院工学研究科建築学専攻教授

6) 韓国建築都市空間研究所(Architecture & Urban Research Institute(AURI))研究委員

7) AURI National Hanok Center 研究委員(センター長)(当時)

8) ソウル市役所韓屋文化課韓屋文化チーム長(当時)

9) (株)FIDES Development 社長

10) (株)金星総合建築士事務所代表

2012年→第4次調査(2012年9月24日～9月27日)

調査員 高田光雄 森重幸子¹¹⁾ (9月26日) 金海梨

調査協力 Youm Chirlho Lee Kangmin Lee Minkyung¹²⁾ Hwang Joonho¹³⁾ Cho Jung-goo¹⁴⁾

米田沙知子¹⁵⁾ Cho Young-min¹⁶⁾

11) 京都大学大学院工学研究科研究院

12) AURI National Hanok Center 副研究委員

13) AURI National Hanok Center 研究員(当時)

14) guga Urban Architecture 代表

15) guga Urban Architecture 職員

16) 韓国明智大学大学院工学研究科建築学専攻修士課程(当時)

2013年→第5次調査(2013年2月21日～4月27日)※

調査員 高田光雄 (3月26日～3月30日) 金海梨

調査協力 Cho Jung-goo

※ 調査期間中、筆者は guga Urban Architecture の研修生として勤務しつつ補足調査を実施

2014年→第6次調査(2014年11月1日～11月6日)

調査員 高田光雄 (11月1日～11月3日) 金海梨

調査協力 Hwang Euiran¹⁷⁾

17) 大丘市中区役所観光課担当主任

2015年→第7次調査(2015年4月9日～4月15日)

調査員 金海梨

図 1-10 調査時期、調査員、調査協力

調査の意図や意義を説明し、地域住民との信頼関係を構築することによって一連の調査が可能となった。これらの調査から得られた結果が課題二に対応しており、第3章が作成されている。

第3次調査から第5次調査及び第7次調査においても第1次調査や第2次調査と同様、インタビュー調査と現場観察によって対象事例における住み方を把握している。また、一部の事例については部分実測調査を行い、既存の平面図を補完している。これらの調査から得られた結果が課題三に対応しており、第4章と第5章が作成されている。本研究の第4章と第5章で示された平面図は、設計者や住まい手の協力の下、紙媒体の図面を筆者が再作成したものである。調査対象の選定においては、まず、伝統韓屋から現在に至るまで持続されている「チェとマダンからなる住空間形式」と住まい手との対応を解明するためにどのような事例を選定すべきかを考えた。課題二では、近代化の中で自然発生的に生じる住要求と韓屋の住空間がどのように対応しているかを検討した。それに対して課題三では、伝統的な住空間の特徴やそこで培われてきた生活文化について住まい手が自ら再評価した上で入居している場合どのような住要求があるのか、それらの住要求と韓屋の住空間がどのように対応しているかを検討している。

第4次から第7次調査では、韓屋を取り巻く近年の政策動向を把握するとともに、前述の調査意図に合致する対象としてJ邸、K邸、P邸、R邸を取り上げてフィールドワークを行った。J邸については韓屋建築家への面談をきっかけで持続的に関わり合い、調査を実践することができた。なお、J氏との信頼関係をもとに本研究の意図に沿った調査対象としてK邸を紹介してもらった^{注44)}。P邸とR邸については韓屋に関連するメディアの記事から住まい手P氏とR氏の存在を知った。P氏とR氏は外国人でありながらも韓屋や韓国文化について愛着を持っていることが分かった上で調査対象として取り上げた。P氏の場合、本研究の意図を分かっている国家韓屋センターの関係者の方から紹介してもらうことができた。当然なことながら、最初P氏は面識がない筆者に自邸を公開することに対する反感を持っていたため、初回調査を実践するのに3カ月間程度の時間がかかった。2012年9月初めてP邸を訪ねてからP氏との付き合いができ、2012年から2015年に至るまで毎年1回P邸を訪ねて住空間の現状を把握することができた。R氏の場合は調査当時大学の先生だったため、公開されている電子メールアドレスやSNS、携帯番号があり、最初から筆者が直接本研究の目的や意図について理解してもらい、調査を行うことができた。J邸・K邸・P邸・R邸は、住まい手それぞれがおかれている社会状況、住要求が異なっている。J氏家族は4人の子育て世帯であり、血縁関係の家族同士で住んでいる。K氏家族は血縁関係血の家族と有料宿泊客が一時的に同居している。また、P氏は家の一部を無料でシェアしており、R氏は単身者として住んでいる。これらの対象は少数事例のため各事例における特徴を一般化することは難しい。しかし、現代の住まい手の多様な価値観が韓屋の伝統的な住空間の形式の中にどのように見出しているのか、各事例における事象にもとづいて住み方の実態を精密に調査するのに適した有意義な事例である。

注44) 筆者は2011年9月に国家韓屋センターを訪ねて実施した新韓屋政策調査をきっかけでJに出会えた。国家韓屋センター関係者から面会すべき韓屋建築の専門家として複数の建築家を紹介してもらい、建築家J氏とのインタビューから専門家としてJ氏が韓屋をどのように評価しているのかについて伺った。J氏はチェとマダンからなる韓屋の住空間形式や日々様々な用途で使われるマダンの存在が重要であると考えていること、自ら韓屋を改修して住んでいることが分かった。なお、J氏は単に韓屋の物理的改善や外見の踏襲ではなく伝統的な住空間が持つ現代住宅としての可能性に着案して様々な作業を実践していることが分かった。そこで、J氏とは筆者らの研究意図やこれまでの一連の成果について意見交換を継続するとともに、本研究の目的に最もふさわしい調査対象としてJ氏の自邸とK邸を薦められた。このような過程を経て、2012年9月に住み方調査を実施することができた。

(2) 文学作品のテキスト分析：課題一に対応

本研究では、文学作品に描かれた韓屋での生活の様子をもとにテキスト分析を行い、朝鮮戦争直後の特殊な状況に応の下での韓屋の住空間と住まい手の生活の対応を探っている。その分析から得られた結果が第三課題に対応しており、本研究の第2章が作成されている。

韓国語原作『마당 깊은 집 (1991, 文学과知性社)』を読んだ上で、対象住宅の生活空間や生活に関連する記述について日本語訳書『庭の深い家；韓国の現代文学第2巻長編小説Ⅱ(1992、柏書房)』と対照しながら分析考察を行った。

1.4 既往研究の本研究の位置づけ

1.4.1 既往研究

(1) 韓屋の住空間と住み方に関連する既往研究

伝統韓屋におけるチェとマダンからなる住空間と住まい手との対応関係は、少なからず検討されてきた^{注45)}。一方、その内容は文献の記録にもとづいた解説、考察であり、実証研究はなされていない。原型を維持している伝統韓屋の場合、現代に合致した生活を実現することは難しいため、原型を維持している伝統韓屋は文化財として維持管理されていることが多い。実際に住み続けられている伝統韓屋の場合、現代の住設備を取り入れており住宅各部に変化が起きているため必ずしも伝統韓屋での住み方を検討することができる対象とは言えない。このことから、伝統韓屋の住空間と住まい手の対応を実証的に検討することは実質的に難しく、文献の検討に頼らざるを得ないものである。都市韓屋における増改築の実態や内部空間であるチェの利用実態について検討した研究は少なくない^{注46)}。また、筆者らによるものも含めて、外部空間であるマダンの利用実態を取り扱った一連の研究がある^{注47)}。一方、これまでの研究では、検討対象がチェとマダンのどちらかに絞られており、検討内容は変容実態の把握にとどまっている。

本研究は、韓屋における住み方を、建物と住まい手の対応のみならず、庭と住まい手の対応も含めて実証的に検討するものとして位置づけられる。図 1-11 は、既往研究における韓屋の住み方調査の範囲と本研究における住み方調査の範囲を示したものである。

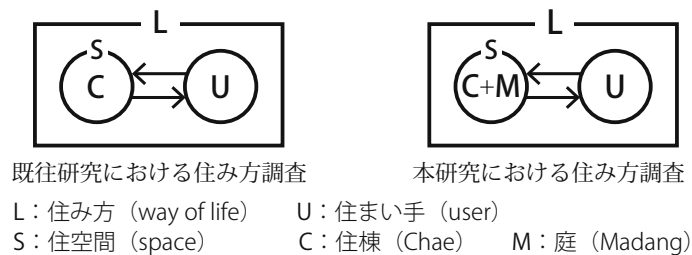


図 1-11 本研究における住み方調査の範囲

注 45) 申榮勲：한국의 살림집 (上)；韓国の民家 (上)，悦話堂，1983

金 光鉉：韓国の住宅—土地に刻まれた住居—，丸善株式会社，1991

韓屋空間研究会：한옥의 공간문화；Culture in Traditional Korean Home, kyomunsa, 2004

申榮勲 (著)，西垣安比古 (監訳)：韓国の民家，法政大学出版局，2005

Park Eunyeong：Modern Division of the Style of Gardens Presented in Korean Traditional House Yard, Journal of Korean Institute of Traditional Landscape Architecture, vol.29, no.2, pp.28-38, 2011 など

注 46) 筆者による一連の研究を含めて、全国に散在している都市韓屋の実態を扱った研究が多数行われた。中でも、都市韓屋密集地域であるソウルの北村を対象とした事例研究が多い。韓国における関連文献として以下のようなものがあげられる。

Kim, H., Kim, T.：A Research on the Spatial Change of the Main Room and Kitchen of Traditional Utbangkkeokeum House in Cheongju City, Journal of the Korean Housing Association, vol.20, no.6, pp.19-29, 2009.12

日本における関連文献としては以下のものが代表的である。

ハウジング・スタディ・グループ，三沢博昭：韓国現代住居学—マダンとオンドルの住様式，建築知識，1990

注 47) 金海梨，高田光雄：都市韓屋におけるマダン (庭) の変容に関する調査研究，日本建築学会住宅系第 7 回研究報告会論文集，pp.123-128, 2012.11

Lee, Y., Park, S.：Study of the Meaning and Use of Madang through the Evaluation of the Detached House Residents in Busan, Journal of the Architectural Institute of Korea, vol.25, no.8, pp.153-162, 2009.8

藤井英二郎：日本と韓国における庭園を中心とした緑地の比較文化的研究、文部省科学研究費国際学術調査研究成果報告書，pp.56-68, 1990

(2) 屋内空間と屋外空間の関係に関連する既往研究

韓屋におけるチェとマダンのつながり方に着目して韓屋の住空間とそれに対応した住み方を解明したものは、筆者らの既報論文^{注48)}以外は日本と韓国どちらにおいてもまだない。都市韓屋における建物の増改築や使われ方を解明したものは数多いが、前述のように、検討対象がチェとマダンのどちらかに絞られており、検討内容は変容実態の把握にとどまっている。

韓屋以外の現代住宅における屋内外空間の関係に着目したものとして、空間の配列及び出入口の有無によって屋内外の動線の接続を分析し、特定地域の住宅作品における屋外空間の性格を解明したものがある^{注49)}。また、空間の配列及び空間同士の視線・動線の接続を分析し、日本の現代住宅作品における屋内外空間の構成形式を解明した一連の研究がある^{注50)}。これらの研究は視線・動線の接続から空間同士の関係を解明している点で本稿の分析方法と類似しているが、主に空間構成形式について議論されており、住宅の物理的現状と住まい手との対応については検討されていない。

本研究は、住宅の物理的状態にもとづいた屋内空間と屋外空間の関係の分析のみならず、それに対応した実際の使われ方の現状を明らかにすることによって住宅と住まい手との対応を実証的に検討するものである。本研究は、チェとマダンとの関係を大事にして培われてきた韓屋の生活文化に着目し、住空間の物理的状態に対応した実際の使われ方に基づいて韓屋における住み方を検討するものとして位置づけられる。

(3) 文学作品を基に空間を分析した既往研究

文学作品を通じて建築や都市空間について論じた一連の研究がある^{注51)}。これらは文学に現れる建築や都市空間から当時の社会状況や人の意識を考察している。日常生活が書かれた家内記録から当時の住生活を把握し、住まいの場所論的意味を考察したものがある^{注52)}。記録をもとに今では検証できない時代の生活を究明しようとする点は本研究と類似であるが、チェとマダンからなる住空間と住まい手の対応については論じられていない。

注 48) Kim, H., Takada, M.: A Study on the Relation between Chae and Madang based on the Way of Living in Urban Hanok, Proceeding of Autumn Annual Conference of the Korean Housing Association, pp.185-190, 2012.11

金海梨, 高田光雄: 韓屋におけるチェとマダンのつながりに対応した住生活の特徴に関する一考察 - 韓国現代文学作品『庭の深い家』を対象として -, 日本建築学会計画系論文集, No.718, pp.2763-2770, 2015.12

金海梨, 高田光雄, 金泰永: 都市韓屋の増改築事例における出入関係からみたチェとマダンのつながり方, 日本建築学会計画系論文集, No.727, 2016.9

注 49) 那須聖, 村田涼, 八木幸二: 内部空間との関係にみる近代住宅の外部空間の構成に関する研究, 日本建築学会計画系論文集, No.528, pp.133-139, 2002.2

注 50) 岡村航太, 小川次郎, 坂本一成: 外部空間の配列と接続からみた都市型住宅作品の構成 - 現代日本の住宅作品における内外の関係による空間形式 (2) -, 日本建築学会計画系論文集, 第 552 号, pp.141-146, 2002.2

小川次郎, 小野田環, 坂本一成: 外形ヴォリュームと室の配列による建築の構成 - 現代日本の住宅作品における内外の関係による構成形式 -, 日本建築学会計画系論文集, 第 537 号, pp.117-123, 2000.11

注 51) 裴竣皓, 若山滋: 朴泰遠と李箱の作品における 1930 年代の「京城」と建築空間 - 韓国文学に見る都市と建築の近代化 -, 日本建築学会計画系論文集, 第 643 号, pp.2139-2147, 2009.9

若山滋ら: 『万葉集』における建築空間, 日本建築学会計画系論文集報告集, 第 388 号, pp.116-123, 1988.6 他多数

裴竣皓, 若山滋: 現代文学作品に見る朝鮮戦争後の都市と建築, 日本建築学会計画系論文集, 第 626 号, pp.905-911, 2008.4

注 52) 金秉璜, 西垣安比古: 朝鮮の住宅「雲鳥樓」における懸板・家系継承・祭祀からみた住まいの場所の究明, 日本建築学会計画系論文集, Vol.77, No.675, pp.1223-1229, 2012.5

本研究は、チェとマダンからなる韓屋の住空間の形式に着目し、文学作品に描かれている生活の様子をもとに韓屋の住空間と住まい手の対応を検討することによって韓屋における住み方を検解明するものとして位置づけられる。

(4) 近年の新韓屋関連政策、新韓屋関連研究

韓国では、住宅の量的充足、高度経済成長を遂げた自国文化の再評価、アパート一辺倒の画一的な居住形態に対する反省から韓屋が新しい住宅の対案として注目を集めている。さらに、韓屋は地球環境問題に深刻化に対応できる環境配慮型住宅の対案としても再評価されつつある。韓国政府では 2005 年 6 月に「韓ブランド化」支援戦略を樹立し、2007 年 2 月に「韓スタイル育成総合計画」が策定した。その政策では、「韓服、韓食、韓紙、韓国音楽、ハングル、韓屋」の育成を支援するための重点課題が提案され、韓屋は、韓服、韓食、韓紙、韓国音楽、ハングルなどの韓国文化コンテンツを入れる器として取り上げられている。このような状況の下、国土海洋部の傘下機関である建築都市空間研究所 (AURI) では、2007 年より韓屋の現代化に向けた調査研究が開始された^{注 53)}。それを基礎に 2010 年に国家建築政策委員会と国土海洋部が大統領に報告した「国格向上のための新韓屋プラン」を受けて、2011 年 5 月、大統領令によって「AURI 国家韓屋センター」が設立された。この研究所では、韓屋の文化的側面や環境的側面の研究に加えて、住宅以外の建築も視野に入れた「新韓屋の産業化」に向けた政策研究を行っており、韓屋の産業化に障害要素となっている既存の法制度を改定するための研究も行われている^{注 54)}。また、関連情報の発信や人材育成なども進めている。一方、このような社会的現状に対して学術分野における新韓屋関連研究は、韓屋生産システム、新材料、新工法の開発など、韓屋の産業化を目指したものに偏っており^{注 55)}、韓屋の住空間やそこで営まれてきた生活についての検討は十分ではない。

注 53) 国土海洋部：한옥건축 산업화를 위한 기반구축 연구 1- 한옥건축 진흥을 위한 제도기반 구축 연구 -；韓屋建築産業化のための基盤構築研究 1- 韓屋建築振興のための制度基盤構築研究 -，国土海洋部，2007.8

国土海洋部：한옥건축 산업화를 위한 기반구축 연구 2- 한옥건축 산업화 촉진을 위한 기술기반 구축기획 연구 -；韓屋建築産業化のための基盤構築研究 2- 韓屋建築産業化促進のための技術基盤構築企画研究 -，国土海洋部，2007.8

国土海洋部：한옥 환경성 평가 및 한옥건축 활성화 추진방안 연구 1；韓屋の環境性評価及び韓屋建築の活性化推進法案研究 1，国土海洋部，2010

国土海洋部：한옥 환경성 평가 및 한옥건축 활성화 추진방안 연구 2；韓屋の環境性評価及び韓屋建築の活性化推進法案研究 2，国土海洋部，2010

注 54) Shim, K., Seo, S. : A Study on Characteristics and Demand of Recent Hanok Occupants, Architecture & Urban Research Institute, 2012.5

注 55) Han, J., Jang, G., Kim, C. : An Experimental Study on Mechanical Performance of Sanji Joint System for Repair and Reinforcement of Beam in Traditional Wooden Architectural Properties and it's Modernization, Journal of the Architectural Institute of Korea Planning & Design, v.25, n.04, pp.179-186, 2009.4

Bang, S., Lee, S., Park, C., Lee, J. : A Study of Establishing Wood Construction as Specialty Construction Business for Guaranteeing the Quality of Wood Structural Work in Korea, Journal of the Architectural Institute of Korea Structure & Construction, v.26, n.11, pp.119-127, 2010.11

Kim, Y., Kim, J., Lee, S. : Review Structural Safety and Propose Appropriate Sectional Size for New Traditional Korean-Style House, Journal of the Architectural Institute of Korea Structure & Construction, v.28, n.5, pp.37-44, 2012.5

榎藤智之，金善旭，金容善，蟹澤宏剛：近年の韓国における木造住宅生産に関する研究 -2000 年代以降の木造軸組構法に関連した動向 -，日本建築学会計画系論文集，第 78 巻，第 688 号，pp.1347-1354，2013.6

金善旭，榎藤智之，金容善，蟹澤宏剛：韓国・全羅南道の木造住宅振興における制度および住宅の特徴 - 幸福村事業における木造住宅生産に関する研究 (その 1)-，第 79 巻，第 697 号，pp.755-761，2014.3

韓国・全羅南道における木造住宅生産主体の特徴 - 幸福村事業における木造住宅生産に関する研究 (その 2)-，第 80 巻，第 714 号，pp.1807-1813，2015.8

本研究は、新しい韓屋のあり方の議論の充実に寄与する知見を得るために、伝統韓屋の住文化として指摘されてきた「チェとマダンからなる住空間形式とそれに対応した住み方」に着目し、既存韓屋の住空間やそれに対応した住み方について検討するものとして位置づけられる。本研究は、韓屋の伝統的住空間の現代的価値を見出し、今後の韓屋のあり方に関する知見を得るのに寄与する資料となりうる。

1.4.2 本研究の位置づけ

以上を踏まえ、本研究の独創性・新規性は以下のようにまとめられる。本研究では、韓屋における住み方を「建物と住まい手の対応」のみならず、「庭と住まい手の対応」の視点も加えて解明している。なお、本研究では、住空間の物理的状态や各空間の利用実態の把握に「チェとマダンとの関係」の分析を加えて韓屋における住み方を解明している。さらに、本研究では、伝統から現代にいたるまで時間軸のなかで韓屋における住み方の事象を総合的に考察している。

1.5 論文の構成

図 1-11 に本論文の構成を示す。本論文は、序論 (第 1 章)、本論 (第 2 章～第 5 章)、結論 (第 6 章) で構成される。

第 1 章は序論であり、研究の背景の説明、研究の目的とそれを達成するための課題の設定、研究の対象と方法の説明、及び研究の位置づけを行っている。

第 2 章では、文学作品のテキスト分析を行い、戦後激動期の韓屋における住空間と各空間の使われ方に関連する記述からその住み方を明らかにしている。

第 3 章では、近代都市化に伴う住要求に対応した韓屋の改修事例に対する実地調査を行い、住空間の実態とそれに対応した各空間の使われ方の実態を把握している。その上で、内部空間と外部空間の関係を出入動線から分析し、それに対応した住み方を明らかにしている。

第 4 章と第 5 章では、住まい手の多様な価値観に対応した韓屋の改修事例に対する実地調査を行い、住空間の実態とそれに対応した各空間の使われ方の実態を把握している。その上で、内部空間と外部空間の関係を出入動線及び視線の接続パターンから分析し、それに対応した住み方を明らかにしている。

第 6 章は結論であり、各章で得られた知見をまとめた上で、本研究の結論を述べている。

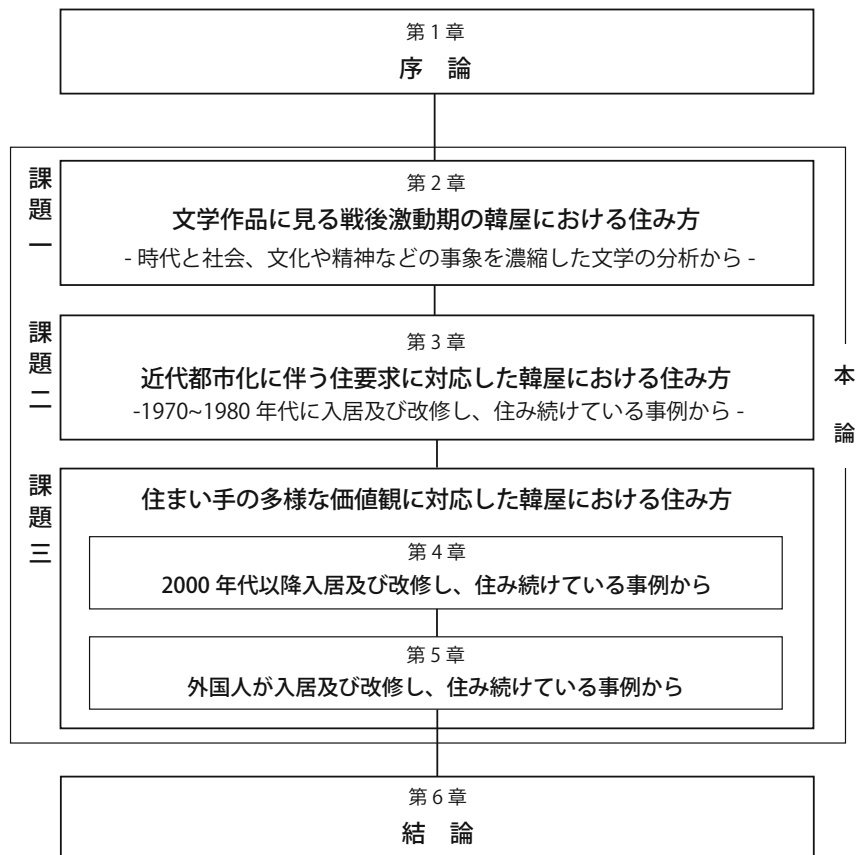


図 1-12 論文の構成

1.6 用語の定義

韓屋の一般的定義

「韓屋」とは、開港（1876年）とともに西洋の建築が伝来した以降、在来の建築と外来の建築を区分するために新しく作られた用語である。一般的に、韓国の地域に根ざした木造の戸建て住宅を総称して韓屋という。韓屋は、広い意味では韓国に建てられてきた建築物のすべてをいい、狭い意味では住宅のみを指す^{注56)}。一般的に、高麗時代から李朝時代（918-1910年）の貴族住宅が伝統韓屋、1930年代から1960年代にかけて都市の中産層向けに供給された都会型住宅が都市韓屋と呼ばれる^{注57)}。

韓屋の制度的定義

建築法に韓屋という用語が表れたのは2010年の建築法施行令が一部改定されてからで、「韓屋」とは、柱および梁が木構造方式で、韓式屋根の杵を持った構造として我が国の伝統様式が反映されている建築物および附属建築物をいう。」と定義されている^{注58)}。用途に係る規定はされておらず、これまでと同様に住宅以外の建物も視野に入れて韓屋の概念が定義されている。

チェ

建物そのものを指す言葉として用いられる時があれば、建物の数を数える単位としても用いられる。本研究では前者の意味として「チェ」という語を用いている。

マダン

敷地内の屋外空間を指す。マダンはチェに付属する生活空間であり、それぞれのチェの機能や場所によって〇〇マダンと名づけられる。本研究ではそれらを総称して「マダン」と読んでいる。一方、辞典的意味では、マダンは場所や中間領域の意味をも表す。「事が起こる場合または事に当たる時機」といって、空間的な意味だけではなく、時間的な意味をも含んだ複合的な言葉でもある。伝統仮面舞踊やパンソリという謡を数える単位のように、一種の間合いにも似た時間の概念としても用いられる^{注59) 注60)}。

注 56) 申榮勲（2005），前掲，注 19）p.179 参照。原典は、申榮勲（1983），前掲，注）45

注 57) 1960 年代以降は、木材調達が難しくなって点、また、建築法律が木造建築の建設に不利な条件に変わった点などによって韓屋は住宅市場から押し流されるようになり、煉瓦造住宅が主流となっていった（Jeon（2012），前掲，注 6）p.167 参照）。

注 58) 建築法施行令（2010 年 2 月 18 日施行、大統領令第 22052 号、2010 年 2 月 18 日一部改訂）「第 2 条（定義）の第 16 項に示されている（<http://www.law.go.kr/lsSc.do?menuId=0&p1=&subMenu=1&nwYn=1§ion=&tabNo=&query=%EA%B1%B4%EC%B6%95%EB%B2%95%20%EC%8B%9C%ED%96%89%EB%A0%B9#undefined>）。

近年の韓屋再評価の動向とともに、2010 年 2 月 18 日、建築法施行令が一部改訂された。1962 年策定された建築法では、近代の煉瓦造、鉄筋コンクリート造、鉄骨造などの建築物を対象としていたため、木造の伝統軸組である韓屋において不利な要素が多かった。新たに改定された建築法施行令では、韓屋建築に不利な一部の条件に付いて緩和規定を適用することが主な変更内容となっている。この時間問題となったのが、韓屋の範囲をどこまでにするのかとのことで、政府と複数の専門家との協議を経て、現在のような法律的定義ができています。

注 59) 金光鉉（1991），前掲，注）45，pp.70-75 参照

注 60) 韓屋の住空間の呼称の主なものについては資料編の対訳用語集を参照

チェとマダンとの関係

本研究においてチェとマダンとの「関係」とは、「動線と視線の接続パタンの組み合わせ」を指すものとする。図 1-12 に、建具の開閉方式、空間同士の動線と視線の接続パターンからみたチェとマダンの関係の概念を示す。

韓屋の空間の例の図は、曲家の基本形である L 字型韓屋の間取りを、既往文献に基づいて作成したものである。建具の開閉方式に見る空間同士の接続状態は、建具があるかないか、チェとマダンとの動線と視線が接続するかないかに分けて空間同士の接続状態を説明するものである。A と B は別空間を示す。視線と動線ともに接続可能な場合、動線のみ接続可能な場合、視線のみ接続可能な場合、どちらも接続しない場合があり、それぞれの関係を線の有無や太さ、実線と点線によって示している。建具の種類は、引き戸 (◎)・蔀戸 (△)・開き戸 (□) を記号化して示している。引き戸と蔀戸は開いている状態を前提とし、各事例における動線と視線の接続状態を判断している。開き戸は閉めている状態を前提とし、各事例における動線と視線の接続状態を判断している。なお、物理的に開口部があり、動線と視線の接続が可能であるものの、家具の配置などによって塞がれており接続不可な場合は×記号を付けている。

本研究では、別空間 A と B が建具を介さずに動線と視線ともに接続している場合が空間同士の関係が最も強いと判断している。図 1-13 の右下にある動線・視線の接続パタンの組み合わせの図は、その基準に応じて関係の尺度を示したものである。

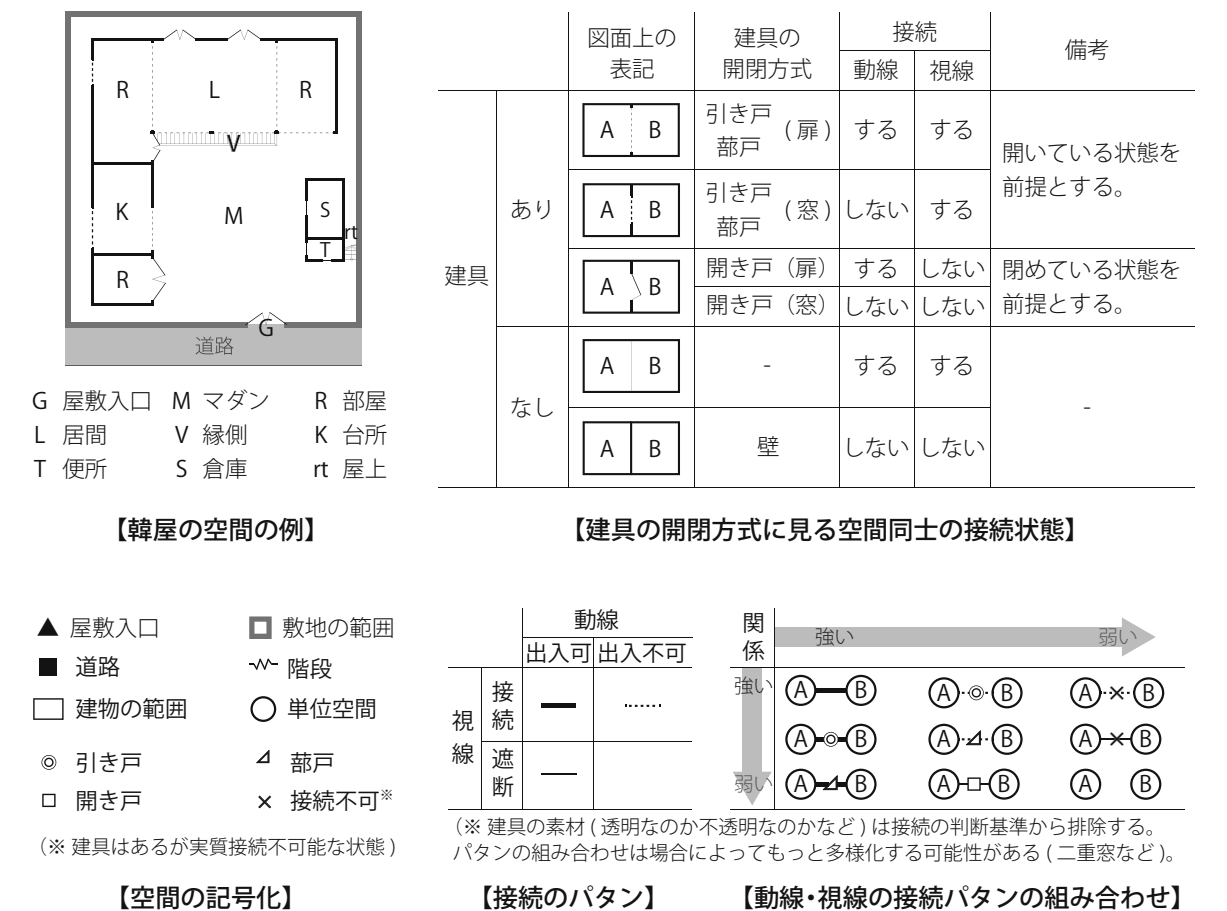


図 1-13 本研究における関係の概念

第1章参考文献

(本文は韓国語であるがタイトルは韓国語と英語が両方存在する文献は、英語と韓国語を併記している。本文とタイトルともに韓国語のみとなっている文献は、筆者の翻訳による日本語または英語と韓国語を併記している。その他、本文とタイトルともに英語である文献、本文とタイトルともに日本語である文献は、それぞれの原語を記載している。)

- ・村田次郎：南鮮民家の家構私見，朝鮮と建築，第4巻 第7号，朝鮮建築會，1925
- ・藤島玄次郎：抹樓の起源に就いて村田さんの説を評し併せて自己の意見に及ぶ，朝鮮と建築，第4巻 第8号，朝鮮建築會，1925
- ・村田次郎：言って置きたいこと（主として藤島学兄へ），朝鮮と建築，第4巻 第10号，朝鮮建築會，1925
- ・P生：中部朝鮮地方住家に對する一考察（上），朝鮮，128号，鮮總督府，1928.6
- ・P生：中部朝鮮地方住家に對する一考察（下），朝鮮，130号，鮮總督府，1928.8
- ・朴吉龍：朝鮮住宅雜感，朝鮮と建築，第20巻，第4号，朝鮮建築會，1941
- ・野村孝文：朝鮮住宅の変遷の概要，朝鮮と建築，第21巻，第10号，朝鮮建築會，1942
- ・朱南哲：韓国住宅建築，一志社，1980
주남철：한국주택건축，일지사，1980
- ・朱南哲（著），野村孝文（翻訳）：韓国の伝統的住宅，九州大学出版会，1981
- ・野村孝文：朝鮮の民家－風土・空間・意匠－，学芸出版社，1981
- ・申榮勲：韓国の民家（上），悦話堂，1983
신영훈：한국의 살림집（上），열화당，1983
- ・張保雄（著），佐々木史郎（翻訳），古今書院，1989
- ・ハウジング・スタディ・グループ（編著）：韓国現代住居学－マダンとオンドルの住様式，建築知識，1990
- ・金光鉉：韓国の住宅－土地に刻まれた住居－，丸善株式会社，1991
- ・張保雄：韓国民家の地域的展開，寶晉齋，1996
장보웅：한국민가의 지역적 전개，보진재，1996
- ・申榮勲：われわれが知るべき我が韓屋，hyeonamsa，2000
신영훈：우리가 정말 알아야 할 우리 한옥，현암사，2000
- ・申榮勲（著），西垣安比古（監訳）：韓国の民家，法政大学出版局，2005
- ・Jeon, B., Kwon, Y.：韓屋と韓国住宅の歴史，Dongnyok，2012
전봉희, 권용찬：한옥과 한국 주택의 역사，동녘，2012
- ・国土海洋部：韓屋建築産業化のための基盤構築研究 1- 韓屋建築振興のための制度基盤構築研究 -，国土海洋部，2007.8
국토해양부：한옥건축 산업화를 위한 기반구축 연구 1- 한옥건축 진흥을 위한 제도기반 구축 연구 -，국토해양부，2007.8
- ・国土海洋部：韓屋建築産業化のための基盤構築研究 2- 韓屋建築産業化促進のための技術基盤構築企画研究 -，国土海洋部，2007.8
국토해양부：한옥건축 산업화를 위한 기반구축 연구 2- 한옥건축 산업화 촉진을 위한 기술기반 구축 기획 연구 -，국토해양부，2007.8
- ・国土海洋部：韓屋の環境性評価及び韓屋建築の活性化推進法案研究 1，国土海洋部，2010

- 국토해양부 : 한옥 환경성 평가 및 한옥건축 활성화 추진방안 연구 1, 국토해양부, 2010
- auri National Hanok Center : Hanok Construction Practice Manual, auri National Hanok Center, 2012
 - Shim, K., Seo, S. : A Study on Characteristics and Demand of Recent Hanok Occupants, Architecture & Urban Research Institute, 2012.5
 - Shin, C., Lee, S. : A Study on the Policy of Revitalizing Hanok Market through Creating Effective Demand, Architecture & Urban Research Institute, 2012
 - Lee, K., Oh, S., Shin, C., Lee, J., Lee, S. : Annual Hanok Statics 2014, Architecture & Urban Research Institute, 2014.12
- 이강민, 오성훈, 신치후, 이종민, 이세진 : 2014 한옥통계백서, 건축도시공간연구소, 2014.12
- Han, J., Jang, G., Kim, C. : An Experimental Study on Mechanical Performance of Sanji Joint System for Repair and Reinforcement of Beam in Traditional Wooden Architectural Properties and it's Modernization, Journal of the Architectural Institute of Korea Planning & Design, v.25, n.04, pp. 179-186, 2009.4
 - Bang, S., Lee, S., Park, C., Lee, J. : A Study of Establishing Wood Construction as Specialty Construction Business for Guaranteeing the Quality of Wood Structural Work in Korea, Journal of the Architectural Institute of Korea Structure & Construction, v.26, n.11, pp.119-127, 2010.11
 - Kim, Y., Kim, J., Lee, S. : Review Structural Safety and Propose Appropriate Sectional Size for New Traditional Korean-Style House, Journal of the Architectural Institute of Korea Structure & Construction, v.28, n.5, pp.37-44, 2012.5
 - 権藤智之, 金善旭, 金容善, 蟹澤宏剛 : 近年の韓国における木造住宅生産に関する研究 -2000 年代以降の木造軸組構法に関連した動向-, 日本建築学会計画系論文集, 第 78 巻, 第 688 号, pp.1347-1354, 2013.6
 - 金善旭, 権藤智之, 金容善, 蟹澤宏剛 : 韓国・全羅南道の木造住宅振興における制度および住宅の特徴 - 幸福村事業における木造住宅生産に関する研究 (その 1)-, 第 79 巻, 第 697 号, pp.755-761, 2014.3
 - 韓国・全羅南道における木造住宅生産主体の特徴 - 幸福村事業における木造住宅生産に関する研究 (その 2)-, 第 80 巻, 第 714 号, pp.1807-1813, 2015.8
 - ソウル特別市 : 北村を作る基本計画 - 韓屋実測図面集, 2001.12
 - 서울특별시 : 북촌가꾸기 기본계획 - 한옥실측도면집, 2001.12
 - ソウル特別市 : 景福宮西側第 1 種地区計画 - 人文歴史環境および韓屋調査報告書, 2010.6
 - 서울특별시 : 경복궁서측 제 1 종지구단위계획 - 인문역사환경 및 한옥조사 보고서, 2010.6
 - Seoul Metropolitan Government • Korean National Commission for UNESCO : The 20th Century Urban Cultural Heritage in Our Daily Life-UNESCO Asia-Pacific International Forum on the Preservation of Urban Cultural Heritage-, Korean National Commission for UNESCO, 2010
 - 金鴻植 : 民族建築論, hangilsa, 1987
 - 김홍식 : 민족건축론, 한길사, 1987
 - 韓屋空間研究会 : Culture in Traditional Korean Home, kyomunsa, 2004
 - 한옥공간연구회 : 한옥의 공간문화, 교문사, 2004

- Hwang, D. : 韓屋が戻ってきた, space, 2006
황두진 : 한옥이 돌아왔다, 공간사, 2006
- 新しい韓屋のための建築人会 : 韓屋に住もう, dolbegae, 2007
새로운 한옥을 위한 건축인 모임 : 한옥에 살어리랏다, 돌베개, 2007
- Kim, W. : 分かりやすい韓国建築用語辞典, dongnyok, 2007
김왕직 : 알기쉬운 한국건축 용어사전, 동녘, 2007
- 歴史景観研究会 : 韓国庭園踏査手帳, dongnyok, 2008
김왕직 : 알기쉬운 한국건축 용어사전, 동녘, 2008
- 高田光雄 : 京都だより - 新韓屋と学びあう -, 京都府建築士会機関誌, 2011.11
- 한국 공예디자인 문화진흥원 : 한국적 실내공간 디자인북, 한국 공예디자인 문화진흥원, 2013
한국工藝디자인文化振興院 : 韓国的室内空間デザインブック, 한국工藝디자인文化振興院, 2013
- Martin Hidegger (著), Alfred Hofstadter (翻訳) : Building Dwelling Thingking, NewYork: Harper and Row, 1971
- Christian Norberg-Schulz : The Concept of Dwelling, Rizzoli, 1984
- 山本厚生, 中島明子 (編著) : 家族と住まい, ドメス出版, 1985
- 巽和夫 (編著) : 現代ハウジング用語辞典, 彰国社, 1993
- 住環境の計画編集委員会編著 : 住環境の計画 2 住宅を計画する (第二版), 彰国社, 1998
- 塩谷 壽翁 : 異文化としての家 - 住まいの人類学事始め -, 圓津喜屋, 2002
- 本間博文 : 住まい学入門, 放送大学教育振興会, 2007
- Architectural Institute of Korea : Introduction to Housing, kimoondang, 2010
대한건축학회 : 주거론, 기문당, 2010
- 木の文化研究会 : 木の住まい, 日本くらし館, 2014
- 佐藤郁哉 : フィールドワーク - 書を持って街へ出よう (ワードマップ) -, 新曜社, 1992
- Merriam, S.B. : Qualitative Research and Case Study Applications in Education-Revised and Expanded from Case Study Research in Education-, Jossey-Bass, 1997
- Merriam, S.B. (原著), 堀薫夫, 久保真人, 成島美弥 (訳) : 質的調査方法入門教育における調査法とケース・スタディ, ミネルヴァ書房, 2004
- Uwe Flick : An Introduction to Qualitative Research, Sage Publications Ltd, 2002
- Uwe Flick (原著) 小田博志, 山本則子, 春日常, 宮地尚子 (訳) : 質的研究方法入門 "人間の科学" のための方法論, 春秋社, 2011
- Thomas A. Schwandt : The Sage Dictionary of Qualitative Inquiry-Third Editition.-, Sage Publications Ltd, 2007
- Thomas A. Schwandt (原著), 伊藤勇, 徳川直人, 内田健 (訳) : 質的研究用語辞典, 北大路書房, 2009
- 谷富夫, 山本努 (編著) : よくわかる質的社会調査プロセス編, ミネルヴァ書房, 2010
- Park, E. : Modern Division of the Style of Gardens Presented in Korean Traditional House Yard, Journal of Korean Institute of Traditional Landscape Architecture, vol.29, no.2, pp.28-38, 2011
- 統計省国家指標システム Hp <http://www.index.go.kr/potal/main/PotalMain.do>
통계청 국가지표체계 HP <http://www.index.go.kr/potal/main/PotalMain.do>

第 2 章

文学作品に見る戦後激動期の韓屋における住み方

2.1 はじめに

2.1.1 本章の目的

住宅における持続と変容は、時代や社会の状況のみならず住まい手の住要求や考え方にも影響を受ける。そのため、韓屋についてより本質的な議論が行われるためには住空間の物理的状态のみならず、それに対応してきた住み方について究明する必要がある。これはチェとマダンの関係を大事にして培われてきた韓屋の居住文化について議論する上でも重要な手掛りになると考えられる。一方、伝統韓屋の場合は実物を対象とした空間の相互関係は検討可能だが、住み方については実証が難しい。都市韓屋の場合は住空間の構成や住み方どちらにおいても変容を重ねた後の状態に対する検討になる。

そこで本章では、韓国現代文学『庭の深い家』を取り上げる。『庭の深い家』は、朝鮮戦争直後の1954年、大邱市のとある韓屋「庭の深い家^{注1)}」で住んだ日常の物語を題材とした、作家金源一(キムウォニル)の自伝小説である(以下、文学作品そのものは『庭の深い家』、住宅は「対象住宅」と記す)。本章では、『庭の深い家』のテキストをもとに対象住宅における変遷の様子を踏まえて①チェとマダンが繋がった住空間の構成、②チェとマダンのつながりに対応してきた住み方の特徴について明らかにすることを目的とする。

2.1.2 研究の対象と方法

本章では、一連の過程を経て小説『庭の深い家』を分析対象としている^{注2)}。『庭の深い家』は金源一の代表作で、戦後の韓国社会を圧縮的に表現した韓国現代小説の傑作として知られており、日本以外にもスペイン、フランス、ドイツ、アメリカなどの国で翻訳書が発刊されている^{注3)}。作家金源一は、朝鮮戦争による分断の傷を受けた自分の家族史を題材とした作品を多数発表しており、韓国を代表する分断文学作家として認められている。

対象住宅には、マダンを囲んで上の棟と呼ばれる大家の住まいがあり、下の棟と呼ばれる、小さい部屋が4つ立ち並んだ借家世帯の住まいがある。『庭の深い家』では、彼らが一緒に朝鮮戦争前後の「汚らしい歳月」と「悲惨な貧しさ」を生き抜く日々の生活を繊細に描いている^{注4)}。事実と虚構が共存する文学の特性上、作家個人の経験の一部を拡大または縮小することがある。しかしながら、文学は言語を通じて時代性・社会状況・歴史文化・生活様式・意識や思想などの諸要素が投影される産物であることから、『庭の深い家』は本研究の目的に合致する対象と考えられる。

注1) 「庭の深い家」とは作家家族が対象住宅に住んだ時、マダンが他の地面より5段ぐらい低くなっているのを見て付けた呼び名である。

注2) 研究対象になりうる文学作品を選定するために、韓国の国会電子図書館 HP(<http://dl.nanet.go.kr/index.do>) から「マダン」を主要語としており、タイトルにマダンが含まれている文献を検索した(2013年12月現在)。その結果、全662件が見つかった。一般図書53件、国内学術記事577件、学術誌4件、e-book1件、Multimedia資料2件があったが、韓屋におけるマダンを取り扱っている文献は小説『庭の深い家』1件だった。その他、エッセイが1件あったが、マダンで感じる個人の感性について書いており、韓屋の空間構成やそれに対応した住生活について検証する対象としては不適切だと判断し除外した。

注3) 時代を描いた文学作品としての価値が高く評価され、1990年1月には韓国MBC放送から8回構成のドラマとしても放映された。

注4) 大邱中区都心再生文化財団 HP(<http://jp.djdrf.or.kr/story02.htm>)

『庭の深い家』に出現する全ての言葉について出現頻度を把握した結果から上位 30 位までを表 2-1 に示す^{注5)}。対象作品では<家><部屋><棟^{注6)}><庭^{注7)}>などのように住宅各部の名称や、<母さん><チュノ><姉さん><家族>などのように家族構成員を表す言葉の出現頻度が高い。以上から、『庭の深い家』は住宅とそこに住む人たちの話が主な構成要素となっていることが分かる。この小説は、生活や生活空間について分析考察を行う研究対象として意義のある文学作品であると考えられる。

韓国語原作『마당 깊은 집 (1991、文学과知性社)』を読んだ上で、対象住宅の生活空間や生活に関連する記述について日本語訳書『庭の深い家；韓国の現代文学第2巻長編小説Ⅱ(1992、柏書房)』と対照しながら分析考察を行った。まずは伝統韓屋から都市韓屋へと変遷過程にある対象住宅の特徴をより明確に把握するために、作家が対象住宅に住み始める 1954 年 4 月の現状にいたるまでの経緯をもとに対象住宅の変遷の様子を検討する。また、対象住宅における居住者の属性、チェとマダンによる住空間構成について検討する。その上で、住まい手の生活行為をもとにチェとマダンの使われ方について把握し、住空間の関係に対応した住み方の特徴について検討する。

表 2-1 『庭の深い家』における言葉の出現頻度

	抽出語	出現回数		抽出語	出現回数		抽出語	出現回数
1	母さん	410	11	前	168	21	話	97
2	家	324	12	大家	158	22	手	95
3	部屋	285	13	下	136	23	上	94
4	人	249	14	家族	131	24	外	88
5	チュノ	247	15	顔	129	25	声	87
6	姉さん	203	16	言葉	128	26	ご飯	78
7	棟	198	17	目	125	27	仕事	78
8	父さん	195	18	自分	117	28	男	76
9	新聞	189	19	水	108	29	学校	75
10	庭	177	20	店	102	30	兄さん	73

網掛 住宅各部の名称および家族構成員を示す言葉



写真 2-1 (左から 1) 作家のキムウォニル氏が覚えている「庭の深い家」の跡地

写真 2-2 (左から 2) 「庭の深い家」の跡地を含めてその一帯が市の近代観光資源となっている

写真 2-2 (左から 3) 『庭の深い家』の空間的背景をもとに企画された路地ツアーのスタート地点

注 5) 主としてテキストマイニング分野で用いられる TF-IDF 法の TF 値を使って対象作品における言葉の出現頻度を調べた。助詞や動詞、文章記号は除いた結果を載せている。TF(Term Frequency) は特定の単語が文書内でどのくらい出現しているのかを表す値で、TF 値が高いほど文書の中で重要であると理解できる (出典: <http://en.wikipedia.org>)。

注 6) 本稿でいう「チェ」のことである。

注 7) 本稿でいう「マダン」のことである。

2.2 対象住宅の現在に至るまでの経緯

2.2.1 主人公が住む前までの経緯

対象住宅における建物や居住者属性の変化が分かる記述を表 2-1 に示す。表 2-2 の内容は、主人公であるキルナミが対象住宅に住み始めた 1954 年 4 月に大家のおばあさんから聞いた話による。建物の状況、住空間の構成、住まい手の属性を中心にキルナミが住む前までの経緯を検討する。

(1) 倭政 (日本統治期 1910-1945 年) 初期

大家のおばあさんが若いころの倭政時代初期は、先代の人たちが住んでいて大門の近くにあるチェには馬丁も住んでいたことが分かる。この時期の対象住宅では大家世帯と使用人世帯が共存し、伝統韓屋のように身分による社会関係が形成していたことが分かる。

(2) 解放された年の秋 (1945 年～)

この時期には伝統韓屋のように身分による住み分けは見られない。対象住宅では大家のおばあさんやその息子夫婦 (大家のおじさんと大家の小母さん) が同居した。大門からアクセスする外棟には使用人ではなく大家の小母さんの親戚が住んだことが分かる。また、外棟は倭政初期には草葺きの家だったのが一回滅失し、トタン屋根の家に建て替わる。トタンは開港以降輸入された近代的な建築材料で、この時期の対象住宅では居住者構成による社会関係が伝統韓屋と異なっているだけでなく、建築的にも異なった様子が見られる。

(3) 戦争が起きた年の夏 (1950 年～)

大家世帯と血縁関係にある人が住むのは、朝鮮戦争が起きた 1950 年代に入ってからも続けられる。大門の側に店舗用の空間を作り出し、外棟の増改築を行う物理的な変化はあるものの、そこに住む居住者は大家世帯と血縁関係を持った人である。

(4) 戦争休戦後 (1954 年の春)

朝鮮戦争休戦後 1954 年の春になると、対象住宅では新しい社会関係が見られる。この時期は、キルナミ (作家・主人公) 家族を含む避難民たちが対象住宅に借家世帯として住んだことが分かる。また、もともと部屋が二つだった下の棟は、もっと多くの世帯に貸すために部屋が四つの建物に改築される。この時期の対象住宅における居住者属性や生活空間の構成の詳細については 2.2.3 項で検討する。

2.2.2 対象地域と住まい手の属性

(1) 戦争休戦後の大邱市都心部の状況

小説の時代的背景となる 1950 年代の大邱市都心部では、戦争景気がにぎわっていて、大家世帯のように元々経済的な力を持っている社会階層には一層裕福になる機会が得られた。しかし、全国から集まってきた避難民たちのように経済力が低い階層は、もっと貧しい生活をしていた。このような両極端の様

表 2-2 対象住宅が 1954 年 4 月の状態に至る経緯―建物および住まい手の属性の変化から

	住空間	家族構成	使われ方	関連記述
倭政 (日本統治期 1910-1945 年) 初期	伝統韓屋のように 複数のチェとマダ ンが存在：聳大門 *2 → 外庭 → 厩と馬 丁のチェ(外棟) → 中門 → 大家世帯の チェ	A0 + 使用人(馬 丁)の家族	伝統韓屋での生 活のように身分 による住み分け	大家のおばあさんの話では、彼女が《中略》若 奥様時代の倭政初期、《中略》舅に会いに、《中略》 大邱に来たときにしても、 <u>聳大門</u> *1 内の外庭に は厩と馬丁の家族が住んでいた三間の草葺きの 家があったという。《中略》大邱の <u>壮観洞の家(対 象住宅)</u> を建てた人は、《中略》大家の <u>小父さん の曾祖父</u> 《後略》
倭政時代～解 放以前と推測	馬丁家族の住んだ 三間の草葺きの家 (外棟)は滅失	不明	空地のまま放 置、又は野菜畑	草葺きの家はいつごろからなくなり、雑草ば かりがぼうぼうに生い繁っていたり、ある時代 には野菜畑になったり《後略》
解放された 年の秋 (1945 年)	馬丁家族の家が あった場所にトタ ン屋根の家(外棟) が一軒新築	A1+A2+A3	大家世帯と血縁 関係の人が居住	解放になった年の秋、トタン屋根の家が一軒そ こにできた。《中略》大家の <u>小母さんの親戚</u> がい い加減に家を造って《中略》直系の孫である今 の <u>大家の小父さんが、壮観洞の家(対象住宅)</u> を手に入れることになったのは解放を迎えた年 (1945 年)であった。
戦争が起きた 年の夏 (1950 年)	大門の左側に店舗 用の空間増築(外棟 の増築と推察され る)	A1+A2+A3	大家世帯と血縁 関係の人が居住	戦争が起きた年の夏、その家族(大家の小母さ んの親戚)が忽然と去ってしまい、新たに入っ て来た家族が <u>金泉宅</u> *3 で《中略》金泉宅もまた、 大家の小母さんの親戚であった。《中略》彼女は 大門の左側の土塀を崩して、路地に店を出し、 飴や乾パンなどの間食用の食物《後略》
戦争休戦後 (1954 年の春； 小説の話者が 住んだ時期)	下の棟の改築：部 屋の真ん中に板の 壁を作って四つに し、二つの部屋を 四つに	A1+A2+A3+B	大家世帯と血縁 関係の人＋非血 縁関係の借家世 帯が居住	もともと下の棟は部屋が二つであったが、戦争 が起これと、もっと多くの世帯(和訳に「家族」 となっていたが「世帯」と再翻訳した。韓国語 原書には「家口」に書いてある。)に貸すため部 屋の真ん中に板の壁を作って四つにしたもので、 うち(話者)の五人家族が横になると足の踏み 場もないほど狭くなり、《後略》

※ 表内の斜字は小説で抜粋した関連記述を示す(関連記述は pp.16-19 から抜粋)。()、《 》および下線は筆者による。

A0：大家の小父さんの曾祖父 A1：大家の小父さんの両親(大家のおばあさん) A2：大家の小父さん夫婦(大家の
おばあさんの息子夫婦) A3：大家の小母さんの親戚 B：借家世帯(話者の家族を含めた避難民たちの家族)

*1 この表では、1954 年 4 月以前の状態についての記述にもとづいて分かった空間の変化のみを示している。
対象住宅の全体的な空間構成は 2.3 でより詳しく説明する。

*2 「聳大門」(ソスルデムン)とは両脇にある建物の屋根よりも門柱を高くした形になっている大門である。

*3 「宅」とは婦人の里の地名につけて、その地方から嫁いで来た人であることを示すが、既婚婦人の呼称としてよく使われる。

表 2-3 対象住宅における住まい手の属性

区分			関連記述 ^{*1}	家族構成員
上の棟 (C1)	立場	家主	<u>上の棟に住む大家さん</u> は何代かにわたって慶尚北道義城郡では知られた <u>土豪</u> であり、大家の小父さんの曾祖父に当たる人は朝鮮朝の末期、大丘（テグ）府の都事（いまの知事に当たる）まで務めた <u>門閥</u> の一家であった。	おばあさん（七十に手が届く年齢；家の切り盛り）、 小父さん（木綿工場経営）、 小母さん（貴金属や時計販売店、頼母子のオヤ）、 ソングン兄さん（大学二年）、おでこ兄さん（高校二年）、お利口兄さん（中学二年）、 小父さんの姪（高校三年）、 アンさん（二十才半ば；女中）
	世帯構成	大家家族 + 女中 	上の棟の家族は全部で八人であった。大家の小父さんは《中略》 <u>大家の小母さん</u> は《中略》 <u>大家のおばあさん</u> 《中略》 <u>女中のアンさん</u> 《中略》大家の小父さんと小母さんの間には、大学の二年生から中学の二年生まで息子ばかり三人いた。ソングン兄さん、おでこ兄さん、お利口兄さんであった。そして <u>大家の小父さんの姪</u> 《中略》 <u>高校三年の女子高生</u> 《中略》 <u>女中のアンさん</u> 《後略》	
下の棟 (C2)	立場	借家世帯	<u>下の棟の四家族はみな避難民の集まりで、その当時、壮観洞の家々にはだいたい一、二家族の避難民が玄関脇の部屋や離れ、下の棟に間借りしていた。</u>	
	世帯構成	京畿宅 ^{*2} 家族 	一番目の部屋は、京畿道延白郡から避難して来た <u>京畿宅の家族</u> 《中略》 <u>家族は三人</u> 《中略》 <u>京畿宅の息子、フングユさんは市のはずれの歯医者者の技士</u> 《中略》 <u>京畿宅の娘、ミソニ姉さん</u> は《後略》	京畿宅（五十代の初め）、フングユさん（歯医者者の技士）、ミソニ姉さん（米八軍のPX販売員、夜間高校生）
		チュノ 家族 	二番目の部屋は <u>退役将校の傷痍軍人家族</u> が住んでいた。やはり <u>三人家族</u> であった。《中略》 <u>チュノの父さんは人を見ると</u> 《中略》 <u>五歳になるチュノ</u> は《後略》	チュノの父さん（傷痍軍人）、母さん（果物の行商）、チュノ（五歳）
		平壤宅 家族 	三番目の部屋は <u>平壤宅の家族</u> 《中略》 <u>みんなで四人家族</u> だった。京畿宅より年が三つか四つ下の <u>平壤宅は、彼女は娘一人、息子二人をもうけていた。長男、チョンテさん</u> は《中略》 <u>次男のミニ兄さん</u> は《後略》	平壤宅（軍服商売）、スナ姉さん（妙齢の娘）、長男（無職）、次男（高校三年）
		うちの ^{*3} 家族 	<u>ぼくが大邱に来てみると、ソングレ姉さんは中学三年生</u> 《中略》 <u>キルジュンはその年、国民学校に入学</u> 《中略》 <u>末の弟キルスは、すでに三つ</u> 《中略》 <u>うちの家族が住んでいた四坪にもならない、母さんの表現では白粉箱みたいな部屋</u> 《中略》 <u>うちの五人家族が横になると</u> 《後略》	母（針仕事）、ソングレ姉さん（中学三年）、キルジュン（国民学校）、末の弟キルス（五歳）、ぼく（キルナミ・作家、新聞配達員）

※ 表内の斜字は小説で抜粋した関連記述を示す。（ ）、《 》および下線は筆者による。

表内の「C1」と「C2」は図 2-1 及び表 2-3 に対応する。

*1 関連記述は全て小説の第1章にあり、キルナミ家族については pp.11-12、その他は p.19-23 から抜粋している。

*2 「宅」とは婦人の里の地名につけて、その地方から嫁いで来た人であることを示すが、既婚婦人の呼称としてよく使われる。

*3 キルナミ（作家・主人公）の家族を示す。

子は、小説の中で描かれている住まい手の属性や彼らの日々の生活からも良く分かる。

(2) 対象住宅の住まい手の属性

対象住宅における住まい手の属性を表 2-3 に示す。対象住宅では代々土豪である金持ちの大家世帯と、朝鮮戦争で全国から避難してきた借家世帯が同居することが分かる。経済的格差がある複数の階層が賃貸借関係によって同居する居住者構成は、戦前の対象住宅では見られない新しい様子である。さらに、身分や性別による社会関係が形成していた伝統韓屋にも見られない新たな社会関係である。

「その当時、壮観洞の家々にはだいたい一、二家族の避難民が玄関脇の部屋や離れ、下の棟に間借りしていた。(p.19)」との記述から、戦後の大邱市都心部の住宅地には対象住宅のように経済的格差がある大家世帯と借家世帯が同居することが一般的な現状として表れていたと考えられる。また、これは戦後という特殊な社会状況から影響を受けたと考えられる。

2.3 改修後の住空間の現状

2.3.1 チェとマダンによる住空間構成の持続と変容

対象住宅の空間構成について検討したものを表 2-4 に示す。また、表 2-4 をもとにチェとマダンによる住空間の構成を図 2-1 に示す。対象住宅では、伝統韓屋のように複数のチェと複数のマダンが一体となった空間構成の特徴が見られる。一方、チェとマダンによる空間の相互関係は引き継がれたものの、詳細を見ると伝統韓屋での空間秩序が崩壊した部分もある。伝統韓屋では、身分や性別による空間秩序に基づいて大門(デムン、以下、「大門」と記す。)と一緒に使用人のチェである行廊棟が道路に面しており、中門を通ると表の方に男性中心の空間である舎廊棟があり、一番奥の方には女性中心の空間である内棟がある。さらに、舎廊棟と内棟はそれぞれのマダン(舎廊庭と内庭)を持っている。しかし、対象住宅では、大門(G1)と一緒に道路に面している外棟(C3)(バカッチェ、以下、「外棟」と記す。)から外庭(M2)(バカツマダン、以下、「外庭」と記す。)を通じて中門(G2)を入ると、全てのチェが内庭(M1)を囲んで配置されている。具体的には、中門(G2)を入ると先ず下の棟(C2)(アレチェ、以下、「下の棟」と記す。)と呼ばれる離れがあり、奥の方に上の棟(C1)(ウィチェ、以下、「上の棟」と記す。)と呼ばれる領域がある。さらに、上の棟(C1)は内棟(C1 ①)と舎廊棟(C1 ②)で構成されるが、伝統韓屋とは異なり、同じ場所に併置されている。

関連記述だけでは空間関係を判明しにくい表現もあった。例えば、「南向きの上の棟は部屋が四つの内棟と一間の舎廊棟に分かれていた。上の棟の二つの韓屋は五段の階段の上に堂々とのつかった軒丸瓦葺きの家であった。(p.18)」との記述があるが、「チェ」とは独立した一つの住棟を数える単位であり、上の棟が2棟に分けているという表現には矛盾がある。小説で使われる上の棟という言葉は、チェの辞典的定義に基づいたものではなく大家世帯が住む領域を示す言葉である可能性があると考えられる。

下の棟(C2)については、「低い平瓦葺きの家《中略》下の棟からは頭を上げなければならないほど、五段の階段の上の棟が高く居を構えて《中略》下の棟は大きさの同じ部屋が四つあった。(p.18)」との記述から、上の棟(C1)より地面が五段ぐらい低いこと、四つの部屋がある建物であることが分かる。また、関連記述によ

表 2-4 対象住宅の住空間を構成する各空間と関連記述

空間名	関連記述
大門 G1	「庭の深い家(対象住宅)」の構造から説明しようとすれば、何といても <u>大門から始めるのが、順序</u> というものだろう。東向き的大门は《後略》
外棟 C3	金泉宅《中略》彼女は大門の左側の土堀を崩して、路地に店を出し(外棟)、《中略》内棟の人たちは《中略》大門を使わず、 <u>金泉宅の店(外棟)を通して簡易釜屋を抜ける</u> くぐり戸から外に出たり入ったり《中略》 <u>外庭と内庭の間には《中略》中門があった。</u>
外庭 M2	
中門 G2	中門を抜けると、五段の石階段の下の地面がぼこっとへこんでいる五十坪ほどの広い内庭に出る。《中略》中門の階段の下に板で造った便所《中略》内庭の中には小さな池《中略》池の周囲に青石《中略》小高く盛り上がった庭園のとりどりの木や草花が、 <u>上の棟と下の棟をある程度さえぎって《後略》</u>
内庭 M1	
上の棟 C1	上の棟は <u>大庁(デチョン; 朝鮮張りの板の間)</u> を間にして、 <u>部屋が四つの内棟と一間の舎廊棟に分かれていた。</u> 《中略》 <u>上の棟の二つの韓屋は五段の階段の上に《中略》舎廊棟の片抹楼(チョッマル; 縁側と類似な板張空間の一種)の端には《後略》</u>
内棟 C1 ① 舎廊棟 C1 ②	
下の棟 C2	母屋の端にある釜屋(ブオク; 台所)の前の流し(水道)を間にして、 <u>内棟とカギ型をなす長い下の棟は中門と向かい合っている東向きであった。</u> 《中略》 <u>低い平瓦葺きの家《中略》五段の階段の上の棟《中略》大きさの同じ部屋が四つ《後略》</u>

※ 表内の斜字は小説で抜粋した関連記述を示す。()、《 》および下線は筆者による。

筆者の判断により、庭や内庭は「内庭」に統一、母屋は「内棟」、台所は「釜屋」に再翻訳した。

関連記述は全て小説の第1章から抜粋した(pp.16-18)

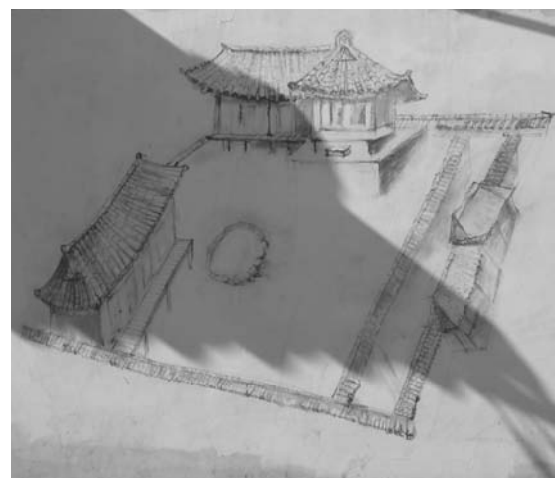
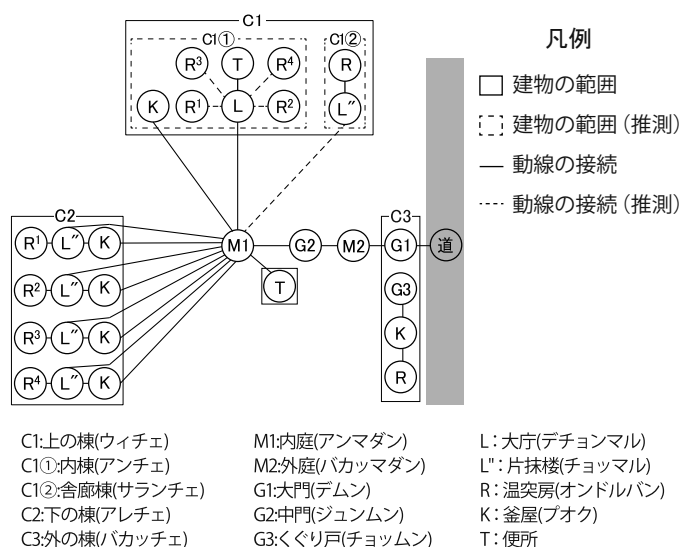


写真 2-3 テキストをもとに作成されたスケッチ
(出典：対象住宅の跡地の壁画(筆者撮影, 2014.3))

図 2-1 対象住宅の空間組織

ると地面のレベルは内庭と同じ程度で低いと推察される。

2.3.2 チェとマダンの形態の持続と変容

内棟 (C1 ①) の形については「倭政時代に改造したという内棟だけは大庁 (デチョン; 板張りの大広間、以下、「大庁」と記す。) にガラスの入った戸をつけ、《中略》韓屋でも洋館でもない、どっちつかずの体をなしていた。(p.18)」との記述から、伝統韓屋では使われないガラスを使った改修が行われたことが分かる。舎廊棟 (C1 ②) の形については「造作をこらした欄干をつけて韓屋の格調高さを生かしたが《後略》(p.18)」との記述から、伝統韓屋の形を継承していたことが分かる。以上より、対象住宅では建物の形態においても伝統と近代の要素が混ざった過渡期的性格が表れていると考えられる。

マダンについては主に内庭 (M1) を中心に描かれている。「五段の石階段の下の地面がぼこっとへこんでいる五十坪ほどの広い内庭《中略》庭の中には小さな池があり、池の周囲に青石をのせて風雅な趣きを出した庭園が編まれていた。その小高く盛り上がった庭園のとりどりの木や草花が、上の棟と下の棟をある程度さえぎってくれた。(pp.17-18)」との記述から、対象住宅の内庭 (M1) は地面がチェより低く、広い面積の一部に観賞用の庭園が造られていたことが分かる。さらに、上の棟 (C1) と下の棟 (C2) に囲まれ、庭園の木や草花によって上の棟 (C1) と下の棟 (C2) の物理的な距離が確保できる空間であることが分かる。

当時の生活空間の使われ方について、主な記述対象となっている上の棟、下の棟および内庭を中心に検討する。

2.4 住空間の使われ方に見る住み方の現状

2.4.1 チェの使われ方

空間軸に沿ったチェの使われ方を表 2-5 に示す。対象住宅では、内庭 (M1) を囲んで上の棟 (C1) に大家世帯が、下の棟 (C2) に借家世帯四家族が生活する。

(1) 上の棟 (C1) の使われ方について

内棟 (C1 ①) については、主に大庁 (L) での生活を中心に下の棟の人たちが覗いた上の棟の大家家族の生活が描かれている。大庁 (L) は大家家族が集まって食事をしたり、お客さん呼んでパーティーをしたりすることが分かる (表 2-5「上の棟 C1」欄を参照)。大庁 (L) 以外の個室の使われ方が分かる記述は見当たらない。

舎廊棟 (C1 ②) については、大家夫婦の起居空間であることが把握できた。対象住宅の舎廊棟は、男性中心の空間であり対社会的性格を持つ伝統韓屋の舎廊棟の使われ方は消滅し、内棟 (C1 ①) と同様に家族の構成員の個室として使われることが分かる。

(2) 下の棟 (C2) の使われ方について

下の棟 (C2) では避難民家族が借家世帯として生活する。4 世帯どちらにおいても部屋 (R) は食寝が分離されていない状態で使われる。具体的には「就寝、食事、家事・仕事、勉強、出産」など、様々な使

表 2-5 空間軸に見るチェの使われ方

空間軸		関連記述	使われ方
上の棟 C1	部屋 R	大庁を間にして、部屋が四つの内棟《後略》	個室
	大庁 L	大家のおばあさんと女中のアンさんが大庁で昼食を食べるときは、《後略》(p.63) おばあさんも京畿宅の《中略》ぼくは(内庭で)薪割りをしてながら、日の当たる大庁の端に座って二人のかわす話を聞いた。(p.151) 「明日の晩に家でパーティーを開くんですよ。十何人も招待するっていうから、大庁がいっぱいになるでしょうよ。《後略》」(p.170) 上の棟の大庁でくり広げられたパーティーこそ、じつに見逃せない見物であった。(p.174) 大庁のガラス戸の内側に盛んにくり広げられるパーティー《中略》大庁には大型のおが屑ストーブが赤く燃え上がっており、《中略》大庁の一方には白い布をかぶせた脚の長い食卓があり、その上にはいろいろな種類の料理と酒瓶が並んでいた。(p.176)	食事 会話 パーティー 椅子座式生活
	釜屋 K	「女がお風呂をつかっているから、お前は戸を開けちゃだめよ」アンさんが釜屋の中からいった。(p.167) 上の棟の釜屋では明るい灯の下で、君芳閣から派遣された料理士が次から次へと新しい料理を作っていた。(p.178)	お風呂 炊事
	舎廊棟 C1②*1	小父さんは小母さんをとうとう舎廊棟に引っ張っていった。舎廊棟ではしばらく言い争いの声がやまなかった。《中略》翌朝、大家の小母さんは《中略》一日中舎廊棟に引き籠ったきりであった。(pp.149～150)	個室(大家夫婦使用)
下の棟 C2	部屋 R	部屋ごとに(簡易釜屋で)慌しく朝食を作って(部屋で)食べてから《後略》(p.24) (借家世帯全体) チュノの母さんは《中略》子供を生んだ。《中略》チュノの母さんの低い呻き声がときおり聞こえた。(p.41) チュノの父さんは相変わらず、毎日朝ご飯をすますと、《後略》(p.74) チュノと二人で夕食をすませ、お膳をもって片抹楼に出てきたチュノの母さんがいった。(p.98) (チュノ家族) チョンテさんは午前中いっぱい部屋に閉じこもって何の本か、本ばかり読んでいた。(p.) (平壤宅家族) 家族四人が昼ご飯を食べてからだった。母さんがぼくを呼んでミシンの前に座らせると《後略》(p.28) キルジュン(話者キルナミの弟)は床に腹這いになり、ちびた鉛筆をなめなめ宿題をしていた。(p.46) 姉さんとキルジュンはお膳に顔を突き合わせて勉強し、母さんは仕事がないので早目に床を敷いて横になった。(pp.51-52) 母さんは休まずにミシンを回した。上のぼくら三人は母さんが仕事の手をとめるときまで、勉強しなければならなかった。(p.67) 姉さんがお膳を持って部屋に入ってくると、《中略》ぼくら兄弟は素早くお膳のまわりに車座になり、自分のご飯を食べた。(p.98) 朝早く渡さなければならぬチョゴリの付け紐をつけていた母さんがいった。(p.107) ぼくは部屋で母さんが昨日買って来たキムジャン用のニンニクの皮を剥いていた。(p.117) 母さんは《中略》仮縫いをしていた。(p.119) (うちの家族)	食事 出産 食事 読書 食事 勉強(宿題) 仕事(ミシン・針仕事) 家事(調理準備作業)
	片抹楼 L	片抹楼に出て煙草をプカプカふかしていた京畿宅が二つの部屋ごとに、うちのほうを見て声をあげた。(p.52) 片抹楼の端で(食後の)後片づけをしていた京畿宅がチュノの母さんの言葉を受けた。(p.98) ぼくは京畿宅のこの片抹楼に彼女と並んで座り、《中略》(上の棟の大庁で開かれている)パーティーを、遠くからじっと見物していた。《中略》下の棟から見上げる(上の棟の)大庁のガラス戸の内側は、《後略》(pp.176～177) (京畿宅家族) スナ姉さんは《中略》片抹楼に座って古い軍服を繕っていた。(p.86) チョンテさんが片抹楼に座り、温かい初冬の日差しを浴びながら新聞を読んでいた。(p.111) 日差しの温かい片抹楼に座って、英会話の本を読んでいたミソニ姉さんと、編物をしていたスナ姉さんが交わした話《中略》二人はそれぞれ自分の仕事をしながら、一時間以上もベチャクチャ喋った。(pp.147～149) (平壤宅家族) ぼくが下の棟に入っていくと、母さんは片抹楼の前に座り、雨の降る空をぼんやり眺めていた。(p.46) ぼくと末の弟は片抹楼に出て座り、間に埋もれていく雨脚を眺めていた。(p.52) ぼくは片抹楼に腹這いになって、朝の日差しを浴びながら、姉さんの使った中学一年の英語の本で単語書きの勉強《後略》(p.85) ぼくもまた片抹楼に座って、姉さんの使う地図帳を広げながら《後略》(p.111) 大家の小母さんは《中略》母さんを片抹楼に呼び出した。「ソンレのお母さん、《後略》」(p.142) 片抹楼に腰かけた母さんが、頭あてに使った手拭で涙を拭いた。《中略》丸裸になったチャンチンがぼつと一本だけ立っている暗い外庭を眺めながら、独り言をつづけた。(p.198) (うちの家族)	喫煙 家事(後片付け) 上の棟を見物 家事(繕い物) 日向ぼっこ 読書・勉強 会話 休息 観賞(雨の日の風景) 日向ぼっこ 勉強
	簡易 釜屋*2 K	他の間借人たちもだれかれの別なく、薪の束を買い片抹楼の下の簡易釜屋の焚き口に火を熾してご飯を炊いた。(p.85) (借家世帯全体) スナ姉さんが簡易釜屋の前にしゃがみ込んで、七輪のフライパンに豚肉を炒めながら、《後略》(p.97) (平壤宅家族) 簡易釜屋の前で朝食を作っていたミソニ姉さんがガムを噛みながら、《後略》(p.108) (京畿宅家族)	家事(炊事)

※ 表内の斜字は小説で抜粋した関連記述を示す。()、《 》および下線は筆者による。英字は図 2-1 に対応する。筆者の判断により、母屋は「内棟」、台所は「釜屋」、縁側は「片抹楼」、上の棟の板の間は「大庁」に再翻訳した。
網掛はマダン(庭)との関係が見られる部分を示す。関連記述は全て小説の第1章から抜粋した(pp.16-18)

*1 “大庁を間にして、部屋が四つの内棟と一間の舎廊棟に分かれていた。”(p.18)と記述されているが、それぞれの部屋の位置や使用者については把握できなかった。

*2 簡易釜屋の様子について“建物の裏が煙突を出す広さしかなかったので、釜屋が別になく、部屋ごとに片抹楼の前の片方に板で一坪になるかならないかの仮の建物を、ぼくの背丈ほどの高さにニュッと建て、ルーフィングで蔽って釜屋として利用した。”と記述されている。

われ方が見られる (表 2-5 「下の棟 C2 の部屋 R」欄を参照)。

片抹楼 (L") (チョッマル; 縁側と類似な板張空間の一種、以下、「片抹楼」と記す。) の使われ方も様々である。「勉強・家事 (繕い物や食後の後片づけなど)、休息、会話、日向ぼっこ、喫煙、風景観賞」などで使われる。片抹楼 (L") は、狭い部屋の中では充足できない生活の要求に対応した空間として活用されていることが分かる。さらに、「日向ぼっこ、喫煙、風景観賞」などは、チェとマダンが物理的な関係性を持った上で日常の生活に対応していることが良く表れる使われ方である。片抹楼 (L") は、腰かけて休息したり、内庭 (M1) に満ちた光や風、草花の風景から季節を感じたりする中で、物理的な空間関係のみならず生活面においてもチェとマダンを関係づける空間としての役割を果たしていることが分かる。さらに、4 つの部屋が連続している下の棟 (C2) では、片抹楼 (L") は腰かけていると自然に家族以外の人と出迎え、会話できる空間となっている (表 2-5 「下の棟 C2 の片抹楼 L"」欄を参照)。

2.4.2 マダンの使われ方

時間軸に沿ったマダンの使われ方を表 2-6 に示す。対象住宅ではマダンが内庭 (M1) と外庭 (M2) とで 2 つある。小説には、話者であるキルナミ家族が生活する下の棟 (C2) に面した内庭 (M1) を中心に生活の様子が描かれている。時期的には 1954 年の春から、その翌年の春に迎えるまでの 1 年間の生活が描かれている。

狭小な一つの部屋で一家族全員が生活していた下の棟 (C2) の居住者らの生活において、内庭 (M1) は片抹楼 (L") と繋がる空間関係の中で「家事 (キムジャン用の唐辛子を干すこと等)、作業 (薪割)、物置、環境調整」など、「使うためのマダン」として積極的に使われる。また、内庭 (M1) は、「見るためのマダン」でもある (3.3(2)、表 5 の内庭 (M1) 関連記述欄を参照)。表 2-5 の関連記述を見ると、春に満開した花を観賞したり、梅雨の季節になると雨が降っている風景を眺めたりしながら季節感を感じることがよく分かる。内庭 (M1) では、伝統韓屋で見られる「使うためのマダン」と「見るためのマダン」の使われ方が両方とも存在し、四季を通じて日々の生活を多面的にサポートしていることが分かる。

一方、伝統韓屋では内庭は主に使うためのマダン、舎廊庭と後庭は主に見るためのマダンとして使われることが一般的であるのに対し、対象住宅では使うためのマダンと見るためのマダンを全て内庭に取り入れている。使うためのマダンと見るためのマダンが内庭に一緒に作られるのは、典型的な都市韓屋でも見られない様子である。典型的な都市韓屋では、一つのチェと一つのマダンのみ残され、マダンは使うマダンとして使われることが一般的である。対象住宅の内庭 (M1) では伝統韓屋と都市韓屋におけるマダンの使われ方が混ざっていることが分かる。さらに、富裕層の大家世帯が住む上の棟 (C1) と貧困層の借家世帯が住む下の棟 (C2) が内庭の庭園の木や草花によって遮られており^{注 8)}、対象住宅の内庭は階層間の心理的・物理的距離が確保される緩衝空間としての新たな役割も果たしていることが分かる。

注 8) 関連記述は、表 2-4 の「中門 (G2)・内庭 (M1)」欄を参照

表 2-6 時間軸に見るマダンの使われ方

時間軸	関連記述	
春	内庭 (M1) の花園にサツキが花を満開に咲かせた (1954 年) 五月初旬のある日であった。 (p.28)	春の庭を観賞
夏	ぼくと末の弟は片抹楼 (L) に出て座り、闇に埋もれていく雨脚を眺めていた。《中略》屋根を叩く雨音、内庭) に突き刺さる雨脚。《中略》この世全体が雨に閉じ込められているかのように感じられた。 (p.52) ランプの火に照らされた内庭はまことに見物であった。部屋の前の片抹楼がゆらゆらするほどに内庭は水の海をなしており、内庭の真ん中にポコッと盛り上がった花壇は島となって浮かんでいた。 (p.54) チュノの父さんは、《中略》土をすくって中門 (G2) の敷居を高くするように《中略》中門 (G2) の引き戸をはずすように指示《中略》外庭 (M2) の塀の下の土をシャベルですくって敷居を高くする《中略》カマスをその上にかぶせて踏み固めた。 (p.58) 下の棟 (C2) の人たちは《中略》(雨水が溢れる内庭から) 水をくむ《中略》中門 (G2) の敷居から水を外庭 (M2) に捨てる《中略》水を捨てたバケツを後ろに渡す《中略》中門 (G2) から大門 (G1) までかい出した水がよくはけるように、おぼつかないシャベルさばきで水路を掘った。 (p.59) かい出しはすぐに始まった。雨にすっかり濡れながら、みな一生懸命作業をした。 (p.60) 雨が去り、しばらくの間うだるような暑さが氣勢をあげた。庭の深い家の下棟 (C2) がぐっとへこんでいるので、風が屋根の上ばかり渡っていくのか、《中略》片抹楼 (L) に座ると胸に汗が溝をなして流れた。 (p.63)	雨の風景観賞 梅雨の時期の季節感 梅雨で水浸しになった内庭のメンテナンス作業 真夏に入る頃の季節感
秋	北風が吹きつり、部屋の床につけているお尻がひんやりするころから《中略》ぼくは片抹楼 (L) に腹這いになって、朝の日差しを浴びながら、姉さんの使った中学一年の英語の本で単語書きの勉強をしていた。大家のおばあさんは内庭 (M1) の蓆に干していたキムジャン用の唐辛子^{*1}を、柄振でひっくり返していたところであった。スナ姉さんは…縁側 (チョッマル) に座って古い軍服を繕っていた。 (p.85) 昼がますます短くなり、《中略》ある若者が (内庭に) 丸太を積み上げていた。母さんと姉さんが内庭 (M1) に下ろしておいた薪を若者に渡ししながら、《後略》 (p.95)	日向ぼっこ キムジャン^{*1}の準備 物置
冬	十一月下旬のある日、奇襲的に寒波が襲いかかり、内庭 (M1) の池にも氷が張った。 (p.101) 彼らが内庭 (M1) に丸太を下ろすと、それを積む人間がまた二人もいた。 (p.102) リヤカー引きと荷運び人夫は丸太を内庭 (M1) に全部運び終わると、《中略》初雪の降った日であった。《中略》内庭 (M1) の土すら覆えずにやんだ。夜が明けると、風がそうした雪の粉を内庭 (M1) の隅に吹き寄せた。 (p.106) チョンテさんが片抹楼 (L) に座り、温かい初冬の日差しを浴びながら新聞を読んでいた。 (p.111) 日差しの温かい片抹楼 (L) に座って、英会話の本を読んでいたミソニ姉さんと、編物をしていたスナ姉さん《後略》 (p.147) 新年 (1955 年) の初日《中略》ぼくは腹を据えて (内庭にて) 薪割りに熱中した。 (p.195) 片抹楼 (L) に腰かけ《中略》丸裸になったチャンチンがぼつんと一本だけ立っている暗い外庭 (M2) を眺めながら、《後略》 (p.198)	冬の季節感 物置 越冬準備作業 雪の風景観賞 日向ぼっこ 薪割 庭の風景観賞
春	(1955 年の) 三月に入って「庭の深い家」の内庭 (M1) の花壇にチョウセンレンギョウが花を咲かせたごろであった。	春の庭を観賞

※ 表内の斜字は小説で抜粋した関連記述を示す。()、《 》および下線は筆者による。英字は図 2-1 に対応する。筆者の判断により、母屋は「内棟」、台所は「釜屋」、縁側は「片抹楼」、上の棟の板の間は「大庁」に再翻訳した。網掛はチェとの関係が見られる部分を示す。関連記述は全て小説の第 1 章から抜粋した (pp.16-18)

*1 キムジャン：越冬用のキムチを漬けること。(参考：韓国文化財庁 HP <http://jpn.cha.go.kr/japanese/html/sub4/sub16.jsp>)

2.5 小結

本章では、韓国の現代文学作品『庭の深い家』を対象とし、韓屋における「チェとマダンがつながった住空間」、それに対応してきた「住み方」の特徴について、以下の点が明らかになった。

(1) チェとマダンからなる住空間について

①持続：対象住宅では、伝統韓屋のように複数のチェと複数のマダンによって家全体が形成されており、チェとマダンがつながった空間の相互関係が持続されていることが明らかになった。

②変化：道路から住宅の最も奥の方に至るアクセス方法は、伝統韓屋より経路が簡略化されていた。伝統韓屋では一つのチェに必ず一つのマダンが対応しているのに対して、対象住宅では内庭 (M1) が複数のチェ (上の棟と下の棟) に対応していることが明らかになった。

(2) チェとマダンとの関係に対応した住み方について

①チェの使われ方から：チェとマダンがつながった伝統韓屋の住空間は持続的に見られるものの、それに対応した住生活においては、身分や性別による伝統韓屋での秩序は持続されていないことが明らかになった。対象住宅では、物理的な形は伝統韓屋に似ているが、その空間に対応した住み方はむしろ都市韓屋のように家族同士の空間として使われている。

②マダンの使われ方から：対象住宅では伝統韓屋における見るためのマダンと使うためのマダンが両方存在しており、住まい手の日々の生活を多面的にサポートしていることが明らかになった。一方、伝統韓屋では見るためのマダンである舎廊庭と使うためのマダンである内庭が分けられていたのに対し、対象住宅では、内庭に二つの機能が共存している。さらに、伝統韓屋や都市韓屋では見られないマダンの新たな役割も見られた。富裕層の大家世帯と貧困層の借家世帯が同居する対象住宅において、内庭は、階層間の物理的距離が確保される緩衝空間としての役割も果たしていることが明らかになった。

以上のように、対象住宅では、チェとマダンとの物理的関係は時代を超えて持続される一方、戦後の住宅難や貧富の格差という社会状況の下、時代特有の住み方の特徴が良く表れていると言える。

第2章参考文献

- ・金源一：庭の深い家，文学と知性社，1988
김원일：마당깊은 집，문학과 지성사，1988
- ・金源一（著），李銀沢（翻訳）：庭の深い家，韓国の現代文学 2 長編小説 2，柏書房，pp.9-231，1992
- ・MBC 放送局：ドラマ「庭の深い家」第1話（DVD），MBC C&I，1990.1.8
MBC 방송국：드라마「마당깊은 집」제1화（DVD），MBC C&I，1990.1.8
- ・MBC 放送局：ドラマ「庭の深い家」第2話（DVD），MBC C&I，1990.1.9
MBC 방송국：드라마「마당깊은 집」제2화（DVD），MBC C&I，1990.1.9
- ・MBC 放送局：ドラマ「庭の深い家」第3話（DVD），MBC C&I，1990.1.15
MBC 방송국：드라마「마당깊은 집」제3화（DVD），MBC C&I，1990.1.15
- ・MBC 放送局：ドラマ「庭の深い家」第4話（DVD），MBC C&I，1990.1.16
MBC 방송국：드라마「마당깊은 집」제4화（DVD），MBC C&I，1990.1.16
- ・Kim, H., Takada, M.: A Study on the relationship of Chae and Madang in literary work-Focused on Korea contemporary literature novel 『House with a Sunken Courtyard』 -, Proceeding of 2015 APNHR Conference, The Korean Housing Association, Vol.24, No.2, pp.185-190
- ・若山滋ら：『万葉集』における建築空間，日本建築学会計画系論文報告集，第388号，pp.116-123，1988.6
- ・裴竣皓，若山滋：現代文学作品に見る朝鮮戦争後の都市と建築，日本建築学会計画系論文集，第626号，pp.905-911，2008.4
- ・裴竣皓，若山滋：朴泰遠と李箱の作品における1930年代の「京城」と建築空間 - 韓国文学に見る都市と建築の近代化 -，日本建築学会計画系論文集，第643号，pp.2139-2147，2009.9
- ・金秉瑱，西垣安比古：朝鮮の住宅「雲鳥楼」における懸板・家系継承・祭祀からみた住まいの場所の究明，日本建築学会計画系論文集，Vol.77，No.675，pp.1223-1229，2012.5

第 3 章

近代都市化に伴う住要求に対応した韓屋における住み方

3.1 はじめに

3.1.1 本章の目的

前章では、伝統韓屋から都市韓屋への移行期の韓屋を取り上げ、チェとマダンがつながった空間構成は時代を超えて朝鮮戦争直後という特殊な社会状況の下でも継承されていることを明らかにした^{注1)}。また、マダンは単に物理的に残されているだけではなく、四季を通じて様々な使われ方がされており、住まい手の生活を多面的にサポートしていることも明らかになった。本章では引き続きチェとマダンとの関係に着目し、増改築が繰り返され、現在もすみ続けられている都市韓屋の事例を取り上げ、住まい手の住要求への対応を探る^{注2)}。それらを踏まえ本章では、建物の「物理的な状態」と「使われ方」という観点から動線の接続状態の変化について分析し、対象事例におけるチェとマダンとの関係からみた住み方について明らかにすることを目的とする。

3.1.2 研究の対象と方法

都市韓屋は、1930～1960年代にかけて大都市を中心に建てられた都市型の住宅で、伝統韓屋では使われない近代的建築材料が積極的に導入されている。居住者階層は中産層の都市住民で、都心部の狭い敷地を有効に活用して都市住民の住要求を受容する韓屋群として建設された。母屋の形はL字やコ字のような土地節約型の曲家が多い^{注3)}。中部地方のL字型都市韓屋の典型的な間取り^{注4)}を図3-1(右)に示す。この住宅では、内房(アンバン;夫婦寝室、以下、内房)を中心に大庁と釜屋(プオク;土間の台所)がL字に結合している。大庁を間にし、内房の反対側には子女部屋として使われる越房(コンノンバン;以下、越房)が配置される。住宅の規模によって房(バン;部屋)や退抹楼(トェツマル;縁側、以下、縁側)が追加されることもある^{注5)}。本章では、増改築の実態やそれに対応した住み方を把握し、各事例におけるチェとマダンとの関係を明らかにするために、上述した特徴が保持されている事例のみを調査対象としている。

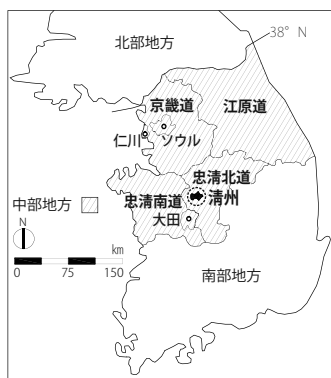
注1) 金海梨, 高田光雄: 韓屋におけるチェとマダンのつながりに対応した住生活の特徴に関する一考察 - 韓国現代文学作品『庭の深い家』を対象として -, 日本建築学会計画系論文集, No.718, pp.2763-2770, 2015.12

注2) 都市韓屋は、文化財として原型保存の価値が最優先される伝統韓屋とは異なって現在の住まい手の住要求に応じて自由に改変することができる。そのため、現存する都市韓屋における空間の物理的状況や使われ方は建設当時の意図通りに残されているとは言えない。より厳密に都市韓屋における空間の相互関係やそれに対応した住み方を検討するためには、現時点での空間の物理的状況や使われ方に着目する必要がある(金海梨, 高田光雄, 金泰永: 都市韓屋の増改築事例における出入関係からみたチェとマダンのつながり方, 日本建築学会計画系論文集, No.727, 2016.9)。

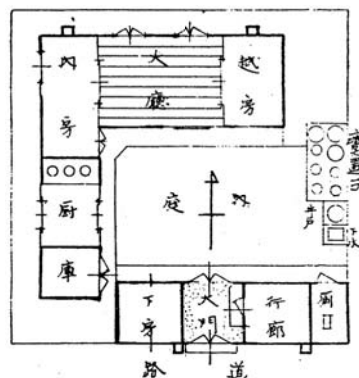
注3) Yoon Jinah: Spatial composition of the Urban Hanok in Seoul in the Great Han Empire Period, ソウル大学修士学位論文, 2007

注4) 同じL字型でも、内房を基準に曲がる家や、釜屋を基準に曲がる家がある。主にソウル・京畿・忠清などに分布する中部地方のL字型韓屋は、内房を基準に曲がる間取りとなっている。

注5) この住宅型においても、伝統韓屋と同じくチェとマダンが一体となった住空間構成の特徴は引き継がれている。



課題二の対象地域の位置
(筆者作成)



京城地方の在来型間取り図
(出典：朴吉龍, 朝鮮と建築, vol.20, no.4, 1941)

図 3-1 調査対象地域 (左) と中部地方の L 字型韓屋の間取り (右)

表 3-1 対象事例の基本属性

事例 番号	建物概要					居住者属性		インタビュー対象
	建築年	敷地面積	延床面積	建物構成	入居年	居住者の構成 (年齢)	人数	
01	1935	207.3 m ²	75.3 m ²	主+別	1970	I CO:M(77)・F(70代)+II CO:長 M(40代)・F(40代)+III F(17)・M(15)	6	I CO の M
02	1936	199.9 m ²	73.0 m ²	主+別	1970 年代初	I CO:M(77)・F(72)+II CO:長 M(46)・F(42)+III F(13)・F(11)・M(9)+III F(22)*	8	I CO
03	1959	149.7 m ²	48.2 m ²	主+別	1977	I M(76)+II M(28)	2	I M
04	1935	211.9 m ²	58.5 m ²	主+別+別	1978	I CO:M(78)・F(77)	2	I CO の F
05	1952	246.5 m ²	65.0 m ²	主+別+別	1981	I CO:M(56)・F(54)+II 次 M(27)	3	I CO の F

※表内の「建物概要」は、建築物臺帳の記録及び現場確認に基づく。延床面積には別棟の面積は含まない。「居住者属性」は、インタビュー調査に基づく。
 主：チェ(母屋) 別：別棟(離れ) I II III：世代 陰影：世帯主 長：長男 次：次男 CO：夫婦 M：男性 F：女性 (数字)：韓国歳
 *：02 事例では、世帯主夫婦と長男家族、そして長女の娘(III F(22))が同居している。

3.2 対象住宅の現在に至るまでの経緯

3.2.1 住まい手の属性

対象事例の建物概要と居住者属性を表 3-1 に示す。5 軒とも 1935 年から 1959 年の間に建てられ、築 50 年以上経過している。チェの面積は、48.2㎡から 75.3㎡までで、全ての事例に一つ又は二つの別棟がある。事例 01・02 では 3 世代、事例 03・05 では 2 世代が同居しており、事例 04 では世帯主夫婦が住んでいる。居住年数は 5 軒とも 30 年以上である。

3.2.2 改修内容と改修後の住空間の現状

増改築の現状を図 3-2 に、現状に至る経緯を表 3-2 に示す。また、主な増改築の項目とその理由を表 3-3 に示す。

(1) 建物後面の増築

個室規模を拡張するための増築

事例 01(内房、孫娘房、大庁)・02(内房、孫娘房、孫房、息子夫婦房)・03(内房、釜屋)で行われた。韓屋の基本モジュールは 2.4 ～ 2.7m であるが、床座中心から椅子座中心の生活への移行に伴い、個室の面積を占める家具の数が増えたり家具のサイズが大きくなったりし、空間が足りなくなった。それに対応して建物後面から敷地境界線の間にある屋外空間を使って増築が行われている。

01 事例では、孫たちが小学校に入学する前後に、成長する孫と孫娘の個室を設けるために間仕切壁を新設し、狭い空間を拡張するために孫娘房の後面と孫房の側面を増築した(表 3-2 の事例 01 増築①、③)。1970 年代初に 4 人家族で入居した 02 事例では、個室を拡張するための増築が 2 回に渡って行われた。入居当時から家の一部を借家として使うことを想定していたので家族構成員のための個室が足りず、内房に間仕切壁を新設した。その上で、空間を拡張するために内房、孫娘房の後面を増築したものである。1980 年代後半に息子さんの結婚と同時に現在の孫房と息子夫婦房の後面を増築した(表 3-2 の事例 02 増築①、③)。03 事例では、入居時に内房と釜屋を拡張するために後面を増築している(表 3-2 の事例 03 増築④)。

付属空間を新設するための増築

該当する全ての事例においてボイラー室又は現代の住設備が備わった水回りが新設されており、付属空間の新設は燃料の発達による新しい炊事及び暖房設備の導入と影響していると考えられる。

事例 01 では、大庁の後面を増築し、本棚を入れて家族共用の書庫を新設している。また、息子夫婦房の後面を増築して多用途室を新設し、ボイラーを置くとともに専用の冷蔵庫と洗濯機を設置し、息子夫婦のプライバシーを重視している(表 3-2 の事例 01 増築②、④)。事例 02 では、孫房と孫娘房の後面及び旧借家(現物置)の後面を増築し付属空間を新設している。現在はボイラー室であるが、借家世帯が住んだ時期は単独炊事が可能な簡易釜屋でもあった(表 3-2 の事例 02 増築②)。事例 03 では、内房の後面を増築して倉庫を、息子寝室の後面を増築して洗面及び洗濯室を新設している。また、息子寝室の後面には外部からアクセス可能な和式便所を新設した(現在は倉庫に改築されている)(表 3-2 の事

表 3-2 現在に至るまでの経緯（増改築の内容と住まい手の属性の変化を中心に）

事例番号

1930-1950年代

1960-1970年代

1980年代

1990年代

2000年代

増築

改築

撤去

増築

改築

撤去

新築

その他

①後面：内房、孫娘房拡張

②後面：大庁の後に書庫、金屋後に簡易金屋新設

③側面：孫房拡張

①間仕切壁新設：孫房と孫娘房の間

②間取りの変更：屋内トイレ新設*a

③建具の変更：息子夫婦の出入口を窓へ*c

①大庁後面の縁側（増築②関連）

②孫娘房と孫房の間の引き戸（改築①関連）

④後面：息子夫婦専用の多用途室新設

④建具の変更：マダンの面に全ての開口部

③大門、大門の横の池と庭園

別棟建替え：汲み取り式から水洗式へ。浴室と倉庫機能新設

大門、車専用出入口、花壇新設

マダンの仕上げ材をタイルに変更

1935竣工

1970入居

1980年代初

1989長男結婚

1990世帯主隠退、孫たち出生

2000

2005

*a 以前は、屋外の汲み取り式便所を使っていたが、洋式便器を取り入れた屋内トイレを新設した。息子夫婦が屋内を通らなくても水洗式のトイレを使用するように縁側からの出入口とマダンからの出入口を両方作った。現在は、屋内の出入口の前に冷蔵庫をおいており、マダンからの出入口のみ利用可能となっている。

*b LPG ガスで炊事をする方式に変更した。1997年からは炊事と暖房両方ともガスを導入している。大庁は板張り空間ではなく床暖房をつける空間となっている。

*c 息子夫婦のプライバシーや既成家具のサイズを配慮し、出入口（木製の引き戸）を撤去し窓（アルミサッシ）へと変更した。出入口の位置は隣の方に変更した。

*d 都市計画により、道路に面した敷地の境界線が変更された。そのため、大門とその近くにあった池と庭園を撤去せざるを得なかった。

増築

改築

撤去

新築・新設

その他

増築

改築

撤去

新築・新設

その他

①後面：孫娘房と内房、倉庫拡張

②後面：倉庫と内房、簡易金屋新設

①間仕切壁新設：内房と孫娘房、孫房と息子夫婦の間

②間取りの変更：金屋位置を大庁の後ろに変更、元の金屋は借家へ

③外気に面する建具を木製からアルミサッシへ（息子夫婦房、現物置は二重窓）

内房と孫娘房の引き戸（改築①関連）

①別棟建替え：洋式トイレ、花壇新設

マダンの仕上げ材をタイルに変更

③後面：孫房と息子夫婦房拡張（増築②でできた倉庫割愛）

②屋内トイレと洗面室新設（改築②でできた金屋割愛）

④内房、孫娘房の建具を木製からアルミサッシへ。居室後面の出入口を窓に変更（新築・新設②関連）

1936竣工

1970年代初入居 世帯主夫婦、娘、息子の4人家族

借家世帯入居*a

1970年代後半 一時転居*b

1985再入居 娘の結婚及び分家

1980年代後半 息子結婚

1994以降孫たち出生 孫2人（1994、1996）、孫（1998）出生*c

1995

1997世帯主隠退

*a 世帯主は、家を買う段階で家の一部を借家として使うことを考え、「改築②」を行って金屋を部屋へと改装し、「増築②」を行って借家専用の簡易金屋を新設した。

*b 小学校の先生だった世帯主が1970年代後半に校長になり、任期中は官舎に住んだ。1985年の再入居前まで家全体を借家として貸していた。

*c 息子の結婚以降、2人の孫娘と末子の孫が生まれ3世代が集まった7人家族で生活してきた。その後、結婚と同時に分家した娘の子どもが対象事例と同じ地域の大学に入学し、同居することになった。2005年から現在の家族構成になっている。

*d LPG ガスで炊事を、石油ボイラーで暖房をする方式に変更した。この時期から大庁は板張り空間ではなく床暖房をつける空間となっている。

増築

改築

撤去

改築

その他

新築

改築

その他

改築

①後面：倉庫新設

②後面：洗面室新設

③後面：和式便所新設*a

④後面：内房と金屋拡張

⑤前面：大庁と息子寝室拡張

①内房と金屋の間に間仕切り戸設置

②内房の戸壁撤去

③外気に面する建具を変更*c

①内房と金屋の間に間仕切り戸設置

②内房の戸壁撤去

③外気に面する建具を変更*c

屋根のセメント瓦を更新、マダンの仕上げ材をセメントに変更

①別棟建替え：洋式トイレ

④息子寝室の側面を収納空間として内部化

③外壁にレンガを付着

⑤内房と大庁建具を木製からPVCサッシへ。息子寝室及び息子房は、PVCサッシを付け加え二重窓に変更

1959竣工

1977入居 入居当時の家族構成は不明

*a 洗面室から出入可能な便所だったが、後日改造され、現在は倉庫となっている。

*b 炊事と暖房を兼ねていた土間の釜屋を内部化したガスキッチンに改造する過程でタラクを撤去し、内房から釜屋への出入口を作った。LPG ガスで炊事を、石油ボイラーで暖房をする方式に変更した。この時期から大庁は板張り空間ではなく床暖房をつける空間となっている。

*c 外気に面する建具を木製サッシからアルミサッシに変更している。その他、屋内空間の建具は木製の引き戸や開き戸をそのまま使っている。

改築

新築

その他

改築

その他

撤去

改築

その他

①越房の側面の縁側を収納空間として内部化

別棟建替え：汲み取り式から水洗式へ。浴室機能新設

垣の仕上げ材を桂のきはだからセメントへ

②焚口を使っていた在来の釜屋からガスキッチンへ

③建具の変更：外気に面する開口部改築*d

④屋根のセメント瓦を更新

①内房側の押入れの建具

②内房の建具

④内房の間仕切壁撤去

①別棟(旧借家)の玄関、ガラスの引き戸からアルミサッシの開き戸へ

マダンのタイルのサイズを小さいものに変更

1935竣工

1978入居*a 世帯主夫婦、義母、長男、長女、次男、次女、末息子の7人家族

借家世帯入居*b

1980長男除隊 世帯主家族と同居

1997義母の死亡 工事を行う時点で4人の子供はすでに分家している状態

*a 入居当時、長男は二十歳で軍隊に入っていた。そのため、除隊してから同居した。

*b 借家は途中で入れ替わりがあり、大体1990年代まで住んでいた。入れ替わりの回数や個々の借家世帯の入居期間については確認が取れていない。

*c LPG ガスで炊事を、石油ボイラーで暖房をする方式に変更した。この時期から大庁は板張り空間ではなく床暖房をつける空間となっている。

*d 外気に面する建具及び内房と大庁の間の建具を障子の開き戸からガラスの木製サッシの引き戸に変更し、内房後面及び越房前面の出入口は窓に変更している。

撤去

改築

新築・新設

増築

その他

①大門、大門の横にあった井戸、屋外トイレを撤去*a

②タラク撤去（改築①関連）

①焚口を使っていた在来の釜屋からガスキッチンへ

②内房の間仕切戸撤去

③間仕切壁新設：越房の間仕切壁取付、書斎と屋内トイレに再編

④外気に面する建具を二重窓に変更

①洗濯室と倉庫を新築

②次男房新築（最初は長男房だった。）

③屋内トイレ新設（改築③関連）

後面：倉庫新設

屋根：マダンの面する軒先にひさしと雨どい取付

1952竣工

1981入居 世帯主夫婦、長男、次男の4人家族

1997

1999長男分家

*a 都市計画により、道路に面した敷地の境界線が変更された。そのため、大門とその近くにあった別棟や井戸を撤去せざるを得なかった。

*b LPG ガスで炊事を、石油ボイラーで暖房をする方式に変更した。この時期から大庁は板張り空間ではなく床暖房をつける空間となっている。

*c 長男は1998年から ROTC 将校として入隊し、除隊後は就職先の近くに引っ越した。

増築の方向

建物に関連する経緯

住まい手に関連する経緯

他の住まい手が住んだ期間

現在の住まい手が住んでいる期間

借家世帯と同居していた期間

燃料の変更と金屋の改造

（凡例）

（※ 間仕切りの変更に係る工事の場合、間仕切壁の新設・撤去両方とも「改築」欄に表記する。）

例03増築②、③)。05事例では、1997年に新しい炊事及び暖房設備を導入すると同時に住宅全体的に増改築を行い、トイレと大庁及び内房の後面を増築してボイラーやその他のものを収納するための倉庫を新設している(表2-事例05-増築)。るキルナミ家族が生活する下の棟(C2)に面した内庭(M1)を中心に生活の様子が描かれている。時期的には1954年の春から、その翌年の春に迎えるまでの1年間の生活が描かれている。

(2) 間仕切り及び室位置の変更に係る改築

家族構成員の減少に伴う個室の統合

事例03では、入居当時の1977年、空間を広く使うために内房にあった間仕切壁を撤去している(表3-2の事例03改築②)。事例04では、1978年入居当時から内房を2つの個室に区切っていた間仕切壁をそのまま維持し、釜屋に接している方は世帯主夫婦が、押入がある方は二人の息子が使っていた。子供の分家後も2つの個室に分かれている内房の状態はそのままだったが、義母の死亡後、内房の間仕切壁を撤去した。また、内房をさらに広く使うために小部屋の建具を撤去し、日常的に使う寝具や家具を置いている(表3-2の事例04改築③、撤去①)。事例05では、1997年、都市計画による敷地境界線の変更により、建物や井戸を撤去せざるを得なかった。それをきっかけで、必要に応じて住宅全体的に増改築を行うことにし、内房の間仕切壁を撤去している(表3-2の事例05改築②)。

家族構成員の増加に伴う個室の分割

01事例では、成長する孫娘と孫のプライバシーを配慮し、建具で区切っていた孫娘房と孫房の間に間仕切壁を取り付けている(表3-2の事例01改築①、撤去②)。02事例でも同じ改築が行われている。3世代8人が同居している事例02では、既存の内房にあった建具を撤去し間仕切壁を取り付け、孫娘房を確保している。また、入居時には一室となっていた居室の右側の部屋に間仕切壁を取り付け、孫房と息子夫婦房を確保している(表3-2の事例02改築①、撤去)。以上から、対象事例では家族構成員の増減に対応し個室を分割又は統合する改築が行われていることが分かる。

その他

釜屋の位置を変更するための改築が行われた場合もある。事例02では、入居当時、借家を入れるために釜屋を居間の方に移っている(表3-2の事例02改築②、表3-3の改築欄の間取りの変更)。一方、事例01・03・04・05では、釜屋の位置が入居当時から現在まで維持されており(図3-2)、L字型韓屋の間取り(図3-1の右)における釜屋の位置と同じである。対象事例は築50年以上経過している古い住宅ではあるものの、内房を中心に釜屋と大庁が接続している間取りは現代の生活にも対応できていると考えられる。

(3) 建具の変更及び縁側の内部化に係る改築

屋内空間の断熱性・気密性を高めるための建具の変更

事例01～05全てにおいて、断熱性と気密性の改善を図るために外気に面する建具が木製枠からアルミサッシ、またはPVCサッシへと変更されている(図3-2、表3-2、表3-3)。さらに、事例01(息子夫

表 3-3 対象事例における増築・改築・新築内容と理由

工事種類		理由				
		01	02	03	04	05
増築	建物後面の増築	A,B	A,B,C	A,B,C		A,B
	建物前面、側面の増築	A		A		
改築	間仕切りの変更 (□ □)	D□	E□	D□	D□	D□,K□
	間取りの変更		F,G			
	建具の変更	H	H	H	H	H
	退抹楼(縁側)の内部化	I	A,I	I	I	
	釜屋の立式化	J,K	J,K	J,K	J,K	J,K
	大庁の床の仕上げ変更	H,J	H,J	H,J	H,J	H,J
新築 又は 新設	収蔵空間 倉庫	I	I	I		I
	水回り 浴室、洗面室	C,K	C,G,K	C,G,K	C,K	C,K
	空間 屋外水道		C	C	C	C
	便所 屋内便所	K☒	K☒			K☒
	(☒ ☒) 屋外便所	K☒	K☒	K☒	K☒	
	別棟新築	B,C				B,C,E
	大門新設	L,M				L,M
撤去	汲み取り式便所				K	
	釜屋の焚口	J	J	J	J	J
	井戸	L,K				L,K
	大門	L				L
その他	マダンの仕上げ材変更	N☒	N☒	N☒	N☒	N☒
	マダンに花壇設置	O	O,P	O,P	P	O,P

※「□」は既存の間仕切壁の撤去を、「□」は間仕切壁の新設を示す。

「☒」は和式便器を、「☒」は洋式便器を示す。

「☒」は土からタイルへの変更を、「☒」は土からセメントへの変更を示す。

<増築、改築、新築の理由>

A：個室の拡張 B：倉庫、多用途室の拡充 C：水回り空間の拡充
D：個室の統合 E：個室の数を拡充-家族用 F：個室の数を拡充-借家用
G：動線の効率化 H：断熱性、気密性の向上 I：収納、収蔵空間の確保
J：暖房設備の変化 K：水道設備、ガス設備の導入及び衛生設備の改善
L：都市計画道路の整備に伴う敷地境界線の変化 M：自動車の出入
N：維持管理の利便性 O：趣味生活や観賞 P：野菜作り(家庭菜園)

婦房、表 3-2 の事例 01 改築④)・02(旧借家と息子夫婦房)・03(息子房、表 3-2 の事例 03 改築③、⑤)では、マダンに面する窓を二重窓に変更しており、事例 05 では、外気に面する全ての窓が二重窓となっている(表 3-2 の事例 03 改築④)。出入口の建具を撤去し、窓に変更している事例もある。事例 01 では、息子夫婦のプライバシーやサイズの大きい既成家具の使用を配慮し、マダンとの出入口をアルミサッシの窓に変更している(表 3-2 の事例 01 改築③)。事例 02 では、内房及び孫娘房、孫房後面の出入口及び孫房前面の出入口を撤去し、窓に変更している。同じようなことが息子夫婦房の前面にも行われている(表 3-2 の事例 02 改築③)。息子夫婦房では倉庫を新設するために、後面の出入口を撤去し、壁に変更している。また、居室後面を増築して釜屋とトイレを新設するために出入口を撤去し、窓に変更している(表 3-2 の事例 02 新築・新設②、改築④)。事例 04 では、内房後面及び越房前面の出入口を窓に変更している(表 3-2 の事例 04 改築③)。

上述した改築時期は燃料や暖房設備が変わった時期と重なっており、建具の変更は、燃料の発達に伴う冷暖房設備の改善と影響していることが分かる。また、夏の暑さより冬の寒さに対応することを重視する改修が行われてきたことが分かる。このような傾向は、次に述べる縁側の内部化とも関連していると考えられる。

収蔵空間を確保するための縁側の内部化

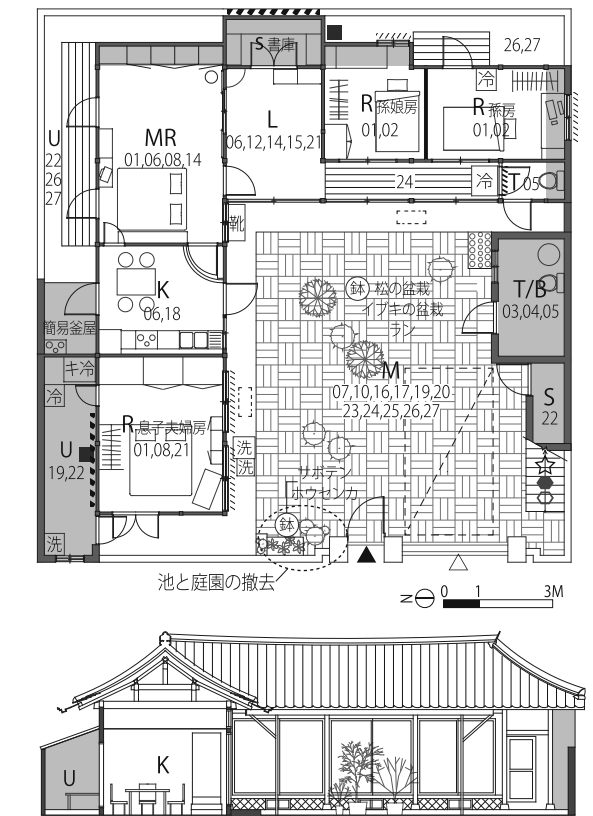
マダンと接しており出入も可能だった縁側が内部化されている。その過程で、入居当時にあったマダンと縁側との出入が閉鎖的に変わっている。事例 03(息子寝室の側面、表 3-2 の事例 03 改築④)では、出入口を窓に、事例 04(越房の側面、表 3-2 の事例 04 改築①)では、出入口を取り壊して開口部が全くない壁に改築されている。その結果、内部空間で必要な機能の充足は可能となったものの、半屋外空間としての縁側の特徴は失われている。

(4) 住設備空間の改善のための改築および新築

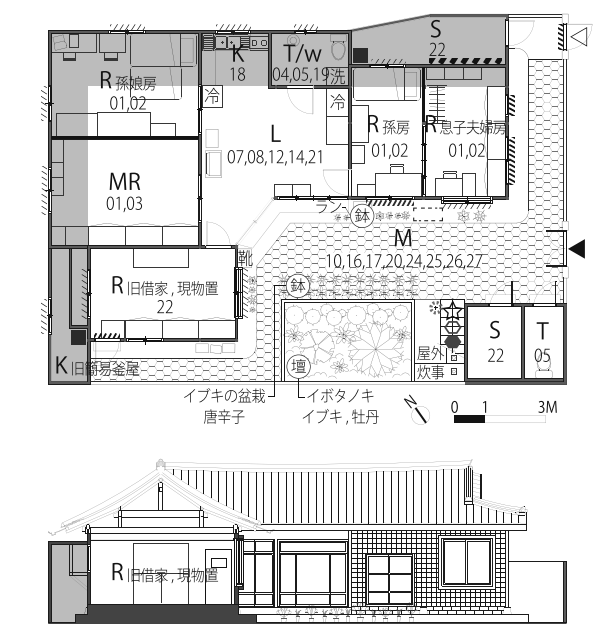
事例 01～05 全てにおいて、暖房設備と炊事設備が改善されている。燃料の発達により、釜屋の焚口で炊事と暖房を兼ねていた在来方式からの切り替えが行われた。在来の釜屋は、炊事と暖房を兼ねる焚口を使っていたため床のレベルが内部の部屋より低く、マダンと同じレベルの土間であった。改築の時期は事例ごとに異なるが、5 軒とも炊事と暖房を分離し、現代の設備を導入している(表 3-2)。釜屋の改築に関連した物理的変化として、事例 03・05 では、内房から出入可能で釜屋の上部にあったタラク(屋根裏部屋)が撤去されている。一方、事例 01・04 では、タラクが保持できる階高を確保しつつ現代のキッチン設備が導入されている(図 3-2)。

便所及び浴室などの衛生設備空間を拡充するための改築や新築・建て替えも行われた。都市韓屋建設当時の便所は汲み取り式で、別棟として屋外の一角に建てられることが一般的だった(注 15)。しかし、対象事例では、衛生設備を改善するために別棟を建て替え、水洗式トイレが備えられている。事例 01～03 では、入居当時にあった汲み取り式便所を撤去し、洋式便器を使うトイレに、事例 04 では入居当時あった汲み取り式便所を撤去し、和式便器を使うトイレに建て替えている。事例 05 では、水洗式の屋外トイレが撤去された直後に家全体の増改築を行い、屋内にトイレを新設している。また、事例 01・04 では建て替えた水洗式トイレの横に浴室を、事例 05 では屋内トイレを新設する際に屋外に洗濯室と浴室を兼ねた水回り空間を新設している(図 3-2、表 3-3)。

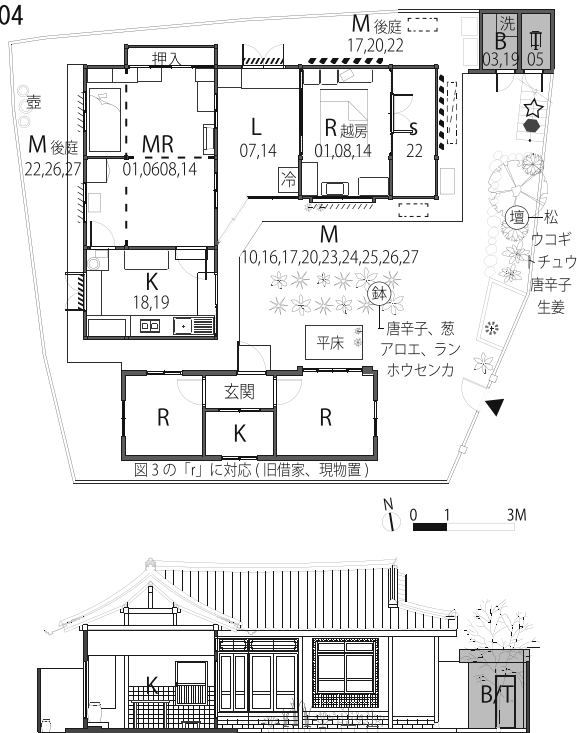
01



02



04



05

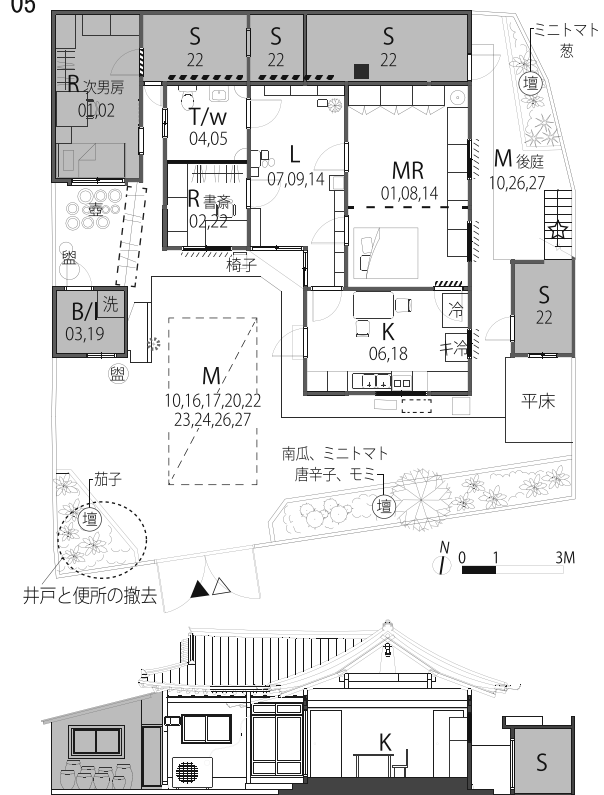
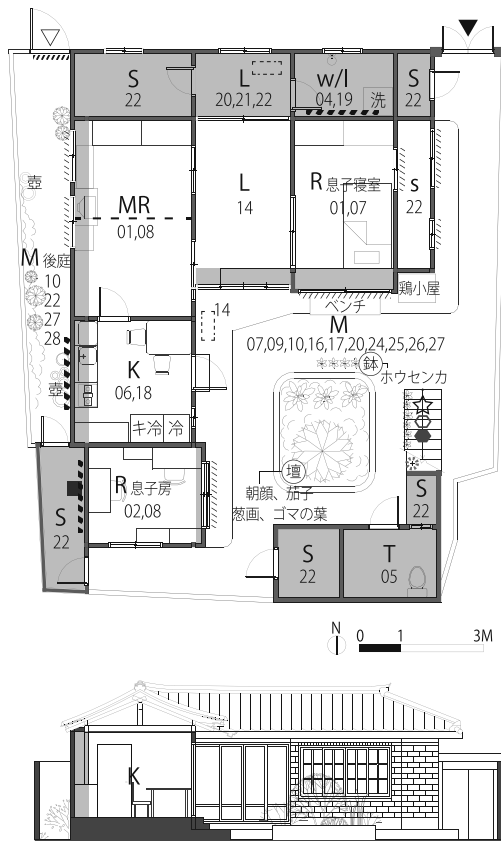


図3-2 増改築後の現状及びチェとマダンの使われ方：事例01，02，04，05
(凡例は図3-3と共通する)

03



凡例

- ▲ 屋敷の出入口
△ 車の出入口又は勝手口
■ 駐車又は駐輪
☆ 屋上に上がる階段
● 屋上は壺の置き場
○ 屋上は植木鉢の置き場
■ ボイラー
□ 物干
冷 冷蔵庫 キ冷 キムチ冷蔵庫 洗 洗濯機 靴箱
鉢 植木鉢 壇 花壇 平床 (主に夏に) 外で使う木製の針床
- 01 睡眠、休養
02 執筆、読書、勉強
03 入浴
04 洗面
05 排泄
06 食事
07 休憩
08 テレビ視聴
09 趣味 (飼育、音楽、日曜大工)
10 園芸、家庭菜園
11 遊び (子供)
12 団らん
13 スポーツ・ゲーム
14 応接
15 パーティ、儀式
16 隣人との会話、訪問者の対応
17 作業 (荷造、修理など)
18 調理、食器洗い
19 洗濯
20 物干 (洗濯物、穀物等)
21 アイロンがけ
22 収納、收藏
23 駐車又は駐輪
24 移動
25 観賞、景観形成
26 日照確保
27 通風確保
- MR 内房 K 釜屋 U 多用途室 S 倉庫
R 部屋 T お手洗 w 洗面室 s 収納空間
L 大庁 B 浴室 I 洗濯室 M マダン
L' 縁側 (※図内の英字は図3-4に対応する。)

図3-3 増改築後の現状及びチェとマダンの使われ方：事例03
(凡例は図3-2と共通する)



写真3-1 屋敷入口からみたマダン (事例01)



写真3-2 屋敷入口からみたマダン (事例02)



写真3-3 屋敷入口からみたマダン (事例03)



写真3-4 屋敷入口からみたマダン (事例04)



写真3-5 屋敷入口からみたマダン (事例05)



写真3-6 調査の様子 (事例05の台所にて)

3.3 住空間の使われ方に見る住み方の現状

3.3.1 チェの使われ方

(1) 季節に応じた住み方の変質

全ての事例において増改築後のチェの使われ方が閉鎖的なものになっている。断熱性や気密性を高めるために出入口を窓に、個室規模の拡張や収蔵空間確保のために既存の縁側や部屋にあった開口部を壁に変えている。そのため、入居当時よりチェの各室とマダンとの出入口が減少し、屋内外空間の物理的接続そのものが少なくなっている。さらに、夏期を快適に過ごすために板張り空間に仕上げられた大庁は、冬期の寒さに対応して他の個室と同じく床暖房をつける空間に改築されている。その結果、季節に応じて住まい手自らが建具の開閉によって住宅の温熱環境を調整する住み方がなくなってきた。オンドル部屋と板張り空間であるマルが併置され、夏期と冬期の両方に対応した住み方から、冬の寒さを防ぐことを重視した住み方へと変化してきたものである。

(2) 半屋外空間としての縁側機能の消失

チェとマダンをつなぐ半屋外空間であった縁側は、増改築によって内部化され、屋内空間の一部として使われている。事例 01・05 では、マダンに面して建物前面に縁側がついているが、主に通路として使われている。事例 03・04 では建物側面に縁側がついていたが、現在は個室に付属した収蔵空間となっている。対象事例では、縁側は夏期には少し暑く冬期には少し寒い、季節感が感じられる空間であったが、現在ではそのような緩衝空間の性質は失われている。

事例 03(図 3-3、息子寝室の側面)・04(図 3-2、越房の側面) では、縁側が個室に属した収納空間として使われている。事例 01(孫娘房と孫房の前面の縁側) では、マダンとの出入は変わりなくできるものの、縁側に座って雨の風景をみたり子供が遊んだりするなどの生活行為は行われておらず、通路となっている。これは、孫娘と孫が成長し中高生になっていること(表 3-1)とも影響していると考えられる。

以上のように、チェは、屋内空間の断熱性や気密性を重視し建具の変更が行われ、収納空間確保のために半屋外空間である縁側が内部化されており、全体として使われ方が閉鎖的に変化している。

3.3.2 マダンの使われ方

都市韓屋においてマダンは本来、ほとんどが空地の状態で保持され、家庭の行事や家事を始めとして住まい手の様々な生活行為が行われる多目的な屋外空間として使われた。また、そのような使われ方は、伝統韓屋におけるアンマダン(内庭) の特徴が時代を超えて引き継がれたものである。それに対して、対象事例におけるマダンの使われ方はどのように異なっているのかについて検討する。

(1) 住宅へのアクセス及び環境調整空間

マダンの使われ方を図 3-2 と図 3-3 に示す。マダンは、増改築が行われた後も入居当時と同様に道と屋敷、屋外と屋内をつなぐアクセス経路として使われている。また、全ての事例において、マダンは風

通しや採光が自然的に行える環境調整空間^{注6)}として機能している。特に、チェの増改築や別棟の建替え及び新築が行われつつも、敷地中央を空けておくことにより環境調整機能を持たせるようになっている。

(2) 家事及び作業空間

都市韓屋では、マダンの一角に醬壺台があり(図3-1の右)、マダンは釜屋の延長線上で家事を行う空間としても使われていた。醬壺台は、キムチや醤油、味噌やコチュジャンなどを長期間保存する壺の置き場として使われたものである。対象事例では、増改築を前後にして壺の使われ方に変化が見られる。事例01～04では建て替えた別棟の屋上が壺の置き場として使われている。事例05では、別棟の屋上はあるものの、釜屋から行き来しやすくするために壺を屋上に移さずそのまま地面に置いている(別棟の屋上は図3-4の「rt」に対応)。一方、別棟の屋上空間は、壺の置き場のみならず、穀物や洗濯物を自然乾燥させる場所としても随時使われている。

(3) 趣味生活及び休息空間

この使われ方は、主に家で常住する高齢の世帯主による。事例01では草花が好きな世帯主の趣味生活のために園芸が行われており、全て観賞用の草花や木である。マダンの中央には大きな松の盆栽が二つあり、大門の左側や屋外トイレの前面にはランや小さい草花の植木鉢がある。事例02～05では、固定した花壇に観賞用の木を植えている。さらに、事例01～04では、別棟の屋上にも観賞用の植木鉢を置いて園芸をしている(図3-2)。

観賞用の草花や木だけではなく、食用の野菜を栽培するための家庭菜園も作られている。事例02・03ではマダンの中央に、事例04・05では大門の近くの花壇に、食用野菜を植えて家庭菜園を作っている。事例02・04では、真ん中に食用野菜の植木鉢を置いて栽培している。その他に、事例03では、マダンの一角(息子寝室の前面)に鶏小屋を置き、ほとんどの時間を家で過ごしている世帯主が趣味生活として鶏を飼っている(図3-2、図3-3)。

(4) 駐車空間

事例01・05では、園芸や家庭菜園を作りつつもマダンの中央は空地の状態を維持し、駐車空間を確保している。4.3で述べたように、事例01ではマダンの中央に大きな盆栽の鉢があるが(図2)、有事の際にマダンを広く使えるように転がせる可動式に制作している。入居当時は子供の遊び場や家庭の行事、家事作業をサポートするために空地の状態を維持していたが、現在は駐車空間として利用するためにマダンの空地を確保している。

以上のように、マダンは、住まい手の住要求に対応し、日常生活をサポートする空間として使われてきている。一方、マダンの中央を空地に維持する目的は、車の使用や家族ライフサイクルの変化に伴い事例01・05では主に駐車空間として、事例02～04では主に園芸及び家庭菜園など、退職後の世帯主

注6) 環境調整空間とは、『木の文化を大切にすまち・京都』市民会議「平成の京町家」検討プロジェクトチーム検討報告書(京都市、2010)において、縁側や玄関土間のように、内部空間と外部空間を関係付け、建具の開け閉めなどによって関係が調整できる空間として定義され、その後の環境配慮型住宅計画で使われてきた概念である。

の趣味生活の場として使われており、使われ方が固定化していると考えられる。伝統的な韓屋におけるマダンとは、特定の用途を定めておいた空間ではなかった。農作業や家事などを行う空間であるとともに家庭の儀礼を行う空間、住まい手の休息や隣人との交わりの空間など、様々な用途で使われていた。都市韓屋になると、農作業や儀礼などは行われないが、家族同士の共用空間や家事空間などとして使われ、生活行為の中身は変わっても多目的空間として空いて置くマダンの特徴は持続していた。一方、対象事例では、マダンの多目的性が弱化し、観賞用の庭づくりや家庭菜園、または駐車などといった特定用途をもった空間として変化しつつあると考えられる。

3.4 チェとマダンとの関係

ここでは、第4章までの内容を踏まえ、チェとマダンにおける出入関係を、増改築による入居時と現在の物理的な状態と、実際の使われ方との対応関係にもとづいて検討する。図3-4では、入居時と現在の空間組織を把握することにより、物理的な出入口の変化を明らかにした。さらに、物理的には出入可能であるが、実際には使われていない出入口を把握し、チェとマダンの出入口の物理的な状態と実際の使われ方の対応関係を示した。

3.4.1 出入口の消滅及び縁側の内部化による関係の希薄化

全体としてチェの各室からマダンへの出入口が減っている。事例01では内房(図3-4の「MR」、以下、MR)、事例02では部屋(図3-4の「R」、以下、R、図3-2の息子夫婦房に対応)、事例03では内房(MR)と部屋(R、図3-3の息子寝室に対応)、事例04では内房(MR)と部屋(R、図3-2の越房に対応)からマダン(M)への出入口がなくなっている。大庁(図3-4の「L」、以下、L)は、チェの各室とマダンをつなぐ動線の接点として機能している。このことは、3.3で述べたチェの使われ方の閉鎖化と関連がある物理的な変化だと考えられる。

釜屋(図3-4の「K」、以下、K)とマダンの物理的な出入関係は入居後から現在まで維持されており、さらに、実際に使われている。地面にあった壺の置き場を別棟の屋上(図3-4の「rt」)に移ったため動線が長くなったが、壺を使う生活習慣は維持されていることが分る(図3-4)(関連内容は3.3.2(2)にも述べている)。一方、5軒の事例の中で唯一釜屋の位置を変更した事例02においても、壺を使うことによって釜屋(K)とマダン(M)の出入関係が存在する。

3.4.2 チェの使われ方の閉鎖化による関係の希薄化

前項までの検討内容によると、チェとマダンの出入口が物理的に消滅している場合、二種類の変化の仕方がみられた。一つ目は、壁を取り付けて開口部が全くない空間に改築することである。例えば、入居時は半屋外空間として存在し、マダン(M)との物理的、生活的つながりを持っていた事例04の縁側(図3-4の「L」、以下、L)は、現在は壁に囲まれた収納空間となっており、マダン(M)との物理的つながりもなくなっている(図3-2)。二つ目は、出入口はなくなったものの、風通しや採光などの環境調整

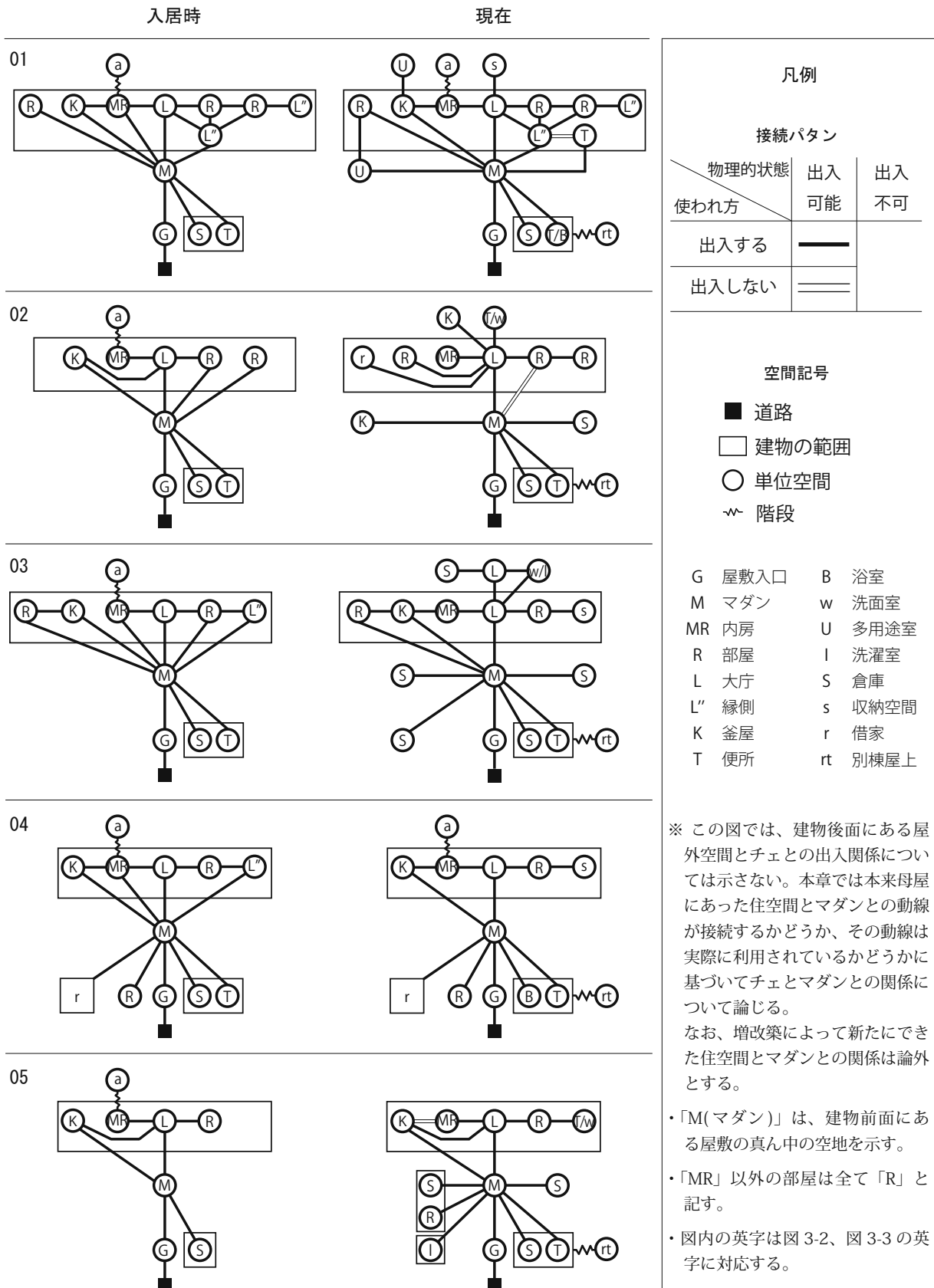


図 3-4 動線の接続状態に見るチェとマダンとの関係

機能は維持するために窓がある内部空間に改築することである。このような物理的状態の変化および生活における使われ方の変化は事例 02 ～ 05 の内房 (MR、図 3-2、図 3-3) 及び事例 01 の息子夫婦房で行われており、大きい出入口をなくして窓を付け、環境調整機能を維持している (図 3-2)。

物理的な出入関係は存在するが、実際には使われていない現状からもチェの使われ方の閉鎖化が指摘できる。事例 01 の息子夫婦房の場合、元々出入口があった部分に窓を 2 か所作ったものの、家具のサイズが大きく種類も増えてきたため、実質的に採光や通風機能が果たせる窓は 1 か所のみである。事例 02 では、大庁 (L) の横の部屋 (図 3-4 の「R」、図 3-2 の孫房) とマダンとの出入口があり物理的にはつながっているものの、空間を個室化し出入口の方に机をおいて生活しており、実際には出入することができない。

以上から、対象事例では、入居当時よりチェの各室とマダンとの出入口が減少し、屋内外空間の物理的接続そのものが少なくなっていることが分かる。また、物理的な出入関係は存在するが、実際には使われていない現状から、チェの各室とマダンとの物理的、生活的つながりが豊かな住み方よりは、限られた敷地の中で内部空間を最大限確保することを優先していると言える。それにより、チェの使われ方が閉鎖化していることが分かる。

3.5 小結

(1) 増改築による物理的状態の変化

対象事例では、空間の不足を補うために建物後面の増築が行われていること、半屋外空間である縁側が収納空間として内部化されていることが明らかになった。その結果、チェとマダンにおける物理的つながりが希薄化していることが分かった。このような現状から、事例全体としてチェの各室をより閉鎖化する増改築が行われてきことが指摘できる。

また、水道の普及、燃料の発達に伴う衛生設備の改善、炊事と暖房設備の改善のために水回り空間が増改築されていることが明らかになった。このことから、住設備に対する住まい手のニーズや、それらに起因した物理的変化が大きいことが分かった。さらに、断熱性と気密性を重視し建具が木製枠からアルミサッシへと変更されていることが分かった。

以上から、韓屋を現代に合致した住まいとして発展させていくためには、温熱環境を改善する必要があること、収納空間の確保が必要であること、また、屋内空間の快適性のみを重視した改修は韓屋の外観意匠を損なわれるおそれがあることが指摘できる。

(2) チェとマダンの使われ方の変化

チェは事例全体として使われ方が閉鎖的になっていることが分かった。屋内空間の断熱性や気密性を重視し建具の変更が行われ、収納空間確保のために半屋外空間である縁側が内部化された。その結果、季節による建具の開閉により住まい手自らが屋内外空間のつながりを調整する住み方は失われつつあると考えられる。

マダンは、事例それぞれの住まい手の住要求に対応し、日常生活をサポートする空間として使われ続けている。一方、マダンの中央が空地に維持されている事例の場合、その目的は、車の使用や家族ライフサイクルの変化に伴い事例ごとに異なっており、目的に応じて使われ方が固定化していることが分かった。対象事例のマダンでは、自然採光や風通しなどの機能以外の、屋外の生活空間として今後ありうる家族のライフステージや住要求の変化などに柔軟な対応が困難になる可能性があると考えられる。

(3) 動線の接続状態からみたチェとマダンとの関係

全体としてチェの各室からマダンへの出入口が減っており、大庁は、チェの各室とマダンをつなぐ動線の接点となっている。一方、釜屋とマダンの物理的つながりは入居後から現在まで維持されており、壺の利用実態から釜屋とマダンには使われ方の点でもつながりが存在することが分かった。

チェとマダンの出入り口が物理的に消滅する場合、その変化の仕方は二種類あった。一つは、壁を設置して開口が全くない空間とすること、また一つは、出入り口は塞ぐが、風通しや採光等の環境調整機能を維持するための窓はある空間とすることである。チェとマダンの物理的な出入関係は存在するが、実際の使われ方の点では出入がなく、出入口を閉鎖している現状も見られた。

以上のように、対象事例では、時代や社会の変化に伴い増改築が行われ、チェの物理的状態と実際の使われ方が閉鎖化している。また、マダンの使われ方における固定化が進んでいったと考えられる。

第3章参考文献

- P生：中部朝鮮地方住家に對する 一考察（上），朝鮮，128号，鮮總督府，1928.6
- P生：中部朝鮮地方住家に對する 一考察（下），朝鮮，130号，鮮總督府，1928.8
- 朴吉龍：朝鮮住宅雜感，朝鮮と建築，第20卷，第4号，朝鮮建築會，1941
- Song, I. : A Study on the Types of Urban Traditional Housing in Seoul from 1930 to 1960, ソウル大学博士学位論文, 1990
송인호 : 都市型韓屋의 類型研究, 서울대학교 박사학위논문, 1990
- Ha, J. : A Study on the Plan Types of Urban Traditional Housing, Journal of the Architectural Institute of Korea, vol.12, no.5, pp.75-83, 1996.5
- Yi, H., Kim, T. : A Study on the Traditional Characteristics of Architectural Elements in Korean Modern House of Urban Areas, Journal of the Architectural Institute of Korea, vol.11, no.4, pp.3-16, 1995.4
- Yoon, J. : Spatial composition of the Urban Hanok in Seoul in the Great Han Empire Period, ソウル大学修士学位論文, 2007
윤진아 : 대한제국기 한성부 도시한옥의 평면구성적 특성, 서울대학교 석사학위논문, 2007
- ハウジング・スタディ・グループ，三沢博昭：韓国現代住居学—マダンとオンドルの住様式，建築知識，1990
- Lee Youngho, Park Soobin : Study of the Meaning and Use of Madang through the Evaluation of the Detached House Residents in Busan, Journal of the Architectural Institute of Korea, vol.25, no.8, pp. 153-162, 2009.8
- Park, E. : Modern Division of the Style of Gardens Presented in Korean Traditional House Yard, Journal of Korean Institute of Traditional Landscape Architecture, vol.29, no.2, pp.28-38, 2011
- 藤井英二郎：日本と韓国における庭園を中心とした緑地の比較文化的研究、文部省科学研究費国際学術調査研究成果報告書，pp.56-68，1990
- 清州大学大学院建築工学科：清州市旧市街地における建築物統計資料，2007.8
청주대학교 대학원 건축공학과：청주 구도심 성안동・중앙동 건축물 통계자료，2007.8
- 金海梨，高田光雄：韓屋におけるチェとマダンのつながりに対応した住生活の特徴に関する一考察 -，韓国現代文学作品『庭の深い家』を対象として -，日本建築学会計画系論文集，第80卷，第718号，pp.2763-2770，2015.12

第4章

住まい手の多様な価値観に対応した韓屋における住み方 - 韓国人の事例 -

4.1 はじめに

4.1.1 本章の目的

第2章では、伝統韓屋から都市韓屋への移行期の韓屋を取り上げ、チェとマダンからなる韓屋の住空間は朝鮮戦争直後という特殊な社会状況の下でも継承され、住まい手の日常生活を多面的にサポートしていたことを明らかにした。特に、マダンは単に物理的に残されているだけではなく、四季を通じて様々な使われており、屋外の生活空間となっていたことを明らかにした。

第3章では、1970年代から1980年代に入居して住まい手の住要求の変化に対応した増改築が繰り返されている事例を対象とし、近代都市化に伴う韓屋の変容を検討した。対象事例では、チェとマダンからなる住空間形式は維持されているものの、開口部の物理的状态や使われ方の実態からチェとマダンとの関係が閉鎖化していることを指摘した。なお、この点は温熱環境の改善、収納空間の確保という住要求に起因することを明らかにした。

本章では引き続き韓屋におけるチェとマダンとの関係に着目し、2000年代以降に入居している近年の韓屋再生活用事例を取り上げ、住まい手の住要求への対応を探る。本稿は、韓屋の伝統的住空間の現代的価値を見出し、今後の韓屋のあり方に関する知見を得るのに寄与する資料となりうる。

本稿では、対象事例における改修の内容と住空間の使われ方の現状を明らかにする。さらに、前章から分析方法を深め、動線のみならず視線の接続も含めてチェとマダンとの関係を分析し、対象事例における住み方を解明することを目的とする。

4.1.2 研究の対象と方法

研究対象は建築家J氏の自邸と彼の作品K邸である。筆者らは2011年9月に国家韓屋センターを訪ねて実施した新韓屋政策調査をきっかけでJに出会えた^{注1)}^{注2)}。国家韓屋センター関係者から面会すべき韓屋建築の専門家として複数の建築家を紹介してもらい、韓屋設計の考え方について聞き取り調査を行った。その結果、J氏は単に韓屋の物理的改善や外見の踏襲ではなく伝統的な住空間が持つ現代住宅としての可能性に着案して様々な作業を実践していることが分かった。そこで、J氏とは筆者らの研究意図やこれまでの一連の成果について意見交換を継続するとともに、筆者らの研究目的に最もふさわしい調査対象としてJ氏の自邸とK邸を薦められた。このような過程を経て、2012年9月に住み方調査を実施することができた。

本稿では、対象事例における日頃の生活の様子や住まい手の主観的意味づけと住宅の物理的状态との対応を明らかにし住み方の実態を深く考察するために、質的研究方法^{注3)}を取り入れて少数精密調査を

注1) 筆者らは2011年9月に行った建築家J氏とのインタビューから韓屋専門家としてJ氏が韓屋をどのように評価しているのかについて伺った。その時、J氏は韓屋ではチェとマダンからなる住空間の形式やマダンの存在が重要であると考えていること、自ら韓屋を改修して住んでいることが分かった。国家韓屋センターについては、1.1.1を参照

注2) J氏による既存韓屋の改修設計、新築韓屋設計は2017年1月現在全29件で多い(<http://www.guga.co.kr/items/view/work/1052>)。J氏は韓国初の韓屋ホテルや韓屋図書館も設計している。J氏による韓屋設計事例は韓屋の現代化に寄与する先駆的なものと評価されている。

注3) 質的研究については1.3.2を参照

行っている^{注4)}。調査では、建築家と住まい手に対する半構造化インタビューを行った。また、J氏の協力で得られた紙媒体の改修前後の間取り図をもとに住宅の各空間の家具配置や使われ方を把握して現状図面を再作成した。それらを踏まえて動線と視線の接続パターンからチェとマダンとの関係を分析し、対象事例における住み方を検討した。

4.2 対象住宅の現在に至るまでの経緯

4.2.1 建物の概要と住まい手の属性

表 4-1 に対象事例の建物の概要と住まい手の概要を示す。以下、J邸とK邸の建物の概要と住まい手の属性について述べる。

(1)J邸における建物の概要と住まい手の属性

J邸は1958年に建てられており、敷地面積は50坪、建築面積は25坪程度である。2003年3月に物件を購入した直後から改修往時を行い、同年4月に入居した。家族構成員は6人で、血縁関係の家族同士で同居している。中学校や小学校に通っている3人の息子と幼児期の娘がいる子育て世帯である。直前の居住形態は区分所有の集合住宅である。

(2)K邸における建物の概要と住まい手の属性

K邸は1930年代に建てられたと推定されており、敷地面積は39坪、建築面積は24坪程度である。2006年の年明けに物件を購入し、2011年6月から6か月間改修工事を行い、同年12月に入居した。家族構成員はK氏夫婦と息子の3人であるが、常住している構成員はK氏夫婦のみである。息子は海外留学中であるため、学校が休みに入ったら帰国して一時的に同居している。そのような家族のライフステージに対応して住宅全体を有効に活用するために、血縁関係以外の人(有料宿泊客)と住宅の一部をシェアしている。J邸と同様、直前の居住形態は区分所有の集合住宅である。

4.2.2 入居のきっかけ

表 4-2 に J邸と K邸の入居のきっかけに対する住まい手の発言を示す。また、図 4-1J邸の現在に至るまでの経緯の「住まい手に関連する経緯(♀)」に、J邸における入居のきっかけに関連する一部の内容を示す。図 4-2K邸の現在に至るまでの経緯の「住まい手に関連する経緯(♀)」に、K邸における入居のきっかけに関連する一部の内容を示す。

注 4) 質的調査は事例を深く知ろうとすることから普遍的な意味を持つかどうかという点で限界が生じざるを得ない。しかし、住み方の実態は事例それぞれの個別生活の特殊性を尊重して丁寧に見ていく必要がある。また、そのような考え方をもとに事例調査を積み重ねていくことにより、共通の課題を見出すことはありうる。

(1) J邸における入居のきっかけ

表4-2に、J邸の入居のきっかけに対する住まい手の発言を示す。また、図4-1J邸の現在に至るまでの経緯の「住まい手に関連する経緯(イ)」に、J邸における入居のきっかけに関連する一部の内容を示す。J邸では、「現代の住まいとしての韓屋の可能性を再評価した」こと、「様々な用途で使えるマダンが韓屋の重要な要素だと考えている」こと、「四季を通して自然と共存でき、自由に飛び回って遊ぶことができるマダンがある生活環境で子供を育てたいと考えた」ことが入居のきっかけとして語られた。なお、

表4-1 研究対象の概要

	建物の概要									住まい手の属性		
	所在地	建築年	敷地面積	建築面積	構造	所有形態	購入時期	入居時期	工事区分	構成員（年齢・職業）	同居人数	同居形態
J邸*1	ソウル市西大門区	1958年	約59坪	約27坪	木造	持家	2003年3月	2003年4月	改修	夫(J氏)47・建築家) 妻(44・専業主婦) 長男(13・中学生) 次男(11・小学生) 三男(7・小学生) 娘(5・幼児)	6人	家族
K邸*2	ソウル市鐘路区	1930年代(推定)	約39坪	約24坪	木造	持家	2006年初	2011年12月	大修繕*3	妻(K氏)43・主婦兼 ゲストハウス運営) 夫(49・ゲストハウス 運営*4) 息子(18・高校生)	常住 2人*5 + 一時的 同居人	家族+ 有料宿泊客

※ 表の内容は2012年9月の調査による。網掛はインタビュー対象を示す。

*1 J邸は、新建築家協議会長賞を受賞している(2004、文化体育観光部主催)。

*2 K邸は、大韓民国韓屋公募展竣工部門で今年の韓屋賞を受賞している(2012、国土海洋部主催)。

*3 大規模修繕のことを指す。

*4 数年前に会社を辞め、K氏と共にゲストハウス運営をサポートしながら主な収入源となる不動産を管理している。

*5 K氏夫婦の息子は海外留学中のため、学校が休みに入ったら一時帰国して同居している。

それ以外の時期は有料の宿泊客が一時的に同居している。



写真4-1 道から見たJ邸の屋敷出入口の様子

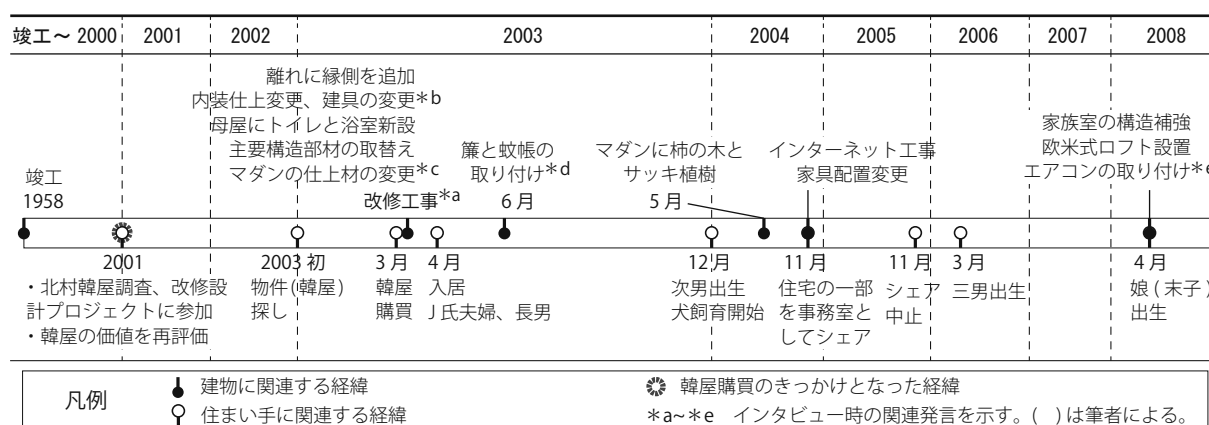


写真4-2 道から見たK邸の屋敷出入口の様子

表 4-2 入居のきっかけに関連する発言

J 邸	2001 年から都市韓屋の改修及び新築設計プロジェクトを多数行ってきた。その経験が積み重なって韓屋の現代住宅としての可能性を再評価することができた。構造的な安全性や冬の断熱性、水回りの住設備さえ改善したら、現代の生活にも十分に対応可能な住宅であることを自ら確認した。(中略)古い建物ではあるが、(マダンがあれば)都心部でも自然と共に住むことができる。(中略)いつでも家の一部として様々な用途で使えるマダンは韓屋においてすごく重要な要素だと考える。幼い時にマダンがある戸建て住宅に住んだが、マダンで遊んだ楽しい思い出が今も記憶に残っている。自分の子供たちは高層マンションに住んでいるため、家で自由に飛び回って遊ぶことができない。屋内でほとんどの時間を過ごしていることは子供たちにとってあまり良い環境ではないと思った。四季を通して自然と共に自由に遊ぶことができるマダンがある家で子供たちを育てたかった。
K 邸	家族全員が以前の居住地での生活に疲れていた。江南(以前の居住地)は、ソウルの中でも教育熱が高い地域である。経済的にも富裕層の人が多く、同じマンションの住民同士の要らない競争が激しかった。子供の教育から家族の身なりまで関心を受けることが嫌だった。子供も学校教育に適応することができず、ストレスがたまっていた。そのような環境から離れて静かなところに住みたいと強く希望し、戸建て住宅を探し始めたのが、韓屋に出会うきっかけとなった。最初に物件を探す時、必ず韓屋に住みたいと思ったわけではない。ソウル市内に所在していて静かな住宅地であることが第一条件だった。不動産屋さんに勧められたいくつかの物件の中に韓屋もあった。実物(現在の住まい)を見に行ったら、建物は老朽化しているけど周辺がとても静かで気に入って購入した。今はそれほど静かではないので残念だが。私達(K氏家族)が初めて訪ねた時(2006年)は北村の中でも丘の上にあってひとのあまり来ない場所だったのに、今(2010年代)は北村が観光スポットとなってしまう、一日中人の行き来が途絶えない。

※ 表の内容は 2012 年 9 月の調査による。斜字はインタビュー対象の言葉を示す。() 及び下線は筆者による。



- *a 生活のために必要な最低限の工事や掃除のみ済ませてすぐに入居した。その後、内装仕上げ等の小規模の工事を自ら行いつつ住みこなしている。
- *b 以前の住まい手が気密性・断熱性を高めるために使っていた既存の建具は意匠的に美しくないと思い、伝統建具の職人に依頼して格子文様デザインの建具を作製してもらった。外観においては、マダンに面する台所(図5のK)と離れの建具を変更している。内部の各室においてもガラスを入れた引き戸や木製の開き戸を、韓紙を使った伝統建具に全面的に変更している。寝台部屋(R2)とのマダン(M1)に面する開口部の上部の固定窓(住まい手は星見窓と呼んでいる)は購入当時のままである。
- *c 改修工事に係っていた大工と(住まい手J氏が)一緒に古材屋を訪ね、元々はオンドル石で使われていた板石を買って適当に割り、仕上げ材として再利用した。
- *d 夏になると昼間はマダンに面する建具を全て開けて生活する。マダンを通じて住宅内部に入ってくる強い光や周りの中高層ビルからの視線を防ぐために簾をかける。大体毎年6月になるとマダンに面する建具を全部開けて簾をかけ、寝台部屋の寝台の周りに蚊帳を取り付ける。9月末頃になると簾と蚊帳を取り外して建具や部屋の状態を元に戻す。
- *e 娘が生まれる前までは夏は必要に応じて扇風機を使ってきた。それだけでも不便を感じることなく過ごせた。2008年娘が生まれた後、室温を赤ちゃんに快適な状態に保つようにするためにエアコンを取り付けた。

図 4-1 J 邸の現在に至るまでの経緯

住まい手でありながら建築家でもあるJ氏が2001年から都市韓屋の改修及び新築設計の経験を蓄積してきたこと、マダンがある住宅での居住経験に良い記憶を持っていることなども韓屋の住空間に対する再評価や入居の決心につながったといえる。

(2)K邸における入居のきっかけ

表4-2に、K邸の入居のきっかけに対する住まい手の発言を示す。また、図4-2K邸の現在に至るまでの経緯の「住まい手に関連する経緯(↑)」に、K邸における入居のきっかけに関連する一部の内容を示す。K邸では、「家族全員が以前の居住地での生活に疲れていた」こと、「静かなところに住みたいと強く希望していた」ことが入居のきっかけとして語られた。K氏家族はソウルの中でも子供の教育に対する競争が激しい生活環境を切り替え、静かな居住地へ引っ越したいという条件で物件を探す過程で北村の韓屋に出会ったことが分かる。なお、北村に住むためには地域で定めた条例によって韓屋以外の新築や建て替えができなくなっていたのが、韓屋改修・入居の決心につながっていることが分かる。

4.2.3 改修内容と改修後の住空間の現状

(1)J邸における改修内容と改修後の住空間の現状

表4-3にJ邸の改修方針に関連する住まい手の発言を示す。なお、図4-1J邸の現在に至るまでの経緯の「建物に関連する経緯(↓)」に、改修方針に関連する一部の内容を示す。J邸では、「なるべく元の間取りを保持しつつ必要などところだけ部分的に改修すること」、「縁側を活かしてチェとマダンの動線を柔軟につなぐこと」、「伝統建具を活かして韓屋ならではの雰囲気演出すること」が改修方針として語られた。なお、それぞれの方針に対する理由として以下のような点がインタビューの内容から明らかになった。

第一の方針については、建築家であるJ氏の「スケルトンが丈夫だった」、「部屋の規模や間取りを変更しなくても十分に家族構成員のニーズに対応できると考えた」といった判断や、「改修費用を抑えたかったこと」が語られた。第二の方針については「マダンを子供の遊び場として積極的に使いたかった」と語られている。半屋内半屋外の性質を持った空間である縁側を介し、子供たちがチェの各空間とマダ

表4-3 J邸の改修方針に関連する発言

J邸	1958年に建てられたものの、スケルトンは丈夫だった。柱間はおよそ3mに近く階高も割と高く、以前使っていた高い箆箆やクロゼットなど、規模が大きい家具をそのまま使えるのも嬉しかった。<u>部屋の規模や間取りを変更しなくても十分に家族構成員のニーズに対応できると考えた。改修費用も抑えたかった。そのため、なるべく元の間取りを保持しつつ必要などところだけ部分的に改修することにした。</u>また、<u>マダンを子供の遊び場として積極的に使いたかった</u>ので、<u>縁側を活かしてマダンと屋内空間の動線を柔軟につなぐことを念頭にして改修設計を行った。</u>(中略)建具の場合、以前の住まい手が室内の断熱性能を重視して木製の格子デザインの建具をアルミサッシに大幅改装していた。そのために屋内外空間の外見が変質されていると思った。<u>伝統建具の意匠的要素を活かして韓屋ならではの雰囲気演出したかった</u>ので、知り合いの職人に木製の格子デザインの建具の作製を依頼した。
----	--

※ 表の内容は2012年9月の調査による。斜字はインタビュー対象の言葉を示す。()及び下線は筆者による。

表 4-4 K 邸の改修方針に関連する発言

K 邸	長期間空き家のまま放置されている状態だった。屋根の瓦が脱落していたり、柱が腐っているなど、あちこち破損していた。この地域（北村）に住みたいのなら韓屋に住まいといけなことを知ってから物件を購入したが（K 邸の所在地である北村は韓屋密集地で歴史美観地区に指定されているため、新築・建て替え・改修どちらも市の条例に定めている韓屋の定義に合わせないといけな）、すごく不安だった。韓屋に住んだ経験もなく、韓屋は防寒や防犯、耐震などに弱いと聞いていたから。そのため、<u>100 年経っても丈夫な家につくりなおすことを最優先した。費用を抑えたかった</u>ので、韓屋の建材として最も上品だと言われている国産アカマツを使うことは諦めた。（中略）<u>部材を装飾的に使うことは辞めた。ただ、韓屋について勉強したら、大庁（デジョン）板張りの広間。本稿では「居間」と記している）</u>は夏を快適に過ごせる韓屋ならではの空間だと考えたので、必ず再現したかった。
	（建築家 J 氏への介入） 家族と来客（有料の宿泊客）の領域、親と子の領域をどうすればうまく分けられるかについて工夫した末、現在の間取りに辿りついた。親と子のプライバシーを確保するために、共用室（図 5 の K（台所）・R1（家族室）・L1（居間））を間にし息子部屋と夫婦寝室（図 5 の R3 と R2）が離れている。家族と宿泊客の領域を分けるために、来客専用寝室（R4）は屋敷入口の近くに配置し、台所（K）を介して家族と宿泊客の動線を分離（中略）マダンが活用できるように<u>チェの各空間とマダンの動線がつながることを重視した。</u>

※ 表の内容は 2012 年 9 月の調査による。斜字はインタビュー対象の言葉を示す。（ ）及び下線は筆者による。

竣工～2005	2006	2007	2008～2010	2011	2012	2013
竣工 1930 年代（推定）			大修繕設計及び建築審議* ^d 1 月～5 月	工事着手 6 月	竣工 11 月 韓屋賞受賞* ^e 2012	マダンにスモモの木植樹* ^f 3 月
●	●	○	●	●	●	●
物件探し・韓屋購買* ^a 2006		2008 夫の退職* ^b	1 月 建築家 J 氏に大修繕設計依頼* ^c		12 月 入居 韓屋ステイ運営開始	
凡例 ● 建物に関連する経緯 ○ 住まい手に関連する経緯 *^a～*^f インタビュー時の関連発言を示す。（ ）は筆者による。						

- *^a 最初に物件を探す時、必ず韓屋に住みたいと思ったわけではない。ソウル市内に所在していて静かな住宅地であることが第一条件だった。不動産屋さんに勧められたいくつかの物件の中に韓屋もあった（関連発言は表 2 に示している）。この住宅地には韓屋以外の建物の建て替えはできなかった（関連発言は表 3 にも示している）。その代り、ソウル市の補助（韓屋保存及び振興に関する条例による支援・補助制度）があって、静かな環境も気に入ったので、韓屋に住むことにした。
- 健康上の問題で退社した（夫は大学で材料工学（学部）と行政学（修士）を専攻し、会社員として働いていた）。退社後は、以前からの住まいの伝賃（チョンセ）料、以前から所有していた小規模の多家口住宅の賃貸料、現在の住まい（K 邸）で運営する韓屋ステイの宿泊料等から得られる収益で生活費を補っている。
- *^c 2006 年に韓屋を購入してから、随時に建築雑誌や本などを見ながら韓屋について自分なりに勉強していた。韓屋関連プロジェクトを良く行っている建築家についての情報も集めていた。その結果、北村の韓屋改修設計に多く係っている建築事務所を 3 か所程度に絞ることができた。それぞれの事務所を訪問し、代表に会って話し合ってみたが、言い方が謙遜であって第一印象が良かったし、子どもが 4 人もいることを聞いたのが建築家 J 氏を選ぶのに大きく影響した。4 人の子供を育てているなら、きっと人柄のよい方だと思った。自ら韓屋を改修して住みこなしている点にもすごく信頼感を感じたので、J 氏に設計を依頼した。
- *^d 大修繕設計を本格化したのは 2011 年の年明けからだ、その前も J 氏の事務室を訪ね、1 年程度連絡や相談を継続しながら当時 J 氏の事務室で進んでいた他の物件の工事現場を見せてもらったりした。設計案が決まるまで、平面計画のみ 38 回程度変わった。その過程で韓屋や自分の住まいについての愛着を感じるようになった。住宅を買う時点ですでに息子の海外留学は決まっていた。息子が海外にいる間は（K 氏夫婦）二人だけで生活するので部屋が残るし、家全体を活用するため、一部の部屋を有料宿泊客とシェアすることにした。大修繕設計もそれを前提として行われた。
- *^e 大韓民国韓屋公募展の竣工部門で「今年の韓屋賞」を受賞した（表 4-1）。
- *^f 留学中一時帰国した息子が「スモモの木があってほしい」といったので、元々あったハナスオウを引っこ抜き、スモモの木を植えた。ハナスオウは 2013 年 3 月に家の近くにある J 氏の事務室に贈呈し、事務室の花壇に植え付けている。

図 4-2 K 邸の現在に至るまでの経緯

ンを行き来しやすくなることを願っていたと理解できる。第三の方針については「以前の住まい手によってアルミサッシに改裝されていた建具によって韓屋ならではの屋内外の外見が変質されていると思った」と語られた(表4-3)。また、J氏は伝統的住空間の再生活用において意匠要素の継承も重視しているといえる(図4-1「*b」)。

図4-1の「建物に関連する経緯(↓)」に改修の内容を示す。また、図4-3にJ邸の改修前の間取りを示す。なお、図4-4に改修後の現状を示す。以下、先述した改修方針をもとに実際どのような改修が行われているのかを明らかにする。図4-3の改修前の間取りと図4-4の改修後の現状に示したように、J邸では改修前後に「R1～R4、K、L」を基本とした間取りが保持されている。既存の建物の状態を活かす、といった改修方針に沿った改修が行われていると言える。図4-1の「建物に関連する経緯(↓)」にその他の改修内容を示す。「縁側の追加」、「建具の変更」、「内装仕上の変更」、「主要構造部材の取替え」、「母屋に水回り空間の新設」、「マダンの仕上げ材料の変更」などが行われていることが分かる。縁側の追加やマダンの仕上げ材料の変更は、縁側を介してチェとマダンの動線を柔軟につなぐ、といった改修方針に対応している。また、建具の変更は、伝統建具を活かして韓屋ならではの外見や空間の雰囲気演出する、といった改修方針に対応している。なお、住まい手が積極的に職人とコミュニケーションをとりながら改修に参画したことによって現状に至ることが分かる(図4-1「*a」「*b」、「*c」)。その他、入居後はマダンの植樹、部屋の構造補強を行うとともに欧米式のロフトを新設している(図4-1「*e」)。

(2)K邸における改修内容と改修後の住空間の現状

表4-4にK邸の改修方針に関連する住まい手の発言を示す。なお、図4-2K邸の現在に至るまでの経緯の「建物に関連する経緯(↓)」に、改修方針に関連する一部の内容を示す。K邸では、「100年がたっても丈夫な家につくりなおすこと」、「国産のアカマツを使うことや、意匠的に美しくするために部材を装飾的に使うことは辞めること」、「伝統的な大庁を必ず再現すること」が改修方針として語られた。なお、それぞれの方針に対する理由として、以下のような点がインタビューの内容から明らかになった。

第一の方針については「住宅が全体として老朽化していたこと」、さらに「韓屋に住んだ経験もなく、韓屋は防寒や防犯、耐震などに弱いと聞いていたため、不安を感じていたこと」が語られた。第二の方針については「改修費用を抑えたかったこと」が語られた。K邸では、工事費用を抑えるために建材の仕様に対する取捨選択が不可欠だったことが分かる。第3の方針については「勉強を通じて大庁は夏を快適に過ごせる韓屋ならではの空間であることが分かったから」と語られた。このことから、K邸では韓屋を単に住める状態に直すのではなく、伝統的住空間の良さを現代の生活の中に見出そうとしたことが分かる。

図4-5に改修前の間取りを、図4-6に改修後の現状を示す。老朽化がかなり進んでいたため、主要構造部を含めて既存の建物の大半を直す大規模修繕が行われている。この点は、100年経っても丈夫な家につくりなおす、といった改修方針への対応である。また、伝統韓屋の大庁を再現するために、L1は床暖房を付けない朝鮮張りの板の間となっている。なお、L1を再現するために以前の住まい手によって増築されていた部分が撤去され(図4-5)、改修後M3が新設されている(図4-6)。その結果、L1は、建具の開閉によって住まい手が室内環境を制御することができる空間になっていることが分かる。

以上から、K 邸では、単なる伝統的住空間の作り方の再現だけではなく、その空間の良さが享受できる生活の再現まで視野に入れた改修が行われているといえる。なお、表 4-4「建築家の介入」欄に示した改修方針への具体的な対応として、R3 及び M1 を介して血縁関係の家族の領域と家族以外の人（有料宿泊客）の領域を分離させており、K と R1 と L1 を介して親の領域 (R2) と子供の領域 (R3) を分離させている。K 邸では、住まい手と建築家が信頼関係をもとに持続的にコミュニケーションをとりながら改修が行われ、現在に至ることが分かる (図 4-2「* d」)。

4.3 住空間の使われ方に見る住み方の現状

4.3.1 チェの使われ方

図 4-4 に、J 邸における住空間の使われ方の現状を示す。また、図 4-6 に、K 邸における住空間の使われ方を示す。なお、J 邸と K 邸の調査当時の各空間の様子を写真 4-1 から写真 4-30 に示す。使われ方については、生活学や住居学分野の既往文献をもとに生活行為を番号で分類し、単位空間を示す英字の下に実地調査から確認できた住まい手の生活行為を記入している。以下、J 邸と K 邸におけるチェの使われ方について特徴的な点を中心に述べる。

(1) J 邸におけるチェの使われ方

部屋 (R1 ～ R4) と居間 (L) の使われ方

R1 と R2 は L とともに昼間は家族構成員の居室として使われたり子供の遊び場として使われたりするが (11、12)、夜になると R1 は夫 (J 氏)、長男、次男の寝室として、R2 は妻、三男、娘の寝室として使われている (01)。夏期は、家の開口部を全て開けたまま簾をかけて一日中過ごすため、ベッドの周りに蚊帳を設置して季節に対応している (図 4-1「* d」、図 4-4、写真 4-6)。「R3」は主に長男と次男が学校の宿題をしたり、親がそれを見守りながらパソコンを使ったりする空間として使われている (02)。離れにある「R4」は玩具部屋で、主に春から秋にかけてピアノ演奏などの趣味生活をしたり玩具で遊んだりする (09、11)。冬になると、寒いため離れに行くことはほとんどなく、R4 は主に物置として使われ



図 4-3 J 邸の改修前の間取り



図 4-4 J 邸の改修後の現状



写真 4-3 道からみた様子



写真 4-4 道からみた屋敷入口 G



写真 4-5 M1 からみた G の様子



写真 4-6 L からみた V と G



写真 4-7 R1 からみた L



写真 4-8 蚊帳を取り付けた R2



写真 4-9 L からみた R1



写真 4-10 R1 の a の伸縮はしご



写真 4-11 R1 の a の様子



写真 4-12 R3 の様子 (1)



写真 4-13 R3 の様子 (2)



写真 4-14 L からみた離れ (R4)



写真 4-15 K からみた M1



写真 4-16 R4 からみた M1



写真 4-17 夏の M1 (J 氏提供)

ている(22)。「L」は家族の団らんや子供の遊び以外にも来客への応接、長男の趣味生活(ミニドラマ)、雨の日の物干し、アイロンがけなど、様々な使われかたが見られる(09、11、12、14、20、21)。

以上から、J邸では、家全体が子供の居場所となっており、子供中心の生活が営まれているといえる。一方、今後子供の成長に伴ってR1～R4の使われ方にも変化が生じると推察される。

縁側(V)の使われ方

「V」はKの前面とR4の前面とで二か所ある(図4-4、写真4-6、写真4-14)。中でもR4の前面にあるVは、縁側を介してチェとマダンの動線を柔軟につなぐために増設され、現状に至る。具体的な使われ方をみると、チェからM1への移動経路(24)としての機能はもちろんのこと、腰かけて休息をとったり、マダンで飼っている犬と遊んだり、R3で勉強していた子供が腰かけて本を読みながら日向ぼっこをしたりするなど、様々な生活行為が行われている(02、07、09、16)。さらに、子供たちが靴を脱いだまま母屋と離れを飛び回りながら遊ぶ空間でもある(11)。

以上から、縁側は、単に物理的にチェとマダンの間に存在するものではなく、住まい手の様々な生活行為が行われる空間で、家族構成員の生活を多面的にサポートしていることが分かる。

(2)K 邸におけるチェの使われ方

部屋 (R1 ～ R4) の使われ方

「R1」は家族室で、家族構成員が音楽を聴く趣味生活をしたり、家族で団らんする空間として使われている (09、12)。冬になると、寝室機能を含めて夫婦の居場所として使われる (01)。K 邸の L1 は床暖房を備えていない板の間であるため、季節に応じて空間を使分けている。「R2」は本来は夫婦寝室であるが、知り合いや親族の来訪など、特別な場合に限って来客用寝室として使われている。「R4」は来客専用寝室として使われている。「R3」は息子部屋であるが、海外留学中の息子がいない時期は R4 と同様、来客用寝室として使われている。なお、床座式に慣れてない来客のためにベッドを用意している (図 4-6 「R3」)。

大庁 (L1) の使われ方

L1 は、伝統韓屋の大庁の作り方やその中での生活の良さを享受することを念頭にした K 氏夫婦が最もこだわった空間である。「L1」の使われ方における特徴は大きく二つあげられる。まず、季節に応じた建具の開閉によって住まい手自らが室内環境を制御する生活が実現されている。また、そのような季節感がある生活の良さを宿泊客にも体験してもらうために、L1 で朝食をとるようにしている (06)。冬は寒い状態での食事になるが、春から秋までは M1 と M3 に面した建具を開けて L1 での生活を一時的に体験することができる (写真 4-20、写真 4-22)。都市韓屋で L1 に座って後ろに広がる山の風景を眺めながら食事をとることは、極めて珍しい体験である。一般的に都市韓屋では、狭い敷地を有効に活用するために後庭は取らないことが多いためである。

以上から、K 邸では、伝統的住空間に対する理解を土台とした住まい手の意図、実践的経験を持った専門家の介入によって、伝統的住空間の価値が現代生活の中に見出されているといえる。

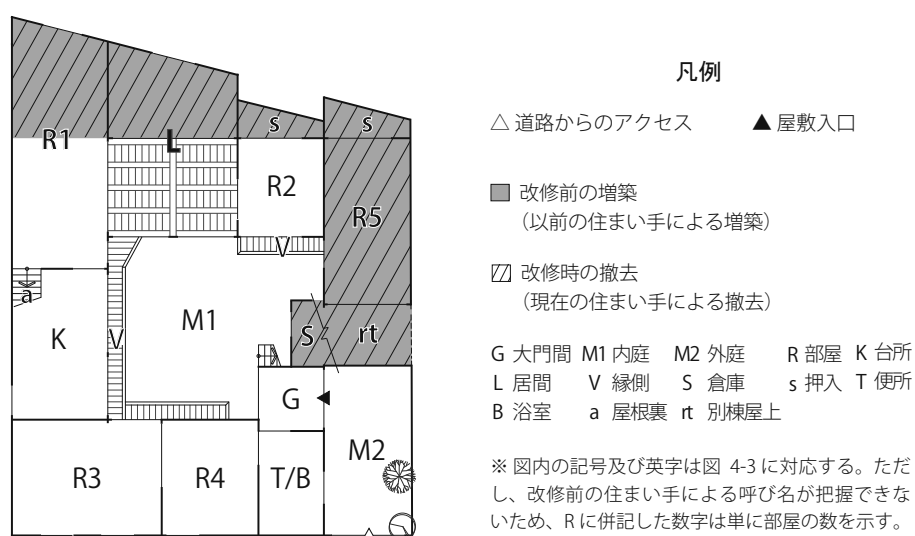


図 4-5 K 邸の改修前の間取り

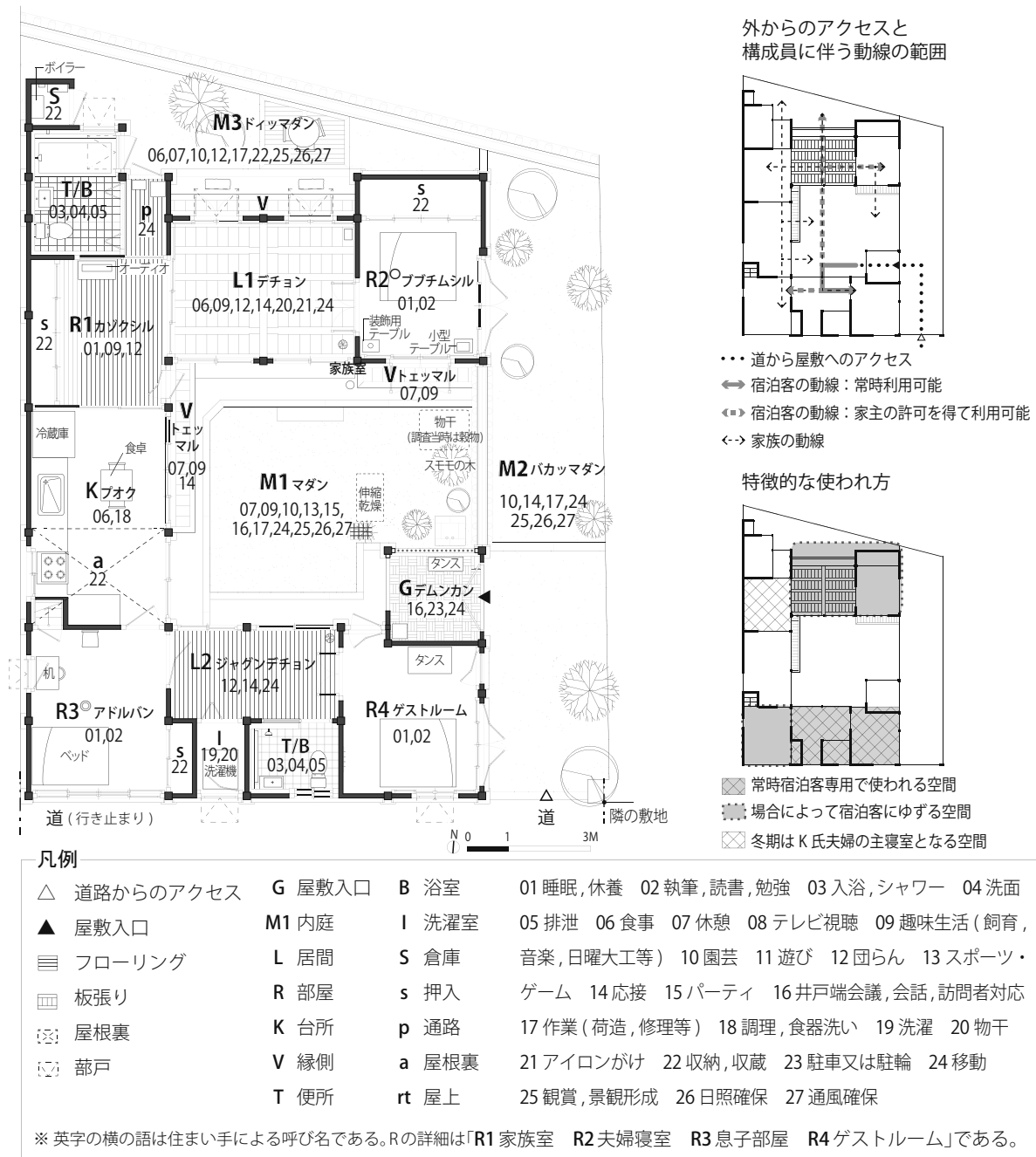


図 4-6 K 邸の改修後の現状



写真 4-18 道からみた M2



写真 4-19 M1 からみた G



写真 4-20 R1 からみた L



写真 4-21 L からみた R2



写真 4-22 L から M3 への開口部



写真 4-23 K からみた R1



写真 4-24 R1 からみた K



写真 4-25 L2 からみた R3



写真 4-26 R3 からみた L2



写真 4-27 L2 からみた R4



写真 4-28 L2 からみた M1



写真 4-29 K からみた M1



写真 4-30 L からみた M1



写真 4-31 M3 のから見える風景

4.3.2 マダンの使われ方

図4-3に、J邸における住空間の使われ方の現状を示す。また、図4-6に、K邸における住空間の使われ方を示す。なお、J邸とK邸の調査当時の各空間の様子を写真4-1から写真4-31に示す。使われ方については、生活学や住居学分野の既往文献をもとに生活行為を番号で分類し、単位空間を示す英字の下に実地調査から確認できた住まい手の生活行為を記入している。以下、J邸とK邸におけるマダンの使われ方について述べる。

(1) J邸におけるマダンの使われ方

子供たちの遊び、犬の飼育、BBQ、ビアパーティー、食事、休息、物干など、様々な生活行為が行われる(06、09、10、11、12、13、15、20)。夏になると幼児である三男と娘のためにマダンの一角にゴムプールを設置し、友達をつれてきて一緒に水遊びをしたりする(写真4-17)。それをきっかけとして親同士で子供たちを見守りながら会話をし、隣人との交流を深める場でもある(14、16)。また、入居後に植えた柿の木が成長する姿や雨の日と雪の日の風景を観賞しながら休息をとることもある(07、25)。なお、特定の生活行為がなくても自然的に風通しや日照機能をもてる環境調整空間として使われている(26、27)。

以上から、マダンとは、四人の子供が育つJ邸における住要求を補う生活空間となっており、住まい手はマダンを単なる空地ではなくチェと連続した屋外の生活空間として認識していることが分かる。

(2) K邸におけるマダンの使われ方

J邸と同様、「M1」は、住まい手の生活を多面的にサポートする屋外の生活空間として使われていることがわかる(07、09、10、11、12、13、15、16、17、25、26、27)(写真4-29)。さらに、普段は家族中心の生活領域であるL1を家族以外の人に朝食場所として提供する仕組みの実現において、M1は家族と家族以外の人々の領域の区分を緩和させる役割を果たしているといえる。「M2」は、増築部を撤去することによって改修後は規模が広められ、R2の風通しや日照環境が改善されている(図4-6の「M2」、写真4-18)。宿泊客専用寝室であるR4からの観賞機能も考慮して住まい手が自ら園芸をしている(10、14、25)。「M3」は、L1の再現に係って新たに取り入れられたことが分かる。全体としてM1の使われ方と類似している一方、周りの自然景観を眺望することは、改修してはじめて可能となった使われ方である(25)(写真4-31)。L1からの行き来を容易にするために、Vに出ると靴を脱いだまま使えるウッドデッキがある。さらに、テーブルと椅子を用意し、床座式の生活に慣れていない来客が朝食をとることができるよう配慮している(06)。また、家族同士でお茶を飲んだり休息をとったりするなど、家族の団らん空間でもある(07、12)。

以上から、K邸では、様々な用途で使えるサービスヤードとしての使うためのマダンのみならず、見るためのマダン(M2、M3)に対する住まい手のニーズもあったと考えられる。さらに、マダン(M1)は、血縁関係の家族と血縁関係以外の構成員が同居するK邸の居住形態を支援する緩衝空間としての役割を果たしていることが分かる。

4.4 チェとマダンとの関係

ここでは、4.3 までの内容を踏まえ、対象事例におけるチェとマダンとの関係について説明する。なお、動線と視線の接続パタンの組み合わせを「関係」とする^{注5)}。図 4-7 に、J 邸における改修前後の屋内外の空間組織の変化、空間同士の動線・視線の接続パターンからみたチェとマダンとの関係を示す。また、図 4-8 に、K 邸における改修前後の屋内外の空間組織の変化、空間同士の動線・視線の接続パターンからみたチェとマダンとの関係を示す。

4.4.1 チェとマダンからなる住空間の維持とチェの空間構成の変化

(1) J 邸におけるチェとマダンからなる住空間の維持とチェの空間構成の変化

図 4-7 に示したように、J 邸では改修後もチェとマダンからなる住空間が維持されている。このことから、J 邸ではチェとマダンからなる住空間が異なる価値観や属性を持ったそれぞれの住まい手の生活に対応できているといえる。また、チェの空間構成に変化が起きているながらも、チェの一部の空間と M1 が V を介してつながる空間構成は維持されていることが分かる。一方、屋内に水回り空間が新設され、チェの空間構成の変化が見られる。改修前後の室の構成は類似であるが、母屋において「K」から出入可能な「T/B」が新設されている。それによって改修後は母屋でも洗面や入浴、排泄などへの住要求に対応可能となっている。水回り空間以外にも R1 から階段で出入可能なロフト「a」が新設されている。また、チェとマダンが縁側「V」を介してつながる空間構成が維持されている。

(2) K 邸におけるチェとマダンからなる住空間の維持とチェの空間構成の変化

図 4-8 に示したように、K 邸では改修後にチェとマダンからなる住空間に一部の変化が起きている。具体的には以前の住まい手によって増築されていた部分が撤去又は源築されている。K 邸では、改修後に離れは撤去されており、改修後の屋内の室の構成が変わっている。改修前は「R3、R4、T/B」となっていた所が改修後は「R3、L2、R4」と変わっている（図 4-5、図 4-6、図 4-8）。この点は家族と家族以外の人の同居を想定していたこと、伝統韓屋の大厅をそのまま再現する改修方針だったことなどに起因するといえる。また、J 邸と同様、「T/B」が新設されており、「p」を通じて出入可能となっている。なお、以前の住まい手によって母屋の後面と側面に加えられた増築部「R5、S、rt」が撤去されている。改修前は母屋の「R1、L」の後面が増築されていたが、改修後はその部分が減築され、元の規模に戻されている。それに伴い、建物後面に「M3」が新たに取入れられており、L1 から出入可能な「V」の新設によって屋内外がつながっている。以上から、K 邸では住空間形式の詳細は一部変わっているものの、J 邸と同様、チェとマダンからなる住空間が異なる価値観や属性を持ったそれぞれの住まい手の生活に対応できているといえる。

注 5) 本研究における「チェとマダンとの関係」の概念については 1.6 を参照

4.4.2 チェの空間同士の関係の維持と変化

(1) J 邸におけるチェの空間同士の関係の維持と変化

図 4-7 に示したように、J 邸では、「R3」と「K」、「K」と「R1」の間に出入口ができ、動線が内部化していることが分かる。

改修前は R3 は母屋に属しながらも、M1 を介さないと母屋に属した他の室と動線・視線の接続が不可能な状態だったのに対し、改修後は R3 と K の間に出入口ができ、K との動線・視線の接続が可能となった状態となっている。また、閉じた状態でも見られる開き戸によって「R1」と「K」の視線が常に接続可能となっている。さらに R1 から伸縮梯子を介して出入可能な「a」が新設されており、a にある開口部によって R1 と a の視線が常に接続可能な状態となっている。

離れでは、改修前は R4 と M1 の動線と視線が直接接続する場合と R4 から V を介して M1 へとつながる二つの方法があったのに対し、改修後は R4 から V を介して M1 につながるようになっている。このことから、チェとマダンの動線・視線の接続を形成させる空間としての「V」の存在が重視されているといえる^{注6)}。

(2) K 邸におけるチェの空間同士の関係の維持と変化

図 4-8 に示したように、K 邸では、開口部の新設、既存開口部における建具変更が行われていることが分かる。それによって、動線と視線の接続パターンからみた空間同士の関係に変化が見られる。

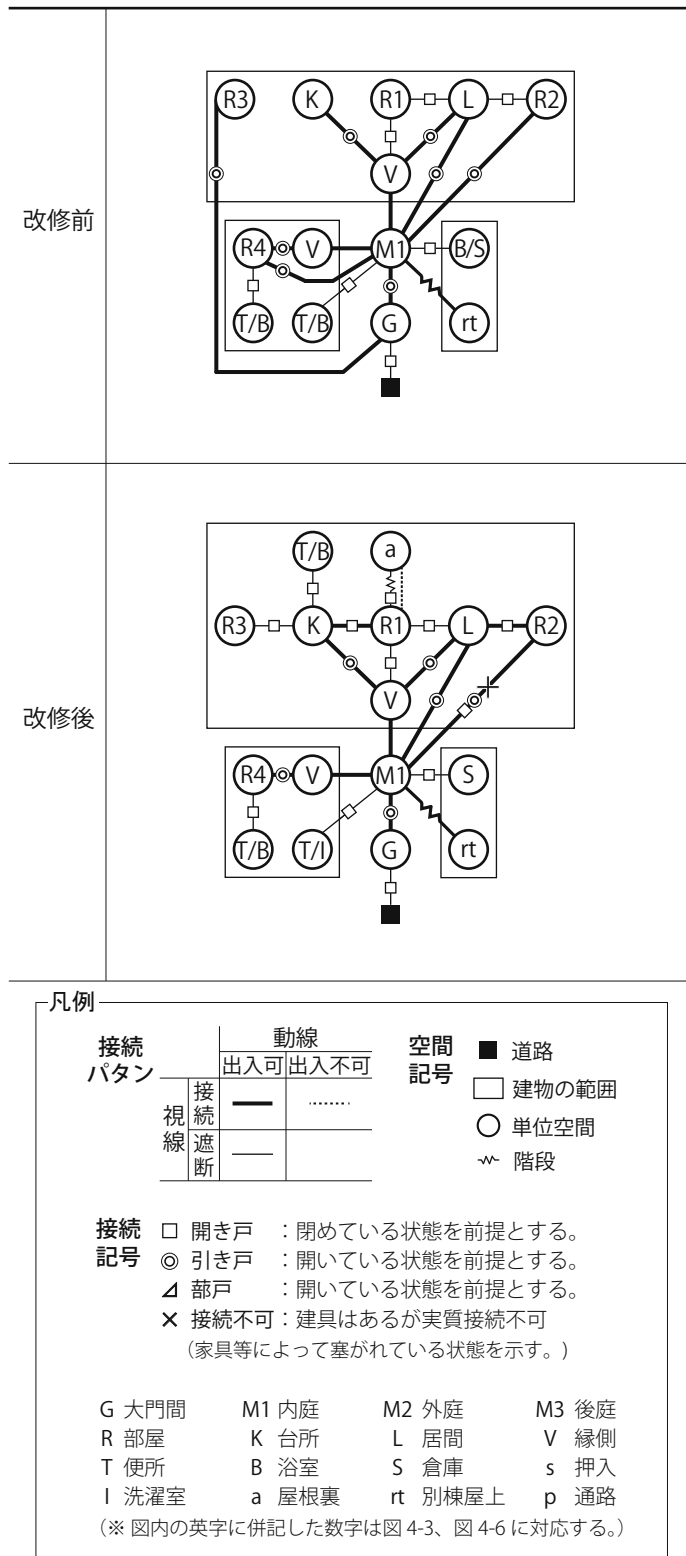


図 4-7 J 邸におけるチェとマダンとの関係

注 6) この点は、4.2 と 4.3 で改修の内容と使われ方について先述したように、R4 の一部のみについていた V を R4 の全面に拡充し、チェとマダンとの動線・視線の接続を活性化しようとした住まい手 J 氏の意図による変化である。

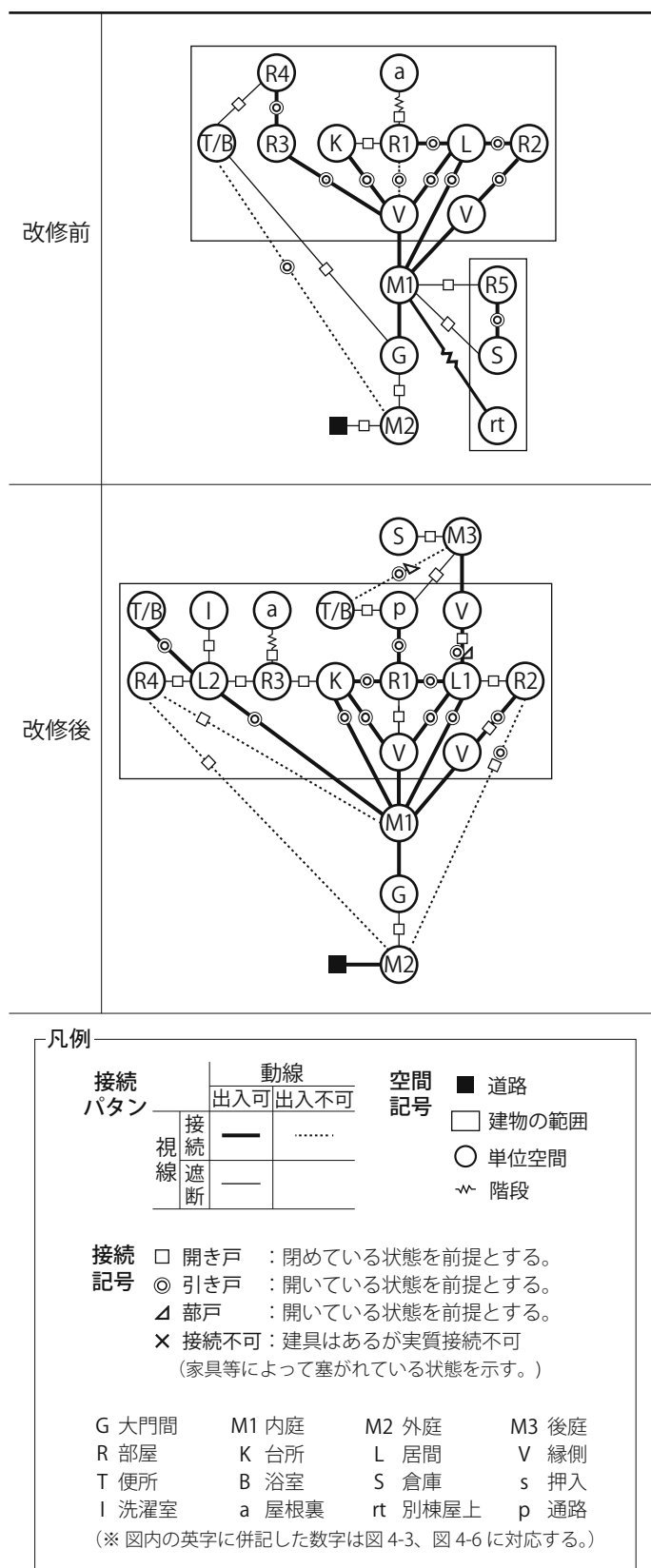


図 4-8 K 邸におけるチェとマダンとの関係

まず、建具変更による関係の変化について述べる。改修前は「R3」から「V」への動線と視線が引き戸を介して接続していたが、改修後は接続していない。言い換えると、改修前は「R1-K-R3-R4」のすべてに付いていた「V」が（図 4-5）、改修後は「R1-K」のみに付いており（図 4-6）、これは、4.2 で先述した、血縁関係の家族と有料の宿泊客それぞれの使用者のプライバシーを確保するための工夫によるものであるといえる（表 4-4）。一方、改修前は「R3」と「K」が視線と動線両方とも接続していないのに対し、改修後は R3 と K が開き戸によって出入可能となっている。R3 は息子部屋であるため、家族同士の動線を内部化して空間利用の効率を高めていると理解できる。また、「L2」を間にして「R3」と「R4」は開き戸を介して動線は接続し、視線は遮断されている。この点は、R3 と R4 の使用者のプライバシーを確保するために空間同士の関係を閉鎖的に設定しているのだと考えられる。なお、改修前は「R1」と「V」は引き窓を介して視線が接続していたが、改修後は開き戸を介して動線は接続しているものの、視線は接続していない。この点は、血縁関係の家族と有料の宿泊客が一時的に同居している K 邸の特性上、M1 から R1 への視線を遮断するための工夫だと推察される。一方、「L1」と「R1」は、改修前後に動線と視線の両方とも接続可能な状態が維持されている。

4.4.3 チェとマダンとの関係の特徴

(1) J邸におけるチェとマダンとの関係

図4-7に示したように、J邸では、改修前は「R3」から「M1」にアクセスするためには屋敷への出入口がある「G」を介さないとはいけなかったが、改修後はR3の動線の接続が内部化することによって「K」と「V」を介してマダン「M1」との動線と視線の接続が可能となっている。また、「R4」から「M1」への動線と視線の接続経路が改修前は二つあったのに対し、改修後は一つになっている。「V」を介してR4とM1との動線と視線の接続が可能となっていることから、チェの各空間とM1をつなぐV1の機能が重視されていることが分かる。さらに、VとM1は建具を介さないで常に動線と視線が接続できる状態であり、チェとマダンとの関係が開放的となっているといえる。建具を介して視線と動線が接続する場合も、M1に面しているチェの各空間の建具は引き戸であり、チェとマダンとの視線は常に接続している。このことから、J邸におけるチェとマダンの視線の接続による関係は開放性が強いといえる。なお、「R2」から「M1」への視線と動線は改修前には引き戸によって接続していたのに対し、改修後は開き戸を取り付けて二重建具となっている。それによって、R2とM1の動線と視線の接続パターンが増えている。その結果、住まい手が建具の開閉によって空間同士の関係を制御できる状態となっている。一方、現在R2とM1は物理的には視線と動線ともに接続可能であるものの、R2のベッド前面の開口部は家具使用のため実質的には接続しない。一方、M1に向けた既存の開口部そのものは維持されているため、今後室内の家具配置、使用状況によってはR2とM1の関係が開放的になる余地はあるといえる。

(2) K邸におけるチェとマダンとの関係

図4-8に示したように、K邸では、以前の住まい手によって増築されていた部分が撤去又は源築されている。それによって、改修後はチェとマダンとの動線と視線の接続による空間関係が改修前より開放的となっていることがわかる。なお、K邸では、新たにできた「M3」とチェの間に「V」を取り入れることによって、チェの前面と後面ともにマダンに対して常に視線と動線が接続可能な状態となっていることが分かる。さらに、建具の二重化に伴う関係の変化が特徴的である。K邸では、引き戸の外側に開き戸や部戸を取り付けて建具を二重にすることによって、視線の接続パターンが増え、住まい手が建具の開閉によって空間同士の関係を調節できる状態となっている所が見られる。具体的には「R4」と「M2」、「R2」と「M2」があげられる。屋内の使用者がチェとマダンの視線の接続を制御できる状態となっており、血縁関係の家族と有料の宿泊客が各自のプライバシーを確保しつつ同居できる空間関係となっているといえる。さらに、改修後は屋内からM2への視線の接続が可能となっており、観賞用庭の機能が重視されていることが分かる。また、「M1」を介して、家族以外の人が入出する「L2」への動線と、家族が入出するチェの各空間への動線の両方を活用できるようになっている。このことから、K邸のマダンは、家族と宿泊客という異なる属性を持った家族構成員が同じ敷地内に同居するための物理的・心理的距離を確保する緩衝空間としての役割を果たしているといえる。

4.5 小結

(1) チェとマダンからなる住空間の維持と変化

事例２軒ともチェやマダンにおける増築が一切行われていない状態で改修が行われている。さらに、以前の住まい手によってチェの後面やマダン一角に増築されていた部分を撤去し、建物の規模と屋内外空間構成が元に戻されていることが分かった。なお、そのような状況の下「伝統的な空間意匠を継承するための建具の変更、チェとマダンとの豊かな接続関係を実現させるための縁側の増設、家族のライフステージの変化に対応するための間取の変更」など、住まい手の住要求と好みに合わせた改修が行われていることが明らかになった。以上から、対象事例では、チェとマダンからなる住空間形式を継承しつつも現代の住要求を補えるように改修されていること、このような改修は、住まい手の意図や意志のみならず、韓屋の住空間に対する十分な理解と実戦的経験を持った建築家の介入があったからこそ実現可能だったことが明らかになった。

(2) チェとマダンの使われ方の特徴

子育て世帯であるＪ邸では、昼間には家全体が子供の居場所となっており、子供中心の生活がなされている。特に縁側は、チェからマダンへの移動経路としてだけでなく、子供たちが靴を脱いだまま母屋と離れを立ち回って遊ぶこと、休息や日向ぼっこ、読書、会話をすること、マダンで飼っている犬と遊ぶことなど、様々な行為が行われる生活空間であることが明らかになった。Ｋ邸では、変化するライフステージに対応して家族と家族以外の人が家をシェアする仕組みによって住宅全体が活用されていることが明らかになった。なお、改修によって再現した伝統的大庁では、季節に応じた建具の開閉によって住まい手自らが室内環境を制御する生活が実現されていることが明らかになった。事例全体として、マダンは、犬の飼育、物干、食事、休息、園芸、観賞、風通しや日照など、住まい手の日常生活を多面的にサポートする空間として使われている。この点から、マダンは単に空き地ではなく、チェと連続した屋外の生活空間として認識されていることが明らかになった。さらに、Ｋ邸のマダンは、血縁関係の家族と有料の宿泊客が同じ敷地内に同居する生活を成立させる緩衝空間としての役割を果たしていることが明らかになった。なお、Ｋ邸では、都市の狭い敷地でありながらも観賞用のマダンを新たに取り入れており、見るためのマダンに対するニーズもあったことが明らかになった。

(3) チェとマダンとの関係からみた住み方

事例２軒ともチェにおける水回りの新設によってチェの空間同士の関係に一部の変化があった。一方、改修後、チェの各空間とマダンが視線と動線ともに接続することによってチェとマダンとの関係は全体として開放的となっていることが明らかになった。特に、チェとマダンとの関係の開放性は縁側の存在によって強化されているといえる。対象事例では、縁側の存在によって建具を介さずに常にチェとマダンとの視線と動線が接続しており、縁側では様々な生活行為が見られた。住まい手の日常生活を多面的にサポートしている縁側が存在することによって、チェとマダンとの関係が密接になっているとえる。さらに、Ｋ邸では引き戸の外側に開き戸や部戸などを取り入れて建具を二重にすることによって、建具

の開閉によって住まい手自らがチェとマダンとの関係を調節することができる状態となっていることが明らかになった。

以上から、対象事例では、チェとマダンからなる伝統的住空間の形式を維持しながらも住まい手の多様な価値観に対応した改修を通じて現代に合致した生活が営まれているといえる。さらに、チェとマダンとの動線・視線の接続のバリエーションが改修後さらに増え、住まい手自らが建具の開閉によってチェとマダンとの関係を調節し、季節に対応する伝統的な生活の良さが享受されているといえる。

第4章参考文献

- Seoul Metropolitan Government・Korean National Commission for UNESCO : The 20th Century Urban Cultural Heritage in Our Daily Life-UNESCO Asia-Pacific International Forum on the Preservation of Urban Cultural Heritage-, Korean National Commission for UNESCO, 2010
- 那須聖, 村田涼, 八木幸二: 内部空間との関係にみる近代住宅の外部空間の構成に関する研究, 日本建築学会計画系論文集, 第 528 号, pp.133-139, 2002.2
- 岡村航太, 小川次郎, 坂本一成: 外部空間の配列と接続からみた都市型住宅作品の構成 - 現代日本の住宅作品における内外の関係による空間形式 (2)-, 日本建築学会計画系論文集, 第 552 号, pp.141-146, 2002.2
- Kim, H., Takada, M. : A Study on the Relation between Chae and Madang based on the Way of Living in Urban Hanok, Proceeding of the KHA Conference, The Korean Housing Association, Vol.24, No.2, pp.185-190, 2012.11
- 金海梨, 高田光雄, 森重幸子: 韓屋建築家の自邸と彼の作品に見る伝統的生活文化の現代的継承 - 韓国における伝統的木造住宅の現代的価値に関する検証 その 1-, 日本建築学会学術講演梗概集 (近畿), 日本建築学会, 建築計画, pp.983-984, 2014.9
- 金海梨, 高田光雄: 韓屋におけるチェとマダンのつながりに対応した住生活の特徴に関する一考察 -, 韓国現代文学作品『庭の深い家』を対象として -, 日本建築学会計画系論文集, 第 80 巻, 第 718 号, pp.2763-2770, 2015.12
- 金海梨, 高田光雄, 金泰永: 都市韓屋の増改築事例における出入関係からみたチェとマダンのつながり方, 日本建築学会計画系論文集, 第 81 巻, 第 727 号, pp.1859-1867, 2016.9

第 5 章

住まい手の多様な価値観に対応した韓屋における住み方 - 外国人の事例 -

5.1 はじめに

5.1.1 本章の目的

前章では、現代の住まい手の多様な価値観に対応した改修が行われ、住み継がれている近年の事例を対象とし、改修の特徴と使われ方の現状を把握した上で、動線・視線の接続状態の変化を分析した。また、それらを踏まえて、対象事例におけるチェとマダンとの関係からみた住み方について明らかにし、今後の韓屋計画に資する知見について考察した。一方、2軒という限られた特集事例を通じて得られた成果であるため、一般化のためにはさらなる研究蓄積が必要があることを指摘した。

以上のような背景を踏まえ、本章では、外国人住まい手の事例を取り上げる。本章では、前章に引き続き、対象事例における改修の特徴と使われ方の現状を把握した上で、動線・視線の接続パターンを分析し、チェとマダンとの関係からみた住み方を明らかにすることを目的とする。さらに、外国人住まい手による韓屋の再生活用事例から見出せる韓屋の価値について考察する。

5.1.2 研究の対象と方法

前章では韓屋設計分野で著名な建築家の自邸と彼の作品を取り上げた。本章では、2人の外国人による韓屋再生活用事例を取り上げる。住まい手であるP氏とR氏は韓国人とは全く異なる文化的背景を持った外国人ではあるが、韓国の歴史文化や韓屋について理解度が高い。なお、その事実は韓国でもすでに認識されている^{注1)}。P邸とR邸を対象とした住み方調査を通じて、異なる価値観、それに応じて求めら

表 5-1 調査の概要

	調査の経緯と主な調査内容	
	P邸	R邸
調査時期	2012.9.27 住まい手のこれまでの韓国での働き、住宅と住まい手の現在に至る経緯、住空間の使われ方などの把握	2013.3.16 住まい手のこれまでの韓国での働き、韓屋に関連する活動などについてのヒアリング
	2013.3.30 前回調査時に最中だった改修工事終了後の様子、使われ方の把握、住まい手による手書きの間取り図入手	2013.3.30 住宅と住まい手の現在に至る経緯、住空間の使われ方などの把握
	2013.4.24 入手した間取り図をもとに改修後の変更点を含め、住宅各部実測	2014.9.13 夏の過ごし方の把握 ¹⁾
	2014.11.5 前回の調査以降に加えられた改修後の現状把握	2015.4.14 第三者に譲渡された後のR邸の活用経緯、現状把握（現所有者ヒアリングから）
	2015.4.14 前回の調査以降に加えられた改修後の現状把握	

- 1 2013年3月の調査は、改修工事を終えてから入居した直後に行ったため、夏期の過ごし方については伺うことができなかった。2014年9月のインタビュー調査では、R邸が第三者に譲渡されたことや、2013年2月末から2014年3月まで1年間住んだ経験に基づいて四季の過ごし方などについて伺えた。なお、インタビューは、R氏が渡米する前に京都を訪ねた時に行われた。

注1) P氏は、ソウル市城北区における韓屋保存活動を先導した住民としての功勞によって、2010年に「ソウル市名誉市民表彰」を受けている。さらに、韓国文化の発展と学問振興顕著な功績のある者として評価され、2012年に大統領令によって「第31回世宗文化賞韓国文化部門賞（文化体育観光部主催）」を受けている。

R氏は、韓屋密集地域を保全再生するための集まりとして「西村住居空間研究の集い」という会を創設し、代表として有志の地域住民とともに活動していた（関連記事 HP http://www.hani.co.kr/arti/culture/culture_general/502593.html）。なお、韓屋改修を行いながら「上棟式」も執り行うことも注目された（関連記事 HP <http://shindonga.donga.com/3/all/13/111533/2>）。元ソウル大学国語教育課の副教授でもあるR氏は、在職当時から韓国語を教える外国人教授として注目されており、新聞コラムや著書発刊など、韓国語での著述活動も精力的に行っている。R氏の著書として以下のものがあげられる。Robert J. Fouser：서촌 홀릭（西村ホリック），sallimbooks，2016.4、Robert J. Fouser：미래시민의 조건（未来市民の条件），sejongbooks，2016.3、Robert J. Fouser（共著）：서울의 재발견（ソウルの再発見），paperstorybook，2015.8

れる多様な状況と韓屋の住空間がどのように対応しているのかを実証し、韓屋の住空間の普遍的価値をより多面的に考察することができると期待される。歴史文化の背景が韓国人とは異なる外国人でありながらも韓国の歴史文化や韓屋の住空間と生活文化を堪能しながら住んでいるP氏とR氏の住み方の検討は、現代に韓屋に住む意味合いを吟味する有意義な実証資料の蓄積になると考えられる。表5-1に、P邸とR邸の調査概要を示す。なお、表5-2に、P氏とR氏の略歴を示す。

5.2 対象住宅の現在に至るまでの経緯

5.2.1 建物の概要と住まい手の属性

写真5-1、5-2、5-3に、道からみたP邸とR邸の様子を示す。表5-3に、調査対象の建物の概要を示す。なお、表5-4に、住まい手の属性を示す。

(1)P邸における建物の概要と住まい手の属性

P邸は、隣接する敷地にある2軒の住宅からなる。本章では、1974年に購入及び入居している住宅を前の家、2003年に購入及び入居している住宅を後の家と呼ぶことにする。前の家は1926年に建てられており、敷地面積は約52坪、建築面積は約43坪である。1974年購入した直後から入居し、現在に至る。後ろの家は敷地面積は約43坪、建築面積は約28坪である。2003年購入し、改修を行いながら住みこなし、現在に至る(表5-3)。単身者の男性P氏と、血縁関係ではない男子大学生複数名が同居している^{注2)}(表5-4)。P氏一人で家全体を維持管理することや防犯することは困難であるため、男子大学生を無料で下宿させながら家の維持管理、防犯に協力してもらっている^{注3)}。



写真 5-1 道から見たP邸の
表の屋敷出入口の様子(2013.3)



写真 5-2 道から見たP邸の
裏の屋敷出入口の様子(2015.4)



写真 5-3 道から見たR邸の
屋敷出入口の様子(2013.3)

注2) 調査時期によって同居している男子大学生の人数が異なっていたため、複数名と記した。P邸では、最大6人の男子学生を受容できる。2013年4月に行った1回目の調査では、P氏と5名の男子学生が同居していた。なお、学生たちは全て韓国の海軍儀仗隊を転役したものであり、大学を卒業して社会に進出したら次の期数の海軍儀仗隊転役者が入居する。

注3) この点については、次項「5.2.2 入居のきっかけ」で具体的に述べる。

表 5-2 住まい手 P 氏と R 氏の略歴

	P 邸	R 邸
出身地	アメリカ	アメリカ
略歴	1968 アメリカ平和奉仕団 ¹ の一員として韓国に派遣され、4 年間活動 2010 ソウル名誉市民表彰 2012 第 31 回世宗文化賞韓国文化部門賞受賞 2013 大統領直属文化隆盛委員会委員任命	1983 韓国語研修のために韓国留学 1987 韓国の大学 (KAIST, 高麗大学) で英語講師 2002 日本京都大学英語教育学専攻助教授 2006 日本鹿児島大学韓国語学専攻助教授 2008 韓国ソウル大学国語教育学副教授 ⁴

1 「アメリカ平和奉仕団」は、1961 年にアメリカ政府主導で創設した青年奉仕団体で、韓国には 1966 年から 1981 年まで、約 2000 人が派遣された。派遣された人材は、1925 年 6 月 25 日の朝鮮戦争以降の経済再建、結核退治、英語普及などの活動を展開した。P 氏は江原道（韓国の中東部にある地域）の教育機関で教師たちに英語を教える役割を果たしていた。

2 「江陵船橋荘」は、江原道の重要民俗資料第 5 号で指定されている伝統韓屋で、李朝時代の貴族の住んだ住宅である。江原道に派遣された P 氏はこの住宅に 4 年間下宿していた。それをきっかけで韓国の伝統的住空間や生活文化について関心を持ち、自主的に学習してきた。江陵船橋荘は 2009 年に韓屋ステイ正式業者として文化体育観光部の指定を受け、子孫が内棟（母屋）に居住しながら行廊棟や舎廊棟など付属棟を宿泊や展示、伝統文化体験空間として運営している。

3 P 氏は再開発によってつぶされる危機に置かれた自邸やその周辺の韓屋群を保存するために、地域住民を先導して起こした訴訟で勝訴した。それをきっかけで、韓屋保存運動を主体的に行う外国人として注目を集めた。

4 R 氏は 2014 年初にソウル大学を退職し、2014 年 9 月に渡米した。R 邸は 2014 年 4 月に第 3 者に譲渡された。

表 5-3 対象事例の基本属性

		所在地	建築年	敷地面積	建築面積	構造 / 屋根	所有形態	購入時期	入居時期	工事区分
P 邸	前の家	ソウル市	1926 年	約 52 坪	約 43 坪	木造 / 瓦葺	持家	1974 年	1974 年	改修
	後の家	城北區	不明	約 43 坪	約 28 坪	木造 / 瓦葺	持家	2003 年	2003 年	
R 邸		ソウル市 金路區	1936 年	約 18 坪	約 12 坪	木造 / 瓦葺	持家	2011 年	2013 年	大修繕

※ 表内の「前の家」、「後ろの家」は筆者による。P 邸では、隣接敷地の 2 軒の韓屋からなっているため、呼び名を付けている。R 邸は、2014 年 3 月時点で第 3 者に譲渡され、同年 6 月末からは宿泊施設に転用されている。本章における分析は 2013 年の住み方調査で得られたデータを用いている。

表 5-4 住まい手の属性

	構成員（年齢・職業）	人数 ³	同居形態	直前居住形態
P 邸	P 氏（60 代後半・中小企業役員） 海軍儀仗隊を転役した男子大学生 5 人	6 人（男子学生は 最大 6 人まで受容可）	無料下宿生との 同居	区分所有の 集合住宅 ¹
R 邸	R 氏（50 代中半）	1 人	単身居住	韓屋 ²

※ 表の内容は、2013 年 3 月の調査による。

1 アメリカ平和奉仕団のメンバーとしての 4 年間の活動期間を含めて、P 氏は 1968 年に韓国に来て 5 年間、伝統韓屋に住んだ。平和奉仕団の活動を終え、ソウルに移転して 1974 年に前の家を購入する前まで、しばらく区分所有のマンションに住んだ。

2 北村韓屋密集地域にある韓屋を借りて住んでいた。

3 P 邸では 2014 年秋から猫を飼っている（2015 年 4 月の調査による）。R 邸では入居当時は以前から飼っていた犬も一緒だったが、R 氏の大学での仕事が忙しすぎて犬と付き合える時間がなかなか取れなくなってから犬の性格が変わることを感じた。それを心配して、2013 年 7 月に知り合いの米軍士官の家に養子に出した（2014 年 10 月の調査による）。

(2)R 邸における建物の概要と住まい手の属性

R 邸は、景福宮の西の方にある地域に所在しており、周りには 1930 年代から 1960 年代にかけて供給された都市韓屋が集積している^{注 4)}。R 邸は 1936 年建てられており、敷地面積は約 18 坪、建築面積は約 12 坪である。R 氏は 2012 年にこの住宅を購入し、大規模修繕を行って 2013 年 2 月につ竣工審査後、2013 年 3 月に入居した。2014 年 4 月時点で住宅を第 3 者に譲渡されており、実際に住んだ期間は 1 年余りである。R 氏は単身者で、犬を飼いながら一人暮らししていた。R 邸は、現在は宿泊施設に転用されている（表 5-3、表 5-4）。宿泊客が滞在中の過ごし方については調査が困難であったこと、短期間の過ごし方だけでは住まい手と住宅との関わりの実態を深く考察することが難しいことなどから、本章では、R 氏居住期間中の住み方調査を通じて得られたデータを用いて分析、考察を行っている。

表 5-5 P 邸における現在に至るまでの経緯と関連するインタビュー内容

	現在に至るまでの経緯	主要事項に関連するインタビュー内容
時期	1968 江陵船橋荘 ¹⁾ に 5 年間住みながら韓屋の空間・生活文化を自ら学習・体験し、韓国定着決心	幼い時から世界国々を旅行しながら各国の文化遺跡について興味を持って成長したので、韓国に来てからも週末は自転車に乗って（当時の居住地域だった）江原道江陵一帯の韓屋や文化遺跡を探訪していました。ある日、江陵船橋荘の存在を知り、あてもなく門をたたきました。池亭もある 99 間の大きい韓屋でした。何回も訪ねて会話すると、大家のおばあさんと仲良くなって、「我が家に住んでもいいよ。掃除さえできれば、どの部屋でも思いっきり使ってもいいよ。」と言われました。思いっきり「活來亭」 ²⁾ を選びました。活來亭に住みながら韓屋の良さが分かりました。韓屋の瓦ぶき屋根の曲線は本当に美しいです。韓屋はとても科学的な住宅です。オンドルさえあれば、寒い冬でも心配ありません。夏は建具を全部開いたらすごく気持ちよく過ごせます。韓屋は芸術と哲学、科学、歴史性と国民性が染み込んでいる完璧な遺産です。船橋荘（の活來亭）に住みながら韓屋の優秀性と美しさに心を奪われました。それで韓国に残ろう、韓屋に住もうと決心したんです。《後略》
	1973 居住地移転、ソウル定着一時的に賃貸マンション居住	
	1974 ソウル城北區東仙洞の韓屋（前の家）購買、入居	
	2003 隣接敷地の韓屋（後の家）購買海軍儀仗隊を転役した男子大学生たちとの住宅シェア開始	
	2004 P 邸が所在する城北區東仙 3 洞が市の住宅再開発整備区域に指定	2 軒の家を一人でメンテナンスすることも大変でした。ソウルは家賃がとても高いので、地方から留学してきた大学生に家をシェアしたらどうかと思いました。《中略》ぼくは仕事のため海軍と接する機会が多いです。信頼できる海軍関係者を通じて海軍儀仗隊を転役して大学に復学する男子学生たちを紹介してもらいました。元々住んでいた学生が大学を卒業して社会人になったら退去させて、その人らの軍隊後輩をまた募集します。体格が良い男子学生たちが共にいれば防衛的にも安心できるので助かります。家賃は無料です。彼らがほとんどの家の掃除をやっています。みんな力持ちなので改修する時も役に立ちます。ぼくは家族もいないし、学生たちがいて心強いです。《後略》
	2007 城北區東仙 3 洞住宅再開発整備区域指定に対する取消訴訟	
	2009 勝訴 ³⁾	
	2010 ソウル名誉市民表彰	
	2012 第 31 回世宗文化賞韓国文化部門賞受賞	
	2013 大統領直属文化隆盛委員任命	

※ 斜字はインタビュー対象の言葉を示す。（ ）及び下線は筆者による。

1 江原道の重要民俗資料第 5 号で指定されている伝統韓屋で、李朝時代の貴族の住んだ住宅である。江原道に派遣された P 氏は、この住宅での居住経験をきっかけで韓国の伝統的住空間や生活文化に関心をもち、自主的に学習してきた。江陵船橋荘は 2009 年に韓屋ステイ正式業者として文化体育観光部の指定を受け、子孫が内棟（母屋）に居住しながら行廊棟や舎廊棟など付属棟を宿泊や展示、伝統文化体験空間として運営している。

2 江陵船橋荘を構成する住棟の一つで、庭園の人工池の真ん中に建てられている楼阁形式の建物である。

3 P 氏は再開発によってつぶされる危機に置かれた自邸やその周辺の韓屋群を保存するために、地域住民を先導して起こした訴訟で勝訴した。それをきっかけで、韓屋保存運動を主体的に行う外国人として注目を集めた。

注 4) 「景福宮（キョンボックン）」は李朝時代（1392～1910）の正宮である。景福宮の北にある地域が「北村（ブッチョン）」と呼ばれており、北村は本研究の第 4 章で取り上げた事例 K 邸の所在地でもある。R 邸が所在する地域は景福宮の西の方にあり、「西村（ソチョン）」と呼ばれている。北村や西村などの名称は、昔からの呼び名で、現在の正式な行政区画の名称ではない。

5.2.2 入居のきっかけ

(1)P 邸における入居のきっかけ

表 5-5 に、P 邸における韓屋入居のきっかけや、現在に至るまでの経緯を示す。P 氏は、1968 年にアメリカ平和奉仕団メンバーとして韓国の中東部にある江原道に派遣された。P 氏は幼い時から世界を旅行しながら各国の文化遺産に関心を持つようになり、韓国江原道に来てからも週末は地域の文化遺産を探訪していたことが分かる。その過程で江陵船橋荘という伝統韓屋に出会い、大家さんと付き合えるようになって、江陵船橋荘の活來亭に 5 年間下宿する機会が与えられたことが分かる。それをきっかけに P 氏は韓屋の住空間やそこで培われてきた伝統的な生活文化を自ら体験し、韓屋に住むことの良さや韓屋の建築的美しさを高く評価するようになった。そのような経験から、韓国定着を決心し、1973 年に居住地をソウルに移転し、現在に至る。P 氏は、幼い頃から異文化に対する興味を持っていて韓国でも韓屋に関心を持ち、江陵船橋荘の活來亭に住んだ経験が現在の住まいへ入居するきっかけとなっていることが分かる。

以上から、P 邸では、韓屋での生活の経験を通じて伝統的な住空間の美しさや優秀性を体得したことが主な入居のきっかけとなっているといえる。なお、異文化に対する興味は P 氏が韓屋に関心を持つ背景となっているといえる。

表 5-6 R 邸における現在に至るまでの経緯と関連するインタビュー内容

	現在に至るまでの経緯	主要事項に関連するインタビュー内容
時 期	1982 日本語研修のために日本留学、同年 8 月に日本在留期間延長のため韓国を初めて訪問	● ぼくは大学時代に日語日文学を勉強したので、先に日本に関心を持っていました。日本語を勉強しながら隣の国の韓国にも関心を持つようになりました。1 週間だけでは物足りなくて、もう一回韓国に来たいと思いました。
	1983 ソウル大学で韓国語研修、知り合いの家にホームステイ	● 1983 年から 1993 年の間に、韓国に 8 年間住んでました。オリンピック開催期間中の 1988 年は 1 年間韓屋の部屋を借りて住んでいました。当時、ソウル市内で 1 人暮らしができる部屋を探していましたが、借りられる部屋が韓屋に多かったです。その時初めて韓屋に出会いました。南向きの家でマダン ¹ は自然を家の中に引き入れます。太陽に反射するマル（板張り空間）はとてきれいでした。季節の変化が感じられることが幸せでした。
	1988 1 年間、恵化洞の韓屋に居住 ¹	● 大学業務が余りにも忙しくて、外国人教員宿舎に入居しました。1992 年末渡米する前までは教員宿舎に住んでました。
	1989 在職中の大学の教員宿舎に入居	
	1992 博士課程進学のために渡米	
	1995 渡日 ² 、京都で築 50 年以上の木造の戸建に居住	● その家に住んでいる間に、時々恵化洞の韓屋に部屋を借りて住んだ時（1988 年）の記憶が思い出されました。
	2008 ソウル大学の教員マンション入居、韓屋への転居決心	● 教員マンションは便利だったけど、やはり風通しや通風があまり良くないと感じました。息苦しかったです。日本でずっと木造の戸建住宅に住んでいたためか、マンション生活になかなか慣れなかったです。
	2009 西村所在の戸建ての洋屋に転居	
	2010 北村の桂洞にある韓屋に転居	● 教員マンションに住んで 2 か月目に入ってから北村一帯の韓屋物件を探し始めました。《中略》北村の韓屋はあまりにも高かったたので、西村にきびすをめぐらしました。《中略》西村で韓屋が集積地は再開発地区の問題が係っていたので、結局韓屋はあきらめて 2009 年春に西村にある戸建ての洋屋に入居しました。その経験は西村の韓屋保存に関心を持つきっかけとなりました。あるひ北村町歩きをしながら気に入った韓屋を見つけて 2010 年 3 月に引っ越しました。その後もずっと韓屋に住みたいと思いました。西村住居空間研究会活動をしながら西村に愛着ができたので、西村の韓屋を買ったんです。
	2011 西村所在の韓屋（調査対象）を購入 西村住居空間研究会創設	
	2013 R 邸入居	

※ 斜字はインタビュー対象の言葉を示す。（ ）及び下線は筆者による。

1 恵化洞はソウル市鐘路区にある町である。

2 R 氏は大学時代に日語日文学を専攻した。博士課程では言語学を研究したがその関係でまた渡日していた。

(2)R 邸における入居のきっかけ

表 5-6 に、R 邸における韓屋入居のきっかけや、現在に至るまでの経緯を示す。アメリカの大学で言語学を専攻した R 氏は日本での語学研修期間中韓国に一時訪問していた。1983 年には韓国語研修のために韓国を改めて訪問し、1 年間韓国に滞在しながら語学研修を受けていた。その後 1987 年から 1992 年までは韓国の大学で英語教育講師を務め、2002 年からは日本の大学で外国語教育学助教授を務めた。R 氏が韓屋に初めて出会ったのは 1988 年である。当時、1 人暮らしができる部屋を探したら、韓屋物件が多かったのが最初の韓屋入居のきっかけとなっていることが分かる。日本に滞在している時期にもた時も時々 1988 年から 1 年間住んだ韓屋での記憶が思い出されたという R 氏の発言から、韓屋での生活に満足していたことが分かる。特に、自然を家の中に引き入れてくれるマダンの存在や、太陽に光るマル（抹楼）の美しさを感じた記憶、四季の変化が感じられることが幸せだった記憶を持っていることから、自然と共に住む韓屋での生活に満足していたことが分かる。2008 年韓国に来た直後、大学の教員マンションに住んだが、息苦しかったので風通しや採光の良い韓屋に住みたいと思い、マンションに入居して 2 か月目から韓屋物件を探し始めたことが分かる（表 5-6、表 5-2）。R 邸では、自然と共に住む生活を享受していた 1 年間の居住経験が現在の住まいへ入居するきっかけとなっていることが分かる。

以上から R 邸では、韓屋での生活の経験を通じて自然と共に住む生活の良さを体得したことが主な入居のきっかけとなっているといえる。

5.2.3 改修内容と改修後の住空間の現状

表 5-7 に、P 邸と R 邸における改修内容を示す。また、図 5-1 に、P 邸の改修後の住空間の現状を示す。図 5-2 に、R 邸の改修前の間取と改修後の住空間の現状を示す。

(1)P 邸における改修内容と改修後の住空間の現状

P 邸では、1974 年以降、持続的に住まい手自らが改修・改築を行っている。元の間取りを維持しつつ改修を行うことにより、冬の空間であるオンドルと夏の空間であるマルが併置される韓屋の特徴が継承されている。具体的な改修次項として、構造材を交替している。柱の腐食などによる構造上の問題から、構造材を一部交替し、構造補強をしている。また、冬の寒さに対応するために、毎年冬期になるとマダンに面する軒先の部分に DIY のアルサッシを取付、断熱性や気密性を高めようとしている。P 邸には、伝統建具の継承を重視する P 氏が自ら作製した取り外し可能なサンルームがある（表 5-2 のⅡ - ②、図 5-1）。住まい手自身の好みに対応しつつ夏と冬の両方を快適に過ごすために工夫されたものである。その他、以前居住者によって変質していた建具を元の伝統的なデザインに戻し、伝統的な空間意匠を重視している。マダンでは、基本的な空間構成は入居時と同じであるが、樹木を植え替えている。P 邸では、2 軒の韓屋を所有してから敷地を使うのに住自由度が高くなり、敷地境界の空地を利用して増築を行い小さな書斎、ロフトなどを設けている。

(2)R 邸における改修内容と改修後の住空間の現状

R 邸では、大修繕により、家の全空間にわたって大幅の改修が行われた。一方、改修前後にチェとマダンからなる住空間の形式は継承されている。改修において住まい手 R 氏が重視したのは、冬の寒さと夏の暑さに両方対応可能な住空間を計画することだった。そのため、R 邸では、冬の寒さに対応するために大幅な建具の変更を行っている。断熱性や気密性を高め冬の温熱環境を改善するために、最外面の建具を二重にし、PVC サッシを取り付けている。また、夏の暑さに対応するために、ヌマル^{注5)}空間を新たに取り入れている。その他、住まい手の好みに応じて建具のガラスにエッジを入れている。この技術は現代の既製品では表現できないもので、ディテールが求められる作業であるため、建築家と住まい手が持続的に相談しながらガラスの職人を手配し、実際の作製に至る。また、本来は住棟は母屋と離れの2棟があったが、R 氏の提案によって廊下と玄関を新たに取り入れ、二つの住棟を一つして住空間計画が行われた。一般的に韓屋では廊下や玄関は存在しないが、単身者であり、内部空間使用の効率を高めようとした住まい手の住要求に伴い、このような改修が行われた。

以上から、R 邸では、季節とともに暮らす生活が営まれる住空間計画に取り組みながら住まい手の個性や好みに合わせた改修が行われていることが分かる。

表 5-7 P 邸と R 邸における改修内容

改修内容		P 邸	R 邸
I	①建具変更：屋内の気密性、断熱性を高めるために二重窓設置	-	○
	②水回りの設備改善：キッチン、トイレ、浴室の住設備変更	○	○
	③通路の新設：屋内動線の効率化のために通路を設置	○	○
	④増築：水回りの増設や新たな機能を取り入れるための増築	○*1	-
	⑤その他：屋根の改修(瓦の交換)	○	○
II	①建具変更：伝統的な意匠を継承するために伝統建具に取替え	○	-
	②間取りの変更：季節に応じた住み方を実現するための試み	○*2	○*3
	③撤去：マダン中心の出入動線、マダン機能回復のための試み	-	○*4
	④薪を使うオンドル暖房の再現	○*5	-

※ I には「性能の改善を目的とした改修」に関連する内容を示す。

II には「住まい手の意図による伝統性の継承発展」に関連する改修内容を示す。

*1 敷地境界の空地を利用し、通路と下宿生専用室を増設している(図5-1)。

*2 冬は取り外し可能なサンルームを設置している。この改修は、単に寒さに対応するためではなく、伝統建具を継承しつつ冬の寒さに対応するために住まい手が自ら工夫したものである(図5-1の「sr」に対応)。

*3 伝統韓屋における季節に応じた住み方を実現するために、住宅の購買当時はなかったマル(抹楼、板の間)を新設している(図5-2の「L2」に対応)。このような改修により、R邸では床暖房をつけるオンドル部屋と床暖房を付けないマルが併置される伝統的住空間の仕組みが継承されている。

*4 マダンに増築されていたトイレと蔵を撤去し、マダンを通じた通風や採光を最大限に確保しようとしている(図5-2の「改修前の間取り図」を参照)。

*5 薪を使って床暖房をつける伝統方式を再現するために、薪の入口を新設している(図5-1の「★」と「◆」に対応)。

注 5) マル(抹楼；板張り空間)の一種で、「高殿の板の間」を指す。マルについては資料編の対訳用語集を参照

5.3 住空間の使われ方に見る住み方の現状

5.3.1 チェの使われ方

P 邸における住空間の使われ方の現状を図 5-1 に示す。また、R 邸における住空間の使われ方の現状を図 5-2 に示す。

(1)P 邸におけるチェの使われ方

P 邸では、夏を快適に過ごすための開放的な板張り空間であるマルと、冬を快適に過ごすためのオンドル部屋が共存する伝統的な住空間の仕組みが継承されており、季節に対応した生活が享受されている。特に、P 邸では、夏はマダンに面するチェの建具を開放して最大限の風通しを確保しながら過ごし、冬はマダンに面するチェの建具を閉鎖するとともに、取り外し可能な DIY のサッシを軒下に取り付けて温熱環境を調節しながら過ごしている。「軒下空間を活用したサンルームの利用」は、伝統建具を維持継承しながら季節の変化にも対応するために住まい手である P 氏が自ら工夫し、試みたものである。それにより、季節とともに暮らす生活の良さが享受されていると考えられる（写真 5-4、写真 5-5、写真 5-6、写真 5-7）。



写真 5-4 夏期の様子 (1)
(建具を全て開放した時)



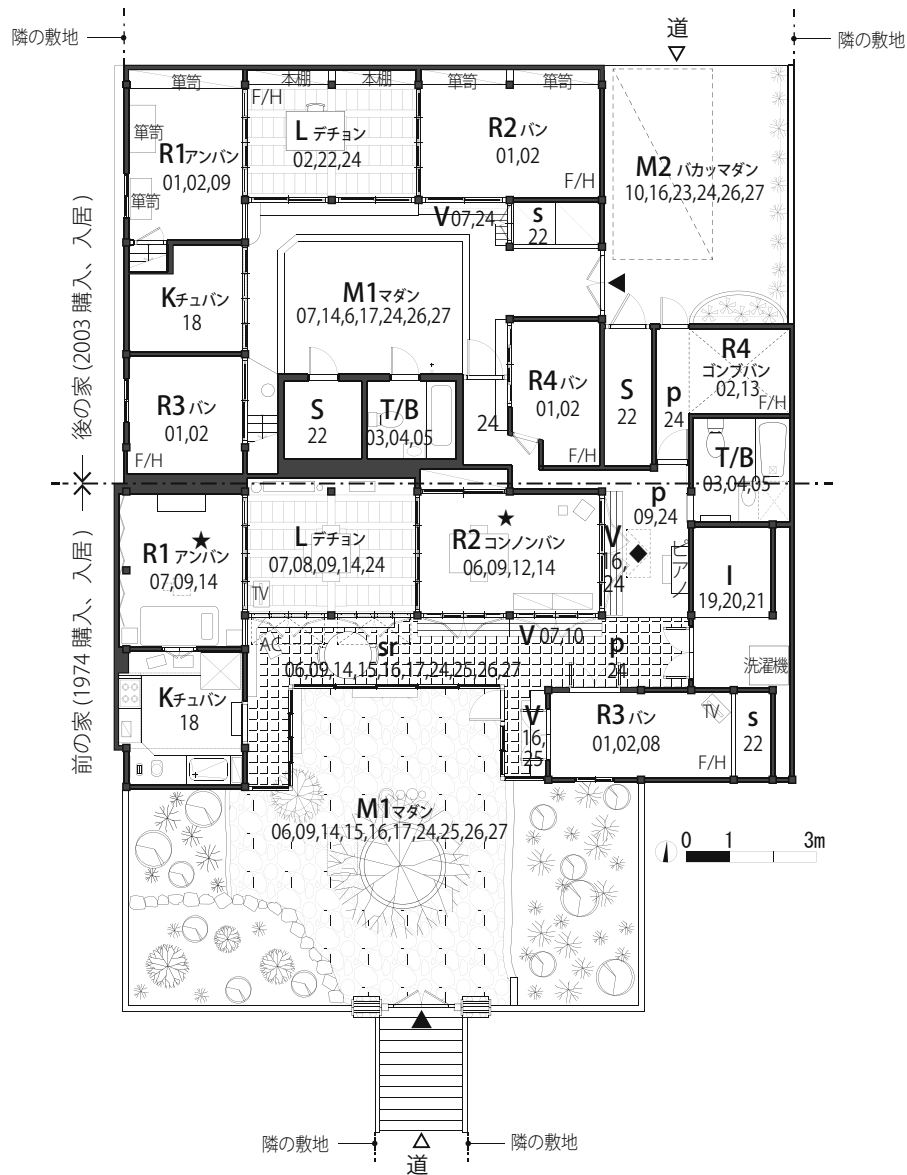
写真 5-5 冬期の様子 (1)
(サンルーム (sr) を取り付けた時)



写真 5-6 夏期の様子 (2)
(建具を全て開放した時)



写真 5-7 冬期の様子 (2)
(サンルーム (sr) を取り付けた時)



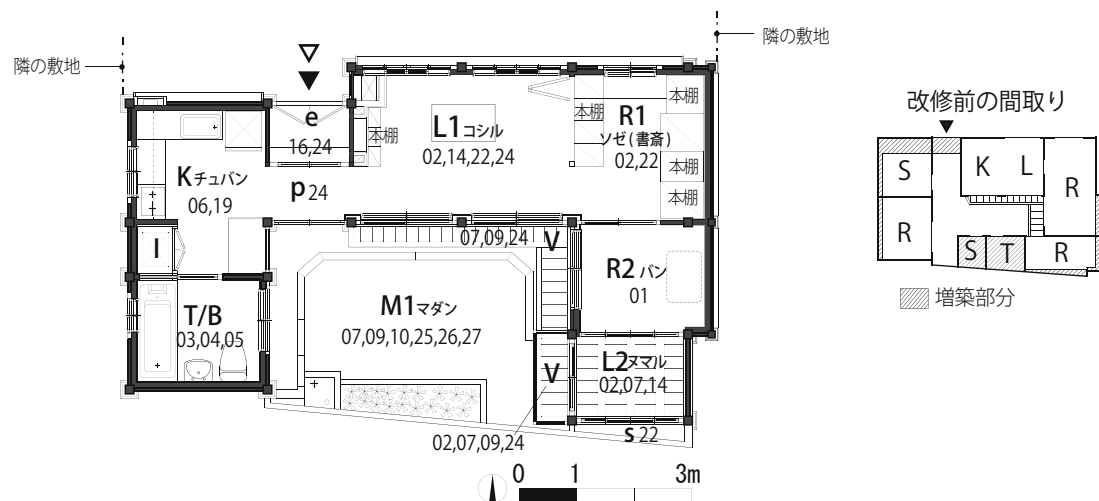
凡例

- | | | | | | | |
|-------------|--------|-----------|-------------------------|---------------|-------------|---------------------|
| △ 道路からのアクセス | G 屋敷入口 | sr サンプルーム | 01 睡眠, 休養 | 02 執筆, 読書, 勉強 | 03 入浴, シャワー | 04 洗面 |
| ▲ 屋敷入口 | M1 内庭 | B 浴室 | 05 排泄 | 06 食事 | 07 休憩 | 08 テレビ視聴 |
| ≡ フローリング | L 居間 | I 洗濯室 | 09 趣味生活 (飼育, 音楽, 日曜大工等) | 10 園芸 | 11 遊び | 12 団らん |
| ▨ 板張り | R 部屋 | S 倉庫 | 13 スポーツ・ゲーム | 14 応接 | 15 パーティ | 16 井戸端会議, 会話, 訪問者対応 |
| ▨ 屋根裏 | K 台所 | s 押入 | 17 作業 (荷造, 修理等) | 18 調理, 食器洗い | 19 洗濯 | 20 物干 |
| ▨ 部戸 | V 縁側 | a 屋根裏 | 21 アイロンがけ | 22 収納, 収蔵 | 23 駐車又は駐輪 | 24 移動 |
| | T 便所 | rt 屋上 | 25 観賞, 景観形成 | 26 日照確保 | 27 通風確保 | |

F 扇風機 H ヒーター AC エアコン ★ 伝統方式のオンドルを再現して床暖房をつける部屋 ◆ 薪の入れ口

※ 英字の横の語は住まい手による呼び名で、「チュパン：厨房」、「ゴンブパン：勉強部屋」、「バカマダン：外庭」を指す（左記以外のカタカナは資料編の「対訳用語集」を参考）。「R1」はP氏が使う部屋である。「R2, R3, R4」は下宿生が使う部屋である。

図 5-1 P 邸の改修後の現状



凡例

△ 道路からのアクセス	G 屋敷入口	e 玄関	01 睡眠, 休養 02 執筆, 読書, 勉強 03 入浴, シャワー 04 洗面
▲ 屋敷入口	M1 内庭	B 浴室	05 排泄 06 食事 07 休憩 08 テレビ視聴 09 趣味生活 (飼育, 音楽, 日曜大工等) 10 園芸 11 遊び 12 団らん 13 スポーツ・ゲーム 14 応接 15 パーティ 16 井戸端会議, 会話, 訪問者対応
≡ フローリング	L 居間	I 洗濯室	17 作業 (荷造, 修理等) 18 調理, 食器洗い 19 洗濯 20 物干
≡ 板張り	R 部屋	S 倉庫	21 アイロンがけ 22 収納, 収蔵 23 駐車又は駐輪 24 移動
☒ 屋根裏	K 台所	s 押入	25 観賞, 景観形成 26 日照確保 27 通風確保
☒ 部戸	V 縁側	a 屋根裏	
	T 便所	rt 屋上	

図 5-2 R 邸の改修後の現状



写真 5-8 K からみたヌマル (L2) と縁側 (V) の様子



写真 5-9 マダン (M1) からみた L2 と V の様子



写真 5-10 L2 の内部の様子



写真 5-11 M1 の様子

その他に、P邸では薪を使う伝統的なオンドル暖房を一部の部屋に適用している（図5-1「★、◆」）。P氏は、毎年秋の終頃に下宿生たちに薪割り作業をしてもらい、冬になると自ら薪をくべて部屋を暖める。冬になると板張り空間である大庁にはカーペットを引いて保温性を高める。夏はマダンに面する建具を全て開放し、風通しを最大限に確保しながら生活している。冬になると軒下空間に取り外し可能なサンルームを付ける。

以上から、P邸では、季節に対応したチェの使われ方が見られる。なお、このような生活は、伝統建具や外見、大庁の仕上げなど、伝統的な住空間を維持継承しながら季節に対応しようとする住まい手の工夫によって実現されていることが分かる。P邸では、住宅と住まい手が働きかける中で季節に対応した生活の良さを享受しているといえる。

(2)R邸におけるチェの使われ方

R邸では、住まい手の提案によって新たに計画された朝鮮張りのヌマル（図5-2「M2」）が夏の季節を楽しめる生活の場となっている。建具を開け風通しと採光を最大限に確保しながら接客や茶道、休憩などを行う空間として使われる。また、梅雨の季節には雨が降るマダンの風景を観賞しながら雨の音を聞く空間となる。ヌマル（L2）は暖房設備を備えていないため、冬になると物置として使われている。

以上から、R邸では、P邸と同様、季節に対応した生活の良さを享受しているといえる。なお、このような生活は韓屋におけるチェとマダンからなる住空間に住む良さを住まい手が自ら過去の経験によって体得し、その良さを現在の住まいにおいても再現しようとする意識と意図によって実現されていることが分かる。

5.3.2 マダンの使われ方

P邸では冬に入る前までは食事や休憩、パーティ、園芸、草花観賞、日曜大工、接客等を行う空間となっている。R邸では、休憩や犬の飼育、園芸、観賞等を行う空間となっている。冬期になると、P邸とR邸両方ともマダンは主に日照確保や通風確保等の環境調整機能をする空間として使われる。さらに、R邸では、夏向けの空間として再現した朝鮮張りの板の間に座って梅雨の風景を眺めたり雨の音をきいたりしながら季節感が感じられる生活が営まれている。このことから、R邸ではマダンは住まい手にとって自然と共に住む生活感を与えられる存在であるといえる。

一方、第2章から4章で扱った韓国人による韓屋の再生活用事例におけるマダンの使われ方とは異なっており、P邸とR邸ではマダンで洗濯物を干す行為はしない。両氏とも洗濯室の中に乾燥機を設置し、季節に関係なく洗濯物は機械で乾燥させていることは韓国人の生活習慣と相違している。なお、インタビューの内容から、P氏とR氏両氏とも洗濯物などのプライベートなものを屋外に出したくないと考えていることが分かった。一般化はできないが、マダンの使い方に対する韓国人と外国人の価値観に差異があると推察される。

5.4 チェとマダンとの関係

5.4.1P 邸におけるチェとマダンとの関係

図 5-3 に、P 邸におけるチェとマダンとの関係を示す。P 邸では、5.2 と 5.3 に述べたように夏を快適に過ごすための開放的な板張り空間であるマルと、冬を快適に過ごすためのオンドル部屋が共存する伝統的な住空間の仕組みが継承されている。そのような状況の下、夏期は前の家の「M1」と「L」、「M1」と「R2」の建具を開閉することによって住まい手が自らチェとマダンとの関係を調節しながら季節に応じて暮らしている。なお、引き戸・開き戸・部戸が組み合わされている伝統建具の利用によってチェとマダンとの関係の調節の柔軟性が確保されているといえる。冬期は、取り外し可能な DIY のサッシを軒下に取り付けて建具を開閉することによって、住まい手が自らチェとマダンとの関係を調節しながら季節に応じて暮らしている。なお、このような新たな試みは伝統建具を維持継承しようとする住まい手の意志に伴うものである。以上から、P 邸では、伝統建具と新たに工夫された現代の建具の組み合わせによってチェとマダンとの動線・視線の接続のバリエーションがさらに増え、建具の開閉によって季節に対応する伝統的な生活の良さが享受されているといえる。

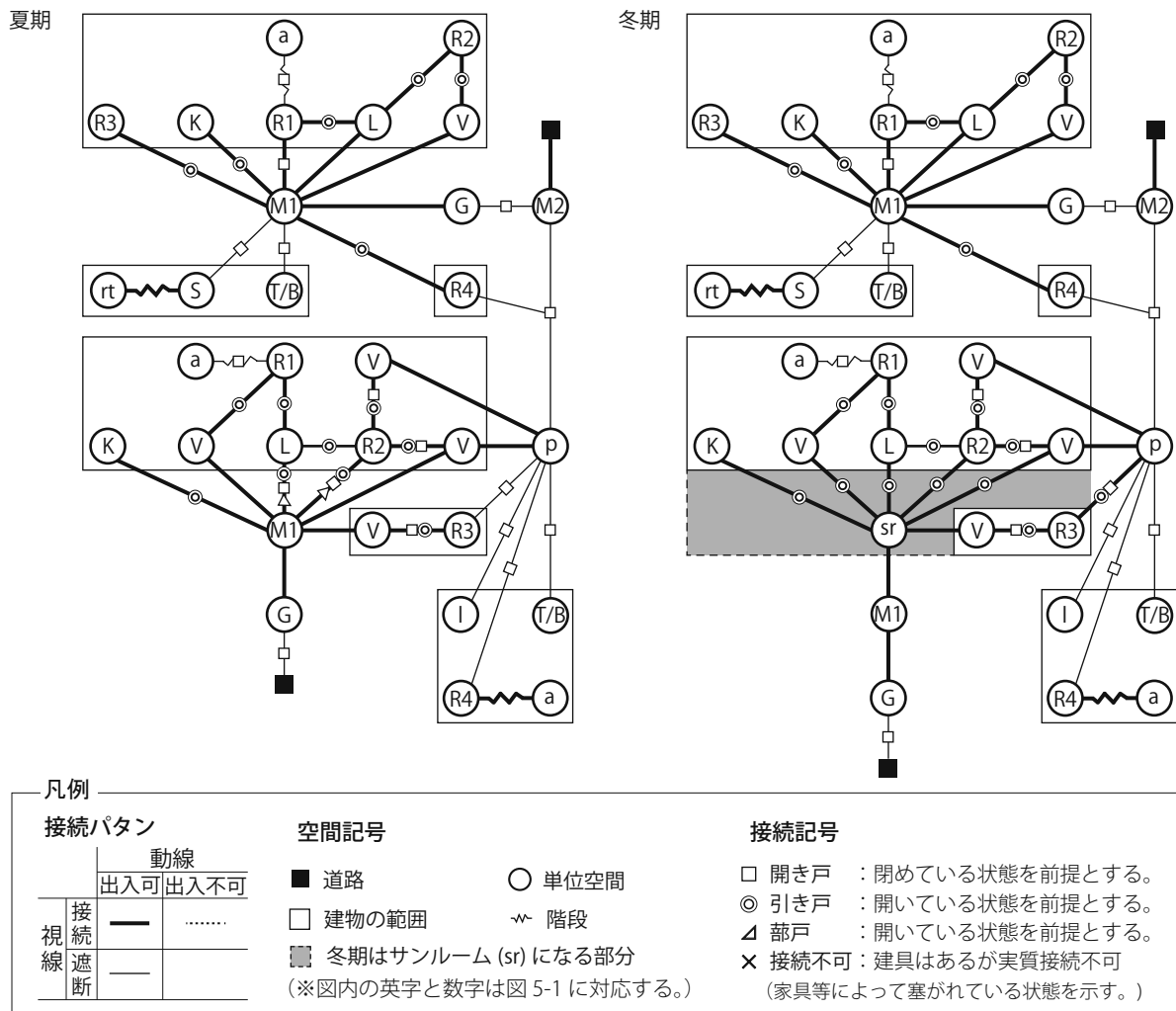


図 5-3 P 邸におけるチェとマダンとの関係

5.4.2 R 邸におけるチェとマダンとの関係

図 5-4 に、R 邸におけるチェとマダンとの関係を示す。

R邸では、5.2と5.3に述べたように、オンドルとマルが共存する伝統的な住空間を再現しようとした住まい手によって、ヌマル（L2）が新たに計画された。それに伴い、夏期は建具を開けることによってマダン（M1）と縁側（V）とヌマル（L2）との動線・視線が常に接続可能な状態となる。また、冬期は建具を閉めることによってマダン（M1）と縁側（V）とヌマル（L2）との動線・視線を閉鎖可能な状態となる。一方、本章の研究対象P邸や第4章の研究対象K邸で建具の開閉方式の多様化によってチェとマダンとの関係の調節の柔軟性を確保しているのに対し、R邸ではほとんどの開口部に引き戸を取り入れていることが分かる。R邸では、チェとマダンとの動線は建具の開閉によって接続と遮断を選択的に適用し、チェとマダンとの視線は常に接続する住環境を確保しているといえる。なお、このことから、R邸では自然の接続によるチェとマダンとの関係が重視されていることが分かる。

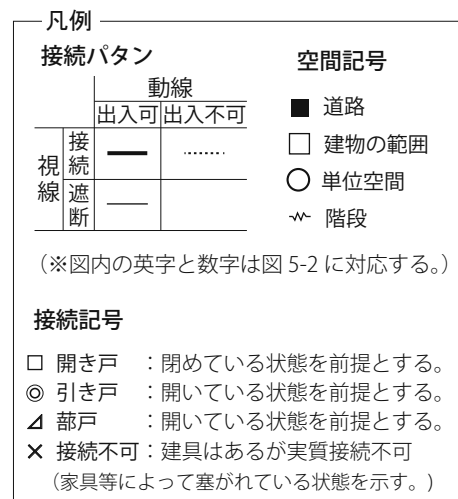
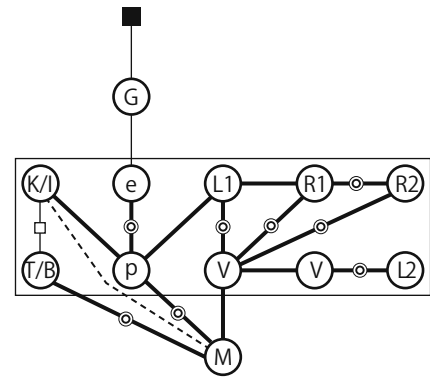


図 5-4 R 郎におけるチェとマダンとの関係

5.5 小結

(1) チェとマダンからなる住空間について

対象事例では、韓国人とは歴史文化の背景や生活習慣が異なっている外国人住まい手の好みに対応して様々な改修が行われたものの、チェとマダンからなる住空間の形式は維持されていることが分かった。一方で、P氏とR氏は、入居前からすでに韓屋に住んだ経験があり、季節に対応して自然と共に暮らすことができる住空間に愛着を持っていたため、チェとマダンとの関係が継承されている側面もあることが明らかになった。本章で扱った2軒の事例で見られる現状から韓屋における外国人の住み方を一般化することはできない。しかし、チェとマダンからなる韓屋の住空間は、韓国人とは異なる歴史文化の背景や価値観を持った外国人住まい手であるP氏とR氏の住要求にも対応している点から、韓屋の可能性が確かめられたといえる。

(2) チェとマダンの使われ方の特徴

対象事例では、夏を快適に過ごすための開放的な板張り空間であるマルと、冬を快適に過ごすためのオンドル部屋が共存する伝統的な住空間の仕組みが継承されており、季節に対応した生活が享受されて

いることが明らかになった。特に、P邸では、夏はマダンに面するチェの建具を開放して最大限の風通しを確保しながら過ごし、冬はマダンに面するチェの建具を閉鎖するとともに、取り外し可能なDIYのサッシを軒下に取り付けて温熱環境を調節しながら過ごしている。また、R邸では、マル空間が新たに計画されており、季節に応じて住空間を使い分けている。マダンは、風通しや日照確保、犬の飼育、パーティ、季節の風景観賞、薪割作業、物置など様々な用途で使われている一方、P邸とR邸どの事例においても物を干す行為は見られなかった。この点は第2章から第4章まで扱った韓国人の事例とは異なる現状であり、その理由について、P氏とR氏両氏とも洗濯物などのプライベートなものを屋外に出して見られたくないと語られた。一般化はできないが、マダンの使い方に対する韓国人と外国人の価値観に差異があると推察される。

(3) チェとマダンとの関係からみた住み方

対象事例では、チェの各空間とマダンが視線と動線ともに接続することによってチェとマダンとの関係は全体として開放的となっていることを明らかにした。特に、P邸では、マダンに面する伝統建具を維持継承しながら季節に対応するために取り外し可能なDIYのサッシを新たに取り入れることによって、チェとマダンとの動線・視線の接続のバリエーションが改修後さらに増え、建具の開閉によってチェとマダンとの関係を調節しながら季節に対応する生活の良さが享受されていることが明らかになった。なお、R邸では、床暖房を付けない開放的な板張りのマルを新たに取り入れることによって、建具の開閉によってチェとマダンとの関係を調節しながら季節に対応する生活の良さが享受されていることが明らかになった。

第5章参考文献

- ・金海梨, 高田光雄: 韓屋におけるチェとマダンのつながりに対応した住生活の特徴に関する一考察, 日本建築学会計画系論文集, Vol.80, No.718, pp.2763-2770, 2015.12
- ・金海梨, 高田光雄, 金泰永: 都市韓屋の増改築事例における出入関係からみたチェとマダンのつながり方, 日本建築学会計画系論文集, No.727, 2016.9
- ・Robert J. Fouser: 서촌홀릭 (西村ホリック), sallimbooks, 2016.4
- ・Robert J. Fouser: 미래시민의 조건 (未来市民の条件), sejongbooks, 2016.3
- ・Robert J. Fouser (共著): 서울의 재발견 (ソウルの再発見), paperstorybook, 2015.8
- ・Lim Sangbeom (取材): LIVING SENSE, (株)ソウル文化社, pp.186-191, 2013. 4
- ・黄仁範: 작은 한옥 한 채를 짓다 - 서촌 과 교수택 어락당 탄생기 - (小さな韓屋一棟をつくる - 西村のファ教授宅語楽堂誕生記 -), dolbegae, 2014.4

第 6 章

結論

6.1 各章で得られた知見

本研究では、韓屋におけるマダンの存在、チェとマダンからなる韓屋の住空間の特徴に着目し、「韓屋におけるチェとマダンとの関係に対応した住み方」を明らかにした。なお、それにもとづいて、本研究では、既存韓屋の活用及び今後の新たな韓屋計画のあり方について考察した。本節では、各章で得られた知見を述べ、次節において本研究の結論を述べる。

第2章で得られた知見

第2章では、韓国の現代文学作品『庭の深い家』を対象とし、朝鮮戦争直後の韓屋における「チェとマダンがつながった住空間」、それに対応してきた「住み方」の特徴について明らかにした。

(1) チェとマダンからなる住空間について

対象住宅では、伝統韓屋のように複数のチェと複数のマダンによって家全体が形成されており、チェとマダンがつながった空間構成が持続されていることが明らかになった。一方で、道路から住宅の最も奥の方に至るアクセス方法は、伝統韓屋より経路が簡略化されていることが明らかになった。なお、伝統韓屋では一つのチェに必ず一つのマダンが対応しているのに対して、対象住宅では内庭が複数のチェに対応していることが明らかになった。

(2) チェとマダンとの関係に対応した住み方について

チェの使われ方からみると、チェとマダンがつながった伝統韓屋の住空間構成の特徴は持続されているものの、それに対応した住み方においては、身分や性別による伝統韓屋での秩序は持続されていないことが明らかになった。対象住宅では、物理的な形は伝統韓屋に似ているが、その空間に対応した住み方はむしろ都市韓屋のように家族同士の空間として使われていることを指摘した。

マダンの使われ方からみると、対象住宅では伝統韓屋における見るためのマダンと使うためのマダンが両方存在しており、住まい手の日々の生活を多面的にサポートしていることが明らかになった。一方、伝統韓屋では見るためのマダンである舎廊庭と使うためのマダンである内庭が分けられていたのに対し、対象住宅では、内庭に二つの機能が共存していることが明らかになった。さらに、富裕層の大家世帯と貧困層の借家世帯が同居する対象住宅において、内庭は、階層間の物理的距離が確保される緩衝空間としての役割も果たしていることが明らかになった。それをもとに、対象住宅では、伝統韓屋や都市韓屋では見られないマダンの新たな役割も見られていることを指摘した。

以上のように、第2章では、対象住宅におけるチェとマダンとの物理的関係は時代を超えて持続される一方、戦後の住宅難や貧富の格差という社会状況の下、時代特有の住み方の特徴が良く表れていることを指摘した。

第3章で得られた知見

第3章では、都市韓屋の間取りの典型とされている中部地方のL字型韓屋を対象とし、近代都市化に伴う住要求に対応した韓屋における住み方を明らかにした。まず、住空間の物理的状态と実際の使われ方を明らかにした上で、動線の接続状態からチェとマダンとの関係进行分析し、対象事例における住み方について明らかにした。

(1) 増改築による物理的状态の変化

対象事例では、空間の不足を補うために建物後面の増築が行われていること、半屋外空間である縁側が収納空間として内部化されていることを明らかにした。その結果、チェとマダンにおける物理的つながりが希薄化していることが分かった。このような現状から、事例全体としてチェの各室をより閉鎖化する増改築が行われてきことを指摘した。また、水道の普及、燃料の発達に伴う衛生設備の改善、炊事と暖房設備の改善のために水回り空間が増改築されていることを明らかにした。このことから、住設備に対する住まい手のニーズや、それらに起因した物理的变化が大きいことが分かった。さらに、断熱性と気密性を重視し建具が木製枠からアルミサッシへと変更されており、本来の外見が変質されていることを指摘した。以上から、韓屋を現代に合致した住まいとして発展させていくためには、温熱環境を改善する必要があること、収納空間の確保が必要であること、また、屋内空間の快適性のみを重視した改修は韓屋の外観意匠を損なわれるおそれがあることを指摘した。

(2) チェとマダンの使われ方の変化

チェは、事例全体として使われ方が閉鎖的になっていることを明らかにした。屋内空間の断熱性や気密性を重視し建具の変更が行われていること、収納空間確保のために半屋外空間である縁側が内部化されていることが明らかになった。その結果、季節による建具の開閉により住まい手自らがチェとマダンとの関係を調整する住み方は失われつつあることを指摘した。マダンは、事例それぞれの住まい手の住要求に対応し、日常生活をサポートする空間として使われ続けていることを明らかにした。一方、マダンの中央に固定した花壇を設置し、マダンを主に家庭菜園として使われていること、また、マダンの中央が空地に維持されている事例の場合、その目的は、車の使用や家族のライフサイクルの変化に伴い事例ごとに異なっており、目的に応じて使われ方が固定化していることを明らかにした。このことから、対象事例のマダンでは、今後ありうる家族のライフステージや住要求の変化などに柔軟な対応が困難になる可能性があることを指摘した。

(3) チェとマダンとの関係からみた住み方

全体としてチェの各室からマダンへの出入口が減っており、大庁は、チェの各室とマダンをつなぐ動線の接点となっていることが明らかになった。一方、台所とマダンとの動線は入居後から現在まで維持されており物理的關係が存在すること、壺の利用実態から台所とマダンには使われ方の点でも關係が存在することが明らかになった。チェとマダンとの出入り口の消滅による動線接続の変化の仕方は、二種類あることを指摘した。一つは、壁を設置して開口が全くない空間とすること、また一つは、出入口は塞ぐが、風通しや採光等の環境調整機能を維持するための窓はある空間とすることである。また、チェとマダンとの物理的關係は存在するが、実際の使われ方の点では出入がなく、出入口を閉鎖している

現状もみられた。このことから、対象事例では、時代や社会の変化に伴い増改築が行われ、チェとマダンとの物理的関係と実際の使われ方が閉鎖化していることを指摘した。

第4章で得られた知見

第4章では、2000年代以降に入居している近年の韓屋再生活用事例を取り上げ、住まい手の多様な価値観に対応した韓屋における住み方を明らかにした。まず、住空間の物理的実態と実際の使われ方を明らかにした上で、動線・視線の接続状態からチェとマダンとの関係を分析し、対象事例における住み方について明らかにした。

(1) チェとマダンからなる住空間の維持と変化

事例2軒ともチェやマダンにおける増築が一切行われていない状態で改修が行われており、さらに、改修後、住空間の規模と形態が元に戻されていることを明らかにした。なお、そのような状況の下「伝統的な空間意匠を継承するための建具の変更、チェとマダンとの豊かな接続関係を実現させるための縁側の増設、家族のライフステージの変化に対応するための間取の変更」など、住まい手の住要求と好みに合わせた改修が行われていることを明らかにした。以上から、対象事例では、チェとマダンからなる住空間形式を継承しつつも現代の住要求を補えるように改修されていること、このような改修は、住まい手の意図や意志のみならず、韓屋の住空間に対する十分な理解と実戦的経験を持った建築家の介入があったからこそ実現可能だったことを明らかにした。

(2) チェとマダンの使われ方の特徴

子育て世帯であるJ邸では、昼間には家全体が子供の居場所となっており、子供中心の生活がなされていること衛お明らかにした。特に縁側は、チェからマダンへの移動経路としてだけでなく、様々な行為が行われる生活空間であることを明らかにした。K邸では、変化するライフステージに対応して家族と家族以外の人が家をシェアする仕組みによって住宅全体が活用されていること、改修によって再現した大庁では、季節に応じた建具の開閉によって住まい手自らが室内環境を制御する生活が実現されていることを明らかにした。なお、事例全体としてマダンは、住まい手の日常生活を多面的にサポートしており、単に空き地ではなくチェと連続した屋外の生活空間として認識されていることを明らかにした。さらに、K邸のマダンは、血縁関係の家族と有料の宿泊客の同居を成立させる緩衝空間としての役割を果たしていることを明らかにした。また、K邸では、都市の狭い敷地でありながらも観賞用のマダンを新たに取り入れており、見るためのマダンに対するニーズもあったことを指摘した。

(3) チェとマダンとの関係からみた住み方

改修後、チェの各空間とマダンが視線と動線ともに接続することによってチェとマダンとの関係は全体として開放的となっていることを明らかにした。特に、縁側の存在によって建具を介さずに常にチェとマダンとの視線と動線が接続していること、縁側は住まい手の日常生活を多面的にサポートする空間となっていることから、縁側の存在によってチェとマダンとの関係の開放性が強化されていることを指摘した。さらに、K邸では引き戸の外側に開き戸や蔦戸などを取り入れて建具を二重にすることによって、建具の開閉によって住まい手自らがチェとマダンとの関係を調節することができる状態となっているこ

とを明らかにした。以上から、チェとマダンからなる伝統的住空間の形式を維持しながらも住まい手の多様な価値観に対応した改修を通じて現代に合致した生活が営まれていること、チェとマダンとの動線・視線の接続のバリエーションが改修後さらに増え、住まい手自らが建具の開閉によってチェとマダンとの関係を調節しながら季節に対応する生活の良さが享受されていることを明らかにした。

第5章で得られた知見

第5章では、第4章の考察を踏まえ、韓屋の住空間の普遍的価値をより多面的に考察するために、外国人の事例における住み方を検討した。

(1) チェとマダンからなる住空間について

対象事例では、韓国人とは歴史文化の背景や生活習慣が異なっている外国人住まい手の好みに対応して様々な改修が行われたものの、チェとマダンからなる住空間の形式は維持されていることを明らかにした。一方で、P氏とR氏は、入居前からすでに韓屋に住んだ経験があり、季節に対応して自然と共に暮らすことができる住空間に愛着を持っていたため、チェとマダンとの関係が継承されている側面もある。本章で扱った2軒の事例で見られる現状から韓屋における外国人の住み方を一般化することはできない。しかし、チェとマダンからなる韓屋の住空間は、韓国人とは異なる歴史文化の背景や価値観を持った外国人住まい手であるP氏とR氏の住要求にも対応している点から、韓屋の可能性が確かめられた。

(2) チェとマダンの使われ方の特徴

対象事例では、夏を快適に過ごすための開放的な板張り空間であるマルと、冬を快適に過ごすためのオンドル部屋が共存する伝統的な住空間の仕組みが継承されており、季節に対応した生活が享受されていることを明らかにした。特に、P邸では、夏はマダンに面するチェの建具を開放して最大限の風通しを確保しながら過ごし、冬はマダンに面するチェの建具を閉鎖するとともに、取り外し可能なDIYのサッシを軒下に取り付けて温熱環境を調節しながら過ごしている。また、R邸では、マル空間が新たに計画されており、季節に応じて住空間を使い分けている。マダンは、様々な用途で使われている一方、P邸とR邸どの事例においても物を干す行為は見られなかった。なお、インタビューの内容から、韓国人の事例とは異なって、外国人であるP氏とR氏の価値観では洗濯物などのプライベートなものを屋外に出すことは常識外のことだと認識されていることを明らかにした。

(3) チェとマダンとの関係からみた住み方

対象事例では、チェの各空間とマダンが視線と動線ともに接続することによってチェとマダンとの関係は全体として開放的となっていることを明らかにした。特に、P邸では、マダンに面する伝統建具を維持継承しながら季節に対応するために取り外し可能なDIYのサッシを新たに取り入れることによって、チェとマダンとの動線・視線の接続のバリエーションが改修後さらに増え、建具の開閉によってチェとマダンとの関係を調節しながら季節に対応する生活の良さが享受されている。なお、R邸では、床暖房を付けない開放的な板張りのマルを新たに取り入れることによって、建具の開閉によってチェとマダンとの関係を調節しながら季節に対応する生活の良さが享受されている。

6.2 結論

本研究では、住んでいる時代と住まい手の価値観が異なった事例を取り上げ、韓屋におけるチェとマダンとの関係からみた住み方を解明することによって伝統的な住空間の現代的価値を再評価するとともに、既存韓屋の活用を含めた韓屋の住空間計画のあり方について考察した。本研究において明らかにした結論を以下に示す。

(1) チェとマダンからなる韓屋の価値

伝統韓屋から現在に至るまで引き継がれているチェとマダンからなる韓屋の住空間形式は、1950年代の朝鮮戦争直後の激動期から現在に至るまで、時代や社会の変化、異なる価値観を持った住まい手の住要求に対応できていることを、複数の事例に対する住み方調査から明らかにした。チェとマダンからなる韓屋の住空間形式は、時代に束縛されない普遍性をもった住宅計画の要素であると考えられる。

(2) 様々な状況を柔軟に支援するマダンの価値

本研究で扱った全ての事例におけるマダンは、単なる屋外の空地ではなく多様な価値観を持つ住まい手の住要求を支援する屋外の生活空間として認識されており、各事例における日常の生活を多面的にサポートしていることを明らかにした。このことから、マダンでの生活行為は時代によって変化はあるが、様々な用途で利用されるサービスヤードとして、マダンの機能は時代を超えて継承されていることを明らかにした。なお、伝統韓屋における緩衝空間としてのマダンの役割は時代を超えて継承されていることを明らかにした。マダンは、1950年代の朝鮮戦争直後の社会状況の下では大家世帯と借家世帯の心理的・物理的距離を確保する緩衝空間として、近年の韓屋の再生活用事例では血縁関係の家族と有料の宿泊客が心理的・物理的距離を確保しながら一時的に同居する生活を成立させる緩衝空間としての役割を果たしている。以上から、対象事例におけるマダンは、ライフステージの変化に柔軟に対応できる緩衝空間として重要な役割を果たしていることを明らかにした。

(3) チェとマダンとの関係の継承と韓屋の居住価値

韓屋におけるチェとマダンとの関係の継承は、建具の開閉によってチェとマダンとの関係を調節しながら季節に対応することができる物理的状態、また、そのような物理的状態のもとに自然とともに暮らす生活の良さを享受しようとする住まい手の意志によって実現されていることを明らかにした。温熱環境の改善や収納空間確保という課題は既存韓屋に共通する課題であるが、その課題への対応は、住まい手が韓屋を、単に住める状態に改修しているのか、伝統的な住空間とそこで培われてきた生活文化を再評価した上で現代の住まいとして再編しているのか、によって異なる。住宅の物理的改善を重視した事例では、半屋内外空間である縁側空間を収納空間化することによって本来の縁側の機能が消滅し、断熱性や気密性を高めるために開口部を改修することによって屋内外空間の動線・視線の接続が物理的にも実際の生活の面でも希薄化している現状を指摘した。一方、韓屋における伝統性の継承を重視した事例では、収納空間確保の問題については、住まい手の意志によって以前使われていた家具を第三者に譲渡して最低限の家具のみを持って韓屋に入居する現状が見られた。また、温熱環境改善の問題については、

伝統建具や本来の外見の継承を重視した住まい手の工夫によって軒下に取り外し可能な建具を取り入れる新たな試みが見られた。以上から、韓屋におけるチェとマダンとの関係の継承を通じて季節に対応する生活の良さを享受するためには韓屋の住空間や生活文化に対する住まい手の理解、それらを現代的に再編しようとする住まい手の意志が重要であることを明らかにした。なお、住まい手の意志や意図は、韓屋の住空間について深い知識をもつ専門家の介入によって実現されていることを明らかにした。

さらに、チェとマダンとの関係に基づく生活は、夏の空間と冬の空間を使い分けることや、マダンに面する建具を二重化し住まい手自らが屋内環境を制御することにより、季節に対応していることを明らかにした。また、建具の種類の多様化または建具の二重化は、季節に対応した生活の実現のみならず、動線と視線の接続・遮断を調整し、居住者同士のプライバシーを確保する手段としても活用されていることを明らかにした。建具の開閉によってチェとマダンとの関係を住まい手自らが制御する住環境は、韓屋における伝統性の継承を超え、現代住宅計画においても有効なものである。

以上から、韓屋におけるチェとマダンとの関係からみた住み方の実証は、チェとマダンからなる住空間の文化、そこで培われてきた生活の文化を保全・継承・発展させていく観点を含めて今後の韓屋のあり方を考える際に重要な課題であることが確かめられた。

6.3 今後の課題

本研究では、韓屋におけるチェとマダンからなる住空間形式や、空間同士の動線・視線の接続パタンの分析から、チェとマダンとの関係からみた住み方を明らかにし、伝統的住空間の現代的価値を再評価するとともに、既存韓屋の活用を含めた韓屋の住空間計画のあり方について考察した。

既存韓屋の活用も含めて、近年の韓屋計画においては、チェとマダンとの関係からみた住み方の継承・発展への対応がまだ十分とは言えない。第3章で扱った事例では、近代都市化に応じた住要求によって自然発生的に増改築が行われ、開口部の削除または閉鎖によってチェの各空間の使われ方が閉鎖化し、本来は屋外の生活空間であるマダンの使われ方が固定化している現状が確認された。さらに、マダンの使われ方の固定化は、チェの使われ方の閉鎖化と同時に起こっていることを明らかにした。なお、そのような現状は、韓屋における温熱環境の改善、収納空間の確保の問題に対して住宅の物理的性能改善を重視した価値観に伴うものであることを指摘した。また、マダンの使われ方の固定化は、結果的に今後住まい手の価値観の変化、ライフステージの変化への柔軟な対応のためには障害要素となりうることを指摘した。

以上を踏まえ、既存韓屋の活用を含めた韓屋の住空間計画のあり方について考察した。得られた知見以下の通りである。

(1) 住まい手自らがチェとマダンとの関係を調節可能な住空間計画

韓屋におけるチェとマダンからなる住空間の良さ、季節に対応して自然と共に住む生活の良さを享受するためには、チェとマダンとの動線・視線の接続状態を建具の開閉によって住まい手自らが調節しな

がら生活することが可能な住空間計画が重要であると考えられる。そのためには、季節感を感じながら室内の温熱環境を住まい手自らが調整できること、住まい手同士のプライバシーの確保が可能であることが重要な条件となる。住まい手自らがチェとマダンとの関係を調節することが可能な住空間計画のためには、建具の開閉によって住環境を柔軟に調節しながら生活することができる建具の開発・適用が必要であると考えられる。

(2) ライフスタイル・ライフステージ変化への柔軟な対応を支援するマダンを中心とした住空間計画

本研究では、マダンは、単に敷地中央にある空地ではなく、韓屋におけるチェとマダンからなる住空間の良さ、季節に応じて自然と共に暮らす生活の良さを享受するために必要な屋外空間であることを明らかにした。なお、マダンは、4人の子供を持つ子育て世帯の事例では子供の遊び場として、血縁関係のある家族と血縁以外の構成員が一時的に同居する事例では構成員間の心理的・物理的距離を確保する緩衝空間として使われていることを明らかにした。一方、自動車の利用や固定した花壇の設置などによってマダンの使われ方が固定化している事例では、チェの使われ方も閉鎖化しており、チェとマダンとの関係が希薄化している現状を明らかにした。今後起こりうるライフスタイル・ライフステージの変化に柔軟に対応できるキャパシティのあるマダンの存在を重視した住空間計画が必要であると考えられる。なお、一部の事例では観賞用のマダンを新たに取り入れており、今後の韓屋計画においては見るためのマダンに対する住要求にも留意する必要があると考えられる。

(3) チェとマダンとの関係の開放性をもたらし縁側がある住空間計画

本研究では、縁側は時代に限らず、単にチェとマダンを物理的に結びつく物ではなく、マダンから引き入る自然を楽しむ生活空間として、また、住まい手同士の触れ合いの場として使われていることを明らかにした。なお、そのような生活行為によって、縁側はチェとマダンとの関係を物理的にも実際の利用の点でも開放的に調節する空間的装置として最も有効であることを明らかにした。韓屋におけるチェとマダンとの関係に基づいた生活の良さを十分に享受するためには、半屋内外空間である縁側の存在を適切に活かした住空間計画が必要であると考えられる。

(4) 住まい手と専門家の意識向上の必要性

本研究では、伝統的な住空間の文化と、そこで培われてきた生活の文化を保全・継承・発展も含めて既存韓屋を活用しようとする住まい手と専門家の意志や意図によって、韓屋におけるチェとマダンとの関係が継承され、季節に対応する生活の良さが享受されていることを明らかにした。今後韓屋を保全・継承・発展させていくためには、住まい手と専門家が自ら韓屋の伝統的住空間と生活文化の良さを十分に理解し、現代に合致したものとして継承・発展させようとする意識の向上が必要であると考えられる。

以上、本研究では特殊な少数事例の住み方を解明し、現時点での課題を述べた。これらの知見を発信し、今後さらなる研究の蓄積をもとに韓屋の住空間計画のあり方について議論を深める必要がある。

既報論文・著作一覧

関連論文

- ・金海梨, 高田光雄: 韓屋におけるチェとマダンのつながりに対応した住生活の特徴に関する一考察 - 韓国現代文学作品『庭の深い家』を対象として -, 日本建築学会計画系論文集 第 80 巻 第 718 号, pp.2763-2770, 2015 年 12 月 (本論文の関連章: 第 2 章)
- ・金海梨, 高田光雄, 金泰永: 都市韓屋の増改築事例における出入関係から見たチェとマダンのつながり方, 日本建築学会計画系論文集 第 81 巻 第 727 号, pp.1859-1867, 2016 年 9 月 (本論文の関連章: 第 3 章)
- ・Haeri Kim, Mitsuo Takada: A Study on the Relation between Chae and Madang based on the Way of Living in Urban Hanok, Proceeding of the KHA Conference, The Korean Housing Association, Vol.24, No.2, pp.185-190, 2012.11 (本論文の関連章: 第 4 章)
- ・金海梨, 高田光雄: 韓屋におけるチェとマダンとの関係からみた住み方に関する研究 - 建築家 J 氏の自邸と彼の作品における住空間の改修と使われ方の特徴から -, 日本建築学会計画系論文集, 査読中 (本論文の関連章: 第 4 章)

既報論文等一覧

学術論文 (審査付き)

No.	執筆題目	著者	掲載誌	発行機関	巻・号・頁	年月
1	A Research on the Spatial Change of the Main Room and Kitchen of traditional Utbangkkeokeum House in Cheongju City	Haeri Kim, Taiyoung Kim	Journal of the Korean Housing Association	The Korean Housing Association	Vol.20 No.6 pp.19-29	2009.12
2	都市韓屋におけるマダン (庭) の変容に関する調査研究 - 韓国清州市旧市街地の都市韓屋を対象として -	金海梨 高田光雄	住宅系研究報告会論文集 7	日本建築学会	pp.123-128	2010.12
3	韓国現代文学作品に見るチェとマダンの関係に関する一考察 - 小説『庭の深い家』に描かれた生活の様子を通じて -	金海梨 高田光雄	住宅系研究報告会論文集 9	日本建築学会	pp.7-12	2014.12
4	韓屋におけるチェとマダンのつながりに対応した住生活の特徴に関する一考察 - 韓国現代文学作品『庭の深い家』を対象として -	金海梨 高田光雄	日本建築学会 計画系論文集	日本建築学会	第 80 巻 第 718 号 pp.2763-2770	2015.12
5	都市韓屋の増改築事例における出入関係から見たチェとマダンのつながり方	金海梨 高田光雄 金泰永	日本建築学会 計画系論文集	日本建築学会	第 81 巻 第 727 号 pp.1859-1867	2016.9

研究報告 (学会発表)

No.	執筆題目	著者	掲載誌	発行機関	巻・号・頁	年月
1	A Case Study on the Exhibition Reuse of Korean Traditional Houses designated as Modern Cultural Heritage — Focused on Rhiwhachang・Choi Sunu House —	Haeri Kim, Minkyung Lee and Taiyoung Kim	Proceeding of the KHA Conference	The Korean Housing Association	Vol.20 No.1 pp.156-161	2008.4
2	Distribution Patterns and Habitable Floor Area by House Types in Traditional Urban Area of Cheongju	Haeri Kim, Taiyoung Kim	Proceeding of the KHA Conference	The Korean Housing Association	Vol.20 No.2 pp.125-130	2008.11
3	A Research on the Standup Kitchen Layout and Required Size of Korean Traditional Houses as Modern Architectural Properties	Haeri Kim, Taiyoung Kim	Proceeding of the AIK Conference	The Architectural Institute of Korea	Vol.29 No.1 pp.359-362	2009.10
4	清州市におけるウッパンコックン型住宅の生活空間の変容に関する研究—内房と釜屋に着目して—	金海梨 高田光雄	日本建築学会 学術講演 梗概集(関東)	日本建築学会	E-2 分冊 pp.19-20	2011.8
5	清州市都市韓屋における外部空間の使用状況に関する調査庭 (マダン) の使われ方に着目して	金海梨 高田光雄	日本建築学会 学術講演 梗概集 (東海)	日本建築学会	建築計画 pp.1153-1154	2012.9
6	A Study on the Relation between Chae and Madang based on the Way of Living in Urban Hanok	Haeri Kim, MitsuoTakada	Proceeding of the KHA Conference	The Korean Housing Association	Vol.24 No.2 pp.185-190	2012.11
7	韓屋建築家の自邸と彼の作品に現れる伝統的生活文化の保全再生の現状—既存韓屋の改修事例に見る伝統的生活文化の現代的継承 その1—	金海梨 高田光雄	日本建築学会 近畿支部 研究報告集	日本建築学会	計画系 pp.29-32	2014.5
8	外国人居住者の韓屋住まいに現れる伝統的生活文化の保全再生の現状—既存韓屋の改修事例に見る伝統的生活文化の現代的継承 その2—	金海梨 高田光雄	日本建築学会 近畿支部 研究報告集	日本建築学会	計画系 pp.33-36	2014.5
9	京都市都心部における細街路の現状—歴史細街路の維持保全に向けて—	大森 聡 森重幸子 高田光雄 前田昌弘 金海梨 西野克裕 村田真悟 久保由華 山崎圭史 W. Kent	日本建築学会 近畿支部 研究報告集	日本建築学会	計画系 pp.557-560	2014.5

No.	執筆題目	著者	掲載誌	発行機関	巻・号・頁	年月
10	韓屋建築家の自邸と彼の作品に見る伝統的生活文化の現代的継承－韓国における伝統的木造住宅の現代的価値に関する検証 その1－	金海梨 高田光雄 森重幸子	日本建築学会 学術講演 梗概集（近畿）	日本建築学会	建築計画 pp.983-984	2014.9
11	外国人居住者の住む韓屋改修事例にみる伝統的生活文化の現代的継承－韓国における伝統的木造住宅の現代的価値に関する検証 その2－	牛山あやか 金海梨 高田光雄	日本建築学会 学術講演 梗概集（近畿）	日本建築学会	建築計画 pp.985-986	2014.9
12	田の字地区内の細街路の属性－京都市都心部における細街路の現状 その1－	森重幸子 高田光雄 前田昌弘 金海梨 西野克裕 大森 聡 久保由華 山崎圭史 W. Kent	日本建築学会 学術講演 梗概集（近畿）	日本建築学会	都市計画 pp.1115- 1116	2014.9
13	田の字地区内の2006年以降に消滅した細街路－京都市都心部における細街路の現状 その2－	大森 聡 森重幸子 高田光雄 前田昌弘 金海梨 西野克裕 久保由華 山崎圭史 W. Kent	日本建築学会 学術講演 梗概集（近畿）	日本建築学会	都市計画 pp.1117- 1118	2014.9
14	A Study on the relationship of Chae and Madang in literary work － Focused on Korea contemporary literature novel 『House with a Sunken Courtyard』 －	Haeri Kim, Mitsuo Takada	Proceeding of 2015 APNHR Conference	The Korean Housing Association	Vol.24 No.2 pp.185-190	2015.4
15	韓国現代文学作品に見るチェとマダンの関係に関する一考察－小説『庭の深い家』に描かれた生活の様子を通じて－	金海梨 高田光雄	日本建築学会 近畿支部 研究報告集	日本建築学会	計画系 pp.57-60	2015.6
16	韓国現代文学作品に見るチェとマダンの関係に関する一考察－小説『庭の深い家』に描かれた生活の様子を通じて－	金海梨 高田光雄	日本建築学会 学術講演 梗概集（関東）	日本建築学会	建築計画 pp.1201- 1202	2015.9
17	外国人住まい手による都市韓屋再生事例の特徴に関する考察－韓国における伝統的木造住宅の現代的価値に関する検証 その3－	金海梨 高田光雄	日本建築学会 学術講演 梗概集（九州）	日本建築学会	建築計画 pp.1091- 1092	2016.8

報告書、雑誌論考など

No.	執筆題目	著者	掲載誌	発行機関	巻・号・頁	年月
1	Heisei-no-Kyomachiya, the Wooden House for Inheriting the Local Habitation Culture in Kyoto	Mitsuo Takada (著), Haeri Kim(訳者解説)	auri M 「Hanok」	Architecture & Urban Research Institute	Vol.1 pp.80-84 p.85	2012.9
2	原文：일본 교토의 헤이세이 교마찌야 모델주택 전시장 건립－지역에 뿌리내린 교토형 목조주택 보급의 실천적 대안－ 和訳：日本京都における平成の京町家モデル住宅展示場の建立－地域に根ざした京都型木造住宅普及の実践的対案－	金海梨	原文：건축과 도시공간 和訳：建築と都市空間	Architecture & Urban Research Institute	Vol.10 pp.95-98	2013.6

資料編

対訳用語集

用語						用語の解説
ハングル	漢字	読み方		対訳語		
		カタカナ	alphabet	日本語	英語	
한옥	韓屋	ハンオク (ハノク)	Hanok	韓屋	Hanok	韓国の地域に根ざした伝統的な木造住宅を指す。広義では住宅以外の建築も含めて、韓国の伝統的な木造の軸組で建てられている建築物を指す。
채	棟	チェ	Chae	建物	Residential building	建物、或いは建物の数を数える単位を指す言葉である。
마당	庭	マダン	Madang	庭	Yard, Garden	庭、敷地内の屋外空間である。チェに付属する生活空間であり、チェの機能や場所によって〇〇マダンと呼称される。
방	房	バン	Bang	部屋	Room	機能や使用主体によって〇〇バン、 〇〇シル(室)と呼称される。
안방	内房	アンバン	An-bang	奥の間	Master bedroom	家の中心になる部屋である。昼は女性が起居する内室、夜は夫婦寝室として使われる。
건넌방	越房	コンノンバン	Geonnon-bang	副室	Room across from the master bedroom	大庁を間にして内房の反対側にある部屋である。子女の部屋として使われる。
부엌	釜屋	プオク	Buok	台所	Kitchen	伝統的住空間では土間台所である。現在は台所を総称する言葉として用いられる。
다락	-	タラク	Darak	屋根裏	Loft, Attic	床を掘り下げたプオクの上部を利用して設置した、中二階物置一般に、アンバンのプオク側から出入する。
마루	抹楼	マル	Maru	板の間	Wooden floor	板張りの空間を総称する言葉である。
대청 대청마루	大廳(大庁) 大廳抹楼	デチョン	Daecheong Daecheong-mar	広い 板の間	Living Space with wooden floors	部屋と部屋の間にある板張りの大広間である。伝統韓屋のデチョンは朝鮮張りで仕上げられる。
뒷마루	退抹楼	トエツマル	Teo-maru	縁側	Narrow veranda with wooden floors	構造体の内側に作られた細長い形の板張り空間である。
쪽마루	片抹楼	チョツマル	Cho-maru	濡れ縁		構造体の外側に張り出した細長い形の板張り空間である。

謝辭

謝辞

本論文は筆者が京都大学大学院工学研究科建築学専攻博士後期課程に在籍中の研究成果をとりまとめたものです。本論文をまとめるにあたり、多くの方々からご指導、ご支援を頂きました。ここに記して謝意を表します。

京都大学大学院工学研究科教授・高田光雄先生には指導教員として本研究の実施の機会を与えて頂き、その遂行にあたって始終、ご指導を頂きました。多忙の中、本論文の研究対象地である韓国での現地調査に3回も同行して頂き、調査内容の分析、考察や論文の執筆に至るまで具体的なご指導を頂きました。先生には研究室内での指導だけでなく、研究室外での様々な調査や研究会、学会等への参加の機会を与えて頂きました。また、先生の研究に対する取り組み方を通じて、研究者としての心構えを学ばせて頂きました。博士後期課程入学以降現在に至るまで、始終変わらず丁寧にご指導頂きましたこと、心より感謝申し上げます。

京都大学大学院工学研究科教授・竹山聖先生、並びに、同大学院地球環境学堂教授・岡崎健二先生には副査としてご助言を頂くとともに、本論文の細部にわたりご指導を頂きました。各先生との議論を通じて本論文の意義を明確にすることができました。心より感謝申し上げます。

韓国清州大学建築学専攻教授・金泰永先生には大学院修士課程の指導教員としてご指導を頂きました。当時、韓屋の魅力と韓屋研究の必要性をご教示頂き、韓屋における生活実態を調査する機会を与えて頂きました。本論文の第3章における韓屋の住み方の分析は、修士課程時代の実測調査から得られた図面データをもとにしており、実測調査では金泰永先生、並びに、同研究室の先輩、後輩の方々から多大なるご支援とご協力を頂きました。心より感謝申し上げます。

多忙な日常生活のなか、住まい手の方々には研究意図を汲み、調査にご協力を頂きました。特に第4章と第5章のインタビュー対象であるジョ ジョング氏、Peter Bartholomew 氏、Robert J. Fouser 氏、キム ミギョン氏には長期にわたる調査にご協力を頂きました。なお、研究対象の住まい手でもある韓国 guga 都市建築代表・ジョ ジョング氏には同事務所の研修生として二か月間勤めながら韓屋計画の実践的経験を積む機会を与えて頂きました。心より感謝申し上げます。

韓国建築都市空間研究所の関係者の方々には、本論文の背景となる近年の韓屋関連政策調査や国家韓屋センターにおける新韓屋開発の取り組みの調査にご協力を頂きました。京都大学高田研究室出身の先輩でもある韓国建築都市空間研究所建築振興本部研究委員・ヨム チョルホ氏、清州大学在学時代の先輩でもある韓国建築都市空間研究所国家韓屋センター副研究委員・イ ミンジョン氏、韓国建築都市空間研究所国家韓屋センター長・イ カンミン氏(当時)、韓国建築都市空間研究所国家韓屋センター研究員・ファン ジュンホ氏(当時)には調査の実施にご協力を頂きました。心より感謝申し上げます。

京都大学大学院工学研究科教授・神吉紀世子先生には、先生が准教授として研究室に在籍されていた当時ご指導を頂きました。心より感謝申し上げます。

兵庫県立大学大学環境人間学部准教授・安枝英俊先生には、先生が助教として研究室に在籍されていた当時、研究室の活動全般をとりまとめられる中でご指導を頂きました。心より感謝申し上げます。

高田研究室のメンバーおよび関係者の方々には、研究遂行にあたり日頃より多くのご支援、ご協力を頂きました。京都大学大学院工学研究科助教・前田昌弘先生には、本論文について常に的確なご指摘とご助言を頂くとともに、励ましを頂きました。長谷川直子氏には、複雑な事務処理についてのご教示を含め、研究室生活や研究遂行にあたり多面的にご支援を頂くとともに、日頃から励ましを頂きました。ドクターゼミでは、大阪ガス株式会社エネルギー・文化研究所・加茂みどり氏、京都市住宅供給公社 京安心住まいセンター・ジョ ヒョンジュ氏、立命館大学グローバル・イノベーション研究機構専門研究員・土井脩史氏、兵庫県福祉のまちづくり研究所研究員・宮野順子氏、武庫川女子大学建築学科講師・森重幸子先生、井上晋一建築事務所・井上晋一氏より、本論文に対して有益なご助言とご指摘を頂くとともに、温かい励ましを頂きました。特に韓国人先輩であるジョ ヒョンジュ氏は、韓国の伝統的な住空間の現代的価値を論じる筆者の研究を客観的な視点から捉えておられ、常に貴重なご助言とご指摘を頂きました。また、森重幸子先生には、第4章の研究対象J邸の調査に同行して頂き、調査にご協力を頂きました。修士課程在籍中の後輩の方々には日頃から励ましの言葉をかけて頂くとともに、学位論文公聴会当日は資料の印刷や配布などにご協力を頂きました。また、韓国建築都市空間研究所研究委員・ヨム チョルホ氏、済州大学建築学部副教授・イ ヨンキュ氏、ハウジングシステム代表・リ ヒョンサン氏、釜山発展研究院研究員・ハン スンウク氏、岡山大学教育学研究科講師・関川華先生、東京大学大学院工学研究科特任研究員・サキヤラタ氏、人と防災未来センター研究員・本塚智貴氏、積水ハウス株式会社医療・介護推進事業部・山田雅之氏から、研究室生活や研究遂行にあたり多くのご助言とご支援を頂きました。心より感謝申し上げます。

留学生活において、財団法人堀田育英財団からは奨学金を頂き、経済的支援を頂きました。また、文部科学省からは外国人留学生学習奨励費を頂き、経済的に支援を頂きました。韓国清州大学出身の先輩でありながら京都大学大学院博士後期課程の先輩でもある朴重信氏、徐東帝氏には、留学生活について多くのご助言を頂きました。在日大韓キリスト教会の担任牧師・林明基氏、朴康子氏ご夫妻と信徒の方々、京都大学留学を通じて出会えた親友である韓国科学技術研究院研究員・田昇愚氏には、日頃から温かい励ましを頂きました。心より感謝申し上げます。

最後に、長い学生生活を温かく見守り、応援し続けた両親と姉、弟に心より感謝申し上げます。

2017年2月

金海梨

